
DRAGNOAH

雪芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D R A G N O A H

【Nコード】

N 6 9 8 5 N

【作者名】

雪芳

【あらすじ】

竜の血と肉で出来た世界ドラグノア。月に行きたいと願う聖女の依頼から、竜の血飲み子ディノの冒険譚が始まる。

第一話

ドラグノア。海に大地に空に、竜が住まうという土地。星は竜により巡り、支えられると言い伝えられる世界。

「ドラグノア最果て、東部火竜山脈；山頂」で、物語は始まる。

エアドラド皇国騎士団団長ガプ、団員オルセ、キリアの三人は、山脈ふもとの村アレの長きの要請により火竜退治すべく、登山していた。

霧が深く、錆びた色をした大地。人の住めぬ過酷な山を、もう三日以上登っている。重装備に騎士団の強固な体を武器にしても、辛いものがある。体力も気力も、もう長くは続かないだろう。

ガプは、もしや自分達は殺される為に派遣されたのでは無いのか、と考えていた。聖女であり竜皇国エアドラド皇女王レマの直々の命。

いくら相手が皇国のシンボル、竜であっても、直々の命とは珍しい。その上、派遣人数はたったの三人。

たとえ王族護衛騎士団金獅子に属す皇国一の腕のガプ、天才騎士オルセ、天才魔法騎士キリアの三人でも、低竜相手では少なすぎる人数だ。

時期皇王候補のジオ皇子の皇王としての資質を、ガプ、オルセ、キリアの三人が危ぶんでいるのを、感付かれたか。可能性はある。

ガプは背後のオルセとキリアを見た。ガプの考えを気付いて

いるのだろっ、二人の表情は暗い。

ガアプは、一週間前に見た、皇座に座るレマの知的な瞳の冷たさがまだ残るようで、寒感を覚える。

「アレ村を襲う火竜山脈の竜の退治を命じます。騎士団団長が皇都にいない状況を知られてはならないので、至極隠密に。」

ガアプは、レマの言葉を思いだし苦笑する。

今死んだら、まるで亡命か暗殺でもされたような扱いになるのだろっ。あの言葉が、本当にレマから発せられたのか。

ガアプは、時の流れによる人の変化を、苦痛にも似た感覚で思った。

ガアプとレマは、元々同じ村に住む、幼馴染みの間柄であった。

二人は、仲が良い、友人であった。

変化が訪れたのは、二人が共に十四の時であった。突然、レマに聖女の力が現れたのだ。

予知夢、治癒力、占星術、魔法力、聖なる力。加えて、その美貌が皇都までの噂になるまでに、さほど時間はかからなかった。

レマは皇帝と呼ばれ、村を去った。その後、レマが皇帝の正妃となると聞いて、ガアプは騎士団の入団試験を受けるのを理由に、皇都に会いに行った。

しかし、既に正妃となっていたレマは、後宮に住む、一般人の目に触れることの許されない存在となっていた。

二人がようやく出会ったのは、ガアプが騎士団長にまで登り積めた頃。皇帝が死に、なんとレマが女帝となったのだ。その知性までも、誰もが認めるものであったからだろう。

戴冠の式。ガアプは、レマに剣を捧げるといふ役を頂き、二人の視線は、ようやく重なった。

レマは、村の少女そのままであった。目尻に皺が目立つものの、明朗な微笑みは変わらず、ガアプの目の前にあった。

ガアプは、もう四十を過ぎていたが、その時初めてレマに恋心を抱いていたのだと気づき、戸惑ったほどに。

懐かしい、笑みだった。

だが、女帝としての時を送り、レマは変わった。

英俊だが、冷徹な帝王となったのだ。ガアプが反乱を起こすかも知れないという僅かな可能性を百とするほどに。

危険な老兵は、切り落とす女帝に。

第二話

「ガアプ団長！見てください！」

ガアプは、我に帰り、オルセの指差した方向を見上げた。薄霧の向こう、どうやら洞窟のようだ。

近付き、ガアプ達はそのあまりの作りに驚いた。精巧に作られた階段が、光苔の壁に囲まれ、果ての見えない地下の闇へとのびている。

ガアプ達は、顔を合わせると、ガアプを先頭として、松明を掲げながら、ゆっくりと階段を降り始めた。

次第に、暖かくなる周囲。火竜の住みかかもしれない。まるで、春の日差しの中にいるようだ。

途端、松明の火が消えた。いや、周囲が異常まで明るくなった。

「これは・・・」

思わず、感嘆の声が出る。それは、あまりにも美しい世界であった。

城ひとつ入りそうな大広間。その四方を、七色の輝きが囲み、中央に集まり、一筋の光の大柱。

その中に、聖母のような美しい女性が立っている。

「・・・人間か。」

女性が赤い口腔を開く。反射的に、三人は剣を構えた。女性に不釣り合いな、獣の声。

「お前が、火竜か？」

キリアが防御呪文で三人の防御を高めながら問う。

「火竜」

女が、吹き出すように呟いた。

「我が血を、肉を、魂を、あんな下等なものだと言うか。この愚者どもが！」

ガアプは女の言葉に、戦慄を覚えた。まさか、そんなまさか。

「古の神竜（エンシェント、ドラゴン）・・・？」

・・・神竜・・・

オルセの言葉に、女がにたりと笑う。何て事だ。

三人は、その場を動く事が出来なかった。何故なら、古の神竜とは、火竜と根本的に違い、皇国のシンボルそのもの、人類が誕生する遙か前から存在し、知性も魔力も潜在能力も人間とは桁が違う。この世界において最強の存在、まさに神なのだ。

何故だ。ここにいるのは火竜ではないのか。アレ村は、火竜の魔力により、干ばつに襲われているのではないのか。火竜が、村に降りては作物や畑を暴いていたのではないのか。

ガアプの心臓に、疑問の刃が刺さる。

その時。

「おぎゃああー！」

三人の騎士の耳に、確に人間の赤ん坊の鳴き声が響いた。

「赤ん坊?!」

「違う。」

ガアプの問掛けに、古の古竜が囁いた。

「餌だ。」

その言葉が、激闘を告げる合図となった。

ガアプ達は、同時に声をあげ、剣を構えた。

この竜は、我々が山に登る間に、村から赤ん坊を餌として盗んできたのか。許すわけにはいかなかった。

勝ち目は殆んど無い、だが、騎士として逃げることの許されない戦いが始まる。

ドン!

まず、ガアプが女に向かい、剣をふりかぶった。しかし、女はガアプの岩おも砕く一太刀を片手で捕える。そして、ガアプを睨みつけた。

「食事の邪魔だ!」

見る見る内に、女の肉が膨れあがり、皮膚を引き裂き、赤い鱗が増殖する。女がメリメリと巨大化する。

ガアプは女を蹴りあげ離れると、体制をたて直した。

ガアプ達の目の前で、変化を遂げる女。首がのび、足が丸太の束のようになる。やがて竜は、まるで一つの小山ほどの大きさとなり、

雄叫びをあげた。

雄叫びと共に、地面を割り何かが飛び出す。土でできた火竜だ。

「下僕か！」

竜が魔法で作った動く土人形ども。偽物といえ火竜を象っただけあり、あなどれない。

「私におまかせを！」

魔法騎士キリアが、巨大な竜巻魔法を起こし、火竜ども薙払う。

火竜はキリアにまかせ、ガアプとオルセの二人は神竜へと走った。

神竜の火炎の息。

二人はそれをかわすと、左右に分かれた。

オルセの剣がしなる。それを、神竜の尾が弾く。

ガアプが神竜に向かい剣をふるう、が、今度は歯で太刀を塞がれ、火炎をあびる、寸前でかわす。

神竜は、まるで蠅を払うようにオルセと、溜め息を吐くようにガアプと対峙していた。まるで、子供の遊びだ。

「ぐああ！」

ガアプの耳に、オルセの叫び声が聞こえた。神竜の、自身の体よりも大きい面により見ないが、竜の尾をまともに食らったのだろう。ガアプの全身を、焦りが貫く。

絶対的な力の差。必死で神竜の歯の刃を弾くが、攻撃のチャンスが全く無い。

「おぎゃああ！」

赤ん坊の鳴き声。我々が死んだら、赤ん坊の命はない。
騎士としての誇りが、赤ん坊の叫びが、二人を強く支えていた。

瞬間。

光の矢が、神竜の横顔に突き刺さった。キリアの魔法。

火竜を全て倒したキリアが、更にガアプに身体能力増加の魔法を、
尾により深い傷を負ったオルセに治癒魔法を放つ。

ガアプの心身に力がみなぎる。

神竜が叫び、ガアプを背にした。尾が切断され、血を滝のように
流している。オルセか。

「私に背を見せるとは、いい度胸だな！」

ガアプは叫ぶと跳躍し神竜の背を駆け上がった。

神竜は、ガアプが自身の背を走るのを、オルセへ復讐の業火を吐
き出すのに夢中で気付かない。

キリアが、ガアプの剣に鋭利の魔法を浴びせる。

ガアプの剣が、更に大きく鋭い刃となって、神竜の長い首もとを
突き刺した――！

「ぐ、ごあがああああっ――！」

神竜の首が半分切れ、血が吹き出し、ガアプを染める。

神竜は大きく痙攣すると、そのまま力無く倒れた。

竜の肉体から、とめどめが無く血が流れる。錆び付いた濃厚な匂
いと共に、竜の瀕死の吐息が伽藍をみたす。

神竜ではない、この程度の存在が、古の偉大な竜の神の筈がない。

殺すか。

剣を掲げ、竜の切断されかけた首に狙いを定める。生ぬるい竜の血吐戸と、その瞳とぶつかる。

竜は抵抗もせずに、ただただガアの最後の一太刀を待っているようだ。ふと、ガアの体に、ふつつと気持の悪い疑問が吹きこぼれた。

この、竜のあまりの無抵抗さは何なのか。竜が、何故この程度の戦いで虫の息なのか。竜相手に、この手応えの無さは、なんなのか。

竜の瞳が、長い睫から覗く。強い、瞳。

まるで、殺されるのを待っていたかのような。

ガアは掲げた剣を振り下ろそうとして、やめた。強い躊躇と疑問が、彼をそうさせた。

「ガア様……？」

「赤ん坊が先だ。どうせ竜は、動けまい。」

「再生するのでは？」

「これほどの傷だ、竜でも半刻はかかる。」

赤ん坊の更なる強い叫び。ガアは惹かれるように、赤ん坊の声をたどり始めた。

第三話

赤ん坊がいる場所は、安易に見付かった。輝く広間の壁に、たった一枚だけ桑の木で出来た扉がついており、その向こうから、鳴き声が続いているからだ。

ガアプは扉に震がないか調べつつ、慎重にノブに手をついた。重く、ふるめかしい音を立てて、扉が開く。

瞬間、扉から黒い影が飛び出した。

ガアプは後方に跳躍し、その影をかわす。

影は、ガアプのいた場所に、小さな悲鳴と共に倒れ込んだ。

子供である。

それも二人。幼い双杵が、濡れて揺らめく。白い寝巻きを見に纏う、少年と、少女。あの竜が、盗んできたのか。

ガアプはゆつくりと、二人に手を伸ばした。

「もう大丈夫だ、竜は退治した。」

ガアプが安心させようと言った言葉に、幼子達は、電撃に打たれたような顔をし、それに脅えを含ませ、寄り添う。そして、

「触らないで！」

少女が叫んだのを、少年が口を押さえて止める。

ガアプ達は、啞然として、二人を見た。少女は、少年に口を塞がれているものの、その目つきに、そして、その両瞳の色、赤に、ガアプ達は口で言われるよりも素早く理解した。

竜の、血飲み子。

生け贄として、竜に捧げられながらも、餌となること無く、そればかりか、竜に血を与えられ、育った子供。竜皇国初代皇王ヒルドや、極西の氷の大国ウェハイバルの化石の王ラキューなど、今は亡き過去の英雄の人々の出生のそれ。

珍しい赤い瞳を持ち、竜の英知と魔力を持ち、人々を救い主として導くという。

また、人間の子供を食わず、そればかりか子供に竜族の英知の力を与える事が出来るのは、高い知性と先読みの力を持つ竜と言われている。

だが、それは伝説どころか神話である。先読みの力までも持つ竜は、神竜だとされているのだから。

だが、神話は目の前に、そしてガアプ達に声を放った。

「貴方が、ガアプ・ロジエ、ですね。」

五才くらいだろう、見た目と全く釣り合わない、知的な少年の声。

「僕達を、どうか導いてください。」

扉の奥から、もう一人の血飲み子の鳴き声がした。

「オルセは、二人を。キリアは赤ん坊を。」

ガアプは指示を出すと踵をかえした。

竜の巨軀から滴った血が、小さな湖川となっている。竜から流れる血は既に無く、首の傷以外、傷口も殆んど確認できない。切られた筈の足は、視覚できる程の速度で再生している。並の竜では無い

事は、その治癒力からも分かった。

「お前は、何者だ。」

ガアプの強い問掛けに、竜は苦し気に、しかしはつきりと答える。

「既に知っているだろう。そして、お前は何よりも理解している。」

そう、ガアプは、その騎士団長まで上り積めた知性で、誰よりも状況を理解していた。

眼前で苦しんでいるのは、やはり、神竜。

そして神竜は今まさに自分達に何かを下そうとしている。

「何故、村を偽の火竜を使役してまで、我々を呼んだのです？あの子供達は何なのですか？」

悲痛な声が、ガアプから漏れた。神と対峙しているという事が、ガアプの腰を鎮座させ、剣を下ろさせ、言葉を畏怖の含むものにさせる。

「子供は、餌だよ。人間の愚劣さが凝り固まった、餌。」

竜がその剪断されかけた首をもたげ、紡ぐ。

「……四年前か、子を孕んだ女が二人、山を登ってきた……。女共は二人とも、とても若く美しく、そして悲しみに魂を奪われていた……。」

二人は、さまよいの果てに、この地下にやってきた。

竜は、自分は火竜山脈の竜を奉る神殿を守る尼だと偽り、二人を向かえた。すると二人は、竜にこう呟げた。

私達は贅。神竜は何処にいるのですか、と。

聞くと二人は、山脈の麓、メルン川のほとりの村に二年ほど前から現れる、源が分からぬ死病を止めるために下された贅だという。世界を見守る神竜に、腹の子供と共に食われる為にやって来たのだと。

「愚かな事よ。病など我の範疇ではない。我を人は神竜と崇めるが、我は創世の日から息をしていたにすぎん。我は無力よ……。」

無力、その言葉に強い衝撃をガアプは受けていた。

神竜が無力だという話は聞いたことがない。神竜が世界を作り、世界を動かす。それがこの世の定説だというのに。その定説の上に人間は歴史を生んできたというのに。

「我は無力だよ。」

ガアプの意思を読んだろう。竜がその麗しい瞳孔をガアプに真に向ける。その神々しさに、ガアプはめまいに揺れた。女帝と対峙しても、これほどの高貴さは感じられなかった。

「貴方は、無力ではない。」

ガアプの叫び。

「女共は、死んだ。」

神竜の呟き。

我の言霊で死んだ。

「神竜はここにはいない。」

尼は、二人の腹の大きな妊婦に訃げた。尼には、神竜には、病を

止める力など無かったからだ。そればかりか。

「我は、山を降りる事すら、出来ないのだよ。」

ガアプは、神竜の感情の無い言葉に、ただただ立ち尽くすだけであった。神竜の教えは、世界の定説は、弱い人間が作り出した幻想であり、妄想なのか。

「犠たちは、山を降りたのですか？」

答えは分かっていた、だが、ガアプは絶望から逃れる為の、少しの可能性を望んだ。

「……山をさまよい、死んだ。」

ガアプの予測通りの現実。若い娘たちは、重い肉体を引きずるようにさまよい、死んだのだ。

人間達が熱望のままに思う、竜を求めて。

「我は、女共と腹の子の屍を慰めるべく、土人形を使役し、我が元へ運んだ。……骸は、母の生を全うしていた。二人は、赤ん坊を産み落とし、死んでいた。」

失望の末の、希望。

神竜は、無力という罪を償うために、赤ん坊に血を与えたのだ。村に返しても、不幸にも生き残った贅として殺されるか、口減らしで川に流されるだけの命を、自分の僅かな力で、生かそうと思ったのだ。

「あの赤ん坊も、贅なのですか？」

「……山の中央に、放置させられていた十二人の赤ん坊の、唯一の生き残りだ。」

贅という名の、人間の愚劣。

ガアプは、登山の前に立ち寄ったアレ村を思い出した。僅かにとれる農作物と砂金で生活する、村。

竜の被害で、死傷者はなくとも、枯れた井戸と焼けた田畑が横たわる。貧しい農民と、裕福な商人の生活の差が激しい、村。

「王の手、竜王国騎士団のみ、竜殺しは認められている。裕福な皇都の人間である我々を呼ぶために、竜を使役したのですね。あわよくば、子を皇都に運ぶために。」

「……それほど、簡単な理由ではない。我の命を、竜の血飲み子を、狙うものがある。」

ガアプの心臓に、氷の矢が刺さる。神竜を殺そうと企てる者が、いる。

「多くの星が、空に瞬く魂が、叫んでおる。我は近い日に殺される。とな。世界が、破滅へと向かおうとしている。お前達の女帝は、だからこそ、お前を生かそうとしておるのだ。お前は、お前の王の意思の下、血飲み子とともに名を捨てる。」

……何を。

「何を、おっしゃっているのです。」

ガアプの跪く体躯が、揺れる。

「その者が、知っている。」

ガアプは、神竜の瞳を指す者を、見た。

「オルセ。」

「ガアプ様、お許し下さい。」

オルセの目から、一筋の涙が流れた。

第四話

「ガアプ様、貴方様には、このまま我々とともに名を捨て、新しい名で生きていただきます。騎士団長ガアプという存在は、竜との戦いで、すでに死んだこととなっているのです。これは、聖女からの直々の命。」

線と線が交わってゆく。

「貴方様のお命を、狙う者がいます。」

自分の命を狙う者、それは最大候補であるジオを次期皇帝としてようと動いている一派だろう。

ガアプは、ジオの特有な稚子のような残虐性を正す教育を早々に行うべきである、と訴えていた。それを、謀反や暗殺に繋がると考えたのだ。

自分の騎士として、王族につかえる者としての誇りを、あまりにも軽視する判断に、ガアプは虚しさを感じた。貴族は、農民からいでた者を、同種とは見ていないのだ。

慈悲ある聖女は、ガアプを理解し、あわれみ、のがしたのか。騎士の誇りを最も汚す方法で。

ガアプは、それでもほどこけない解を紡いだ。

「神竜を、聖女は知っていたか。」

オルセは、一度身震いし、沈黙した。

「私の存在までは、聖女にはわからぬ。我がいると知っておつたら、このような策はせぬよ。我はだからこそ、お主らを利用する。」

竜の首が少しずつ繋がりはじめたからか、声に美がとる。竜は首をもたげ、ガアプとオルセを真に見つめた。

「我を神と崇めるのなら、私の願いをききいれよ。血飲み子を託す。どうか、彼等を導けよ。」

幼子の、あの言葉が浮かぶ。

これも、運命のようなものだろうか。何者かにたぐられ、気付かぬ内に結ばされた。

ガアプは剣を取ると、刃を下にし、目を閉じた。

「剣と、失われた翼に誓いを。」

それは、帝国の騎士の、承諾の言葉だった。

神竜は、ガアプの誓いを真に受け止めると、口を開く。

「我を殺してはくれぬか。」

ガアプはその問いに、きっぱりと答えた。

「出来ません。竜皇国の民として、竜を信仰する人間として、それは出来ません。」

「…すまぬ、愚問であつたな。」

竜は一呼吸置くと、そのまま天に瞳を向ける。七色の光に満ちた伽藍に、それはガアプとオルセには、自分達の神以外には見えない。「他に、方法は無いのですか。火竜を使役し、竜皇国に申告し、保護を求め……。」

ガアプの言葉の羅列が、そのまま拡散し、分解されていく。

「神竜、貴方様の命を狙う者は、まさか。」

あまりに嫌な予感にガアの顔は青ざめていく。

神竜は、未だ完全に繋がってはいない首を弱く左右に振ると、ガアにその美しい漆黒の双眼を傾けた。

「お前が愛しく思う者は、氷ではなく水晶の心を持つ者。私の命は、欲と憎悪に捕われた冷酷な人間の基面に乗る。その基面は、やがてドラグノアに広がるだろう。我を殺し、私の肉を使役し、その者はやがて天に浮かぶ竜さえも打ち落とす。」

絶望的な神竜の予言に、ガアと背後のオルセは雷撃に打たれるようであった。

「私はその悪魔の足に杭を刺そう。悪夢の使者の歩みを捕えよう。生むは一時の猶予だが、それは僅かな光を放つ糸を紡ぐだろう。」

我は、人に賭けよう。

神竜の肉体が、その全てが、吠え立つように震えた。長い首がたわめき、やがて山脈のような牙が、先ほどガアが付けた傷口を噛んだ！

血の奔流。

猛々しい雄叫び。

神の首が、千切れ飛んだ。重い振動。ガア達は、背けていた瞳を正した。

神竜の長い首が胴体から離れ、生臭い血の池を作り出している。おびただしい血にまみれながらも、神竜の足は巨軀を支え、瞳は熱くガア達を見据えている。

… 神竜は、何度か瞬きをすると、そのまま深く瞼を閉じた。

神の、最期。

ガアプ達は打たれたようにすぐさま、長く黙祷を捧げた。

なんとという壮絶な終焉だろう。暗く残酷な惨劇。

それでもそれは、か細く曖昧な未来に、可能性と希望、そして選択の糸を力強く紡ごうとしている。

ガアプは震える肉体を懸命に整えた。武者震いだろうか？なんと、重い。

ガアプは、神竜に礼すると、そのまま踵を返した。託されているのは自身で、押されている背中もまた、自身のものだ。

「……ゆっつ。」

第五話

ドラグノア極東の国、竜皇国の歴史の陰に起こった皇国の神の死、そして勇敢な騎士達の死。皇国の民は知らぬ、抹消された真実。

運命がゆつくりと繰り始めた日から、十四年が経とうとしていた。

竜皇国の皇都・シオンは、世界の果て、東の火竜山脈から流れる大河・メルン川の恵みを受ける。数々の竜を象り祭る独特の建築文化神竜殿に因るその美しい街並みから、美の都と世界から称されている。

都を巡るいくつもの水路は全て、アルタナ湖と呼ばれるメルン川の水を溜めるドラグノア最大級の人工の湖から流れる。

遠く西にあるという海を彷彿とさせる湖の中央には、帝都から陽炎のように見える城がある。五本の石作りの強大な橋を民への血管とする聖なる城・エアドラド城、竜の城である。

… 蜃気楼のように輝くその城を、ひとり見つめる少年がいた。

「城まで透き通ってら。今日は帝国晴れだな。」

黒に数束の白が揺れる髪が風になびく。黒い革製の服に小さな体を納め、胸元には銀の鎖と刃。背中に自身の胸ほどの太剣を担いだ少年が、背を伸ばした。

黒髪の網目から覗く珍しい赤の瞳を細めると、少年は歩き始めた。

帝都の外れに、少年の目的の場所がある。ラルシエムという団体く大工から僧侶までを団員に個人契約を主に様々な仕事を受ける、いわゆる何でも屋の仕事引き受け場・シエムバス。

少年はシエムバスの扉を開けると中に入った。酒屋と全く同じ作りの店内は、今日も無駄に賑やかだ。

「よう、ディノ！仕事はもう終りか？相変わらず早えな」

椅子を丸机にぎつちりと埋めて話し合う戦士団のひとりが、少年に片手をあげた。

「まあな、お前らみたいに全体が筋肉で重くないし。」

「相変わらず生意気だねえ。おねえさんが調教してやろうか」

女戦士が色っぽく言うと、周囲が飽和するように笑った。

「うるせーよ。」

ディノは、適当に戦士達をあしらうと、受付に向かう。受付には、白い毛に覆われ、真つ赤な鼻に丸眼鏡をかけた受付嬢、といっても百才を越えている魔女バーバが紙に判子をベタベタ押している。

「バーバ嬢、仕事。」

「さっき渡したばかりなのにもう終ったのかい、せわしない餓鬼だね。女に嫌われるよ。」

「風馬一族は迅速な忍者の血筋だからね。」

「ふん、そんなの旧王国の話じゃないか。まあいい、この街でマトモに働くのはお前だけだしね。」

「違うない。なあ、良い仕事ないのか。世界を旅するようなさ。」

「本当に珍しい奴だね、お前は。」

「…ふうん。アンタに丁度良い仕事があるよ。めんど臭そうなヤツがね」

バーバが、片隅に目を向ける。

そこには一人、巨人種用の丸椅子にぼつねんと座る十六、七位の

年若い女性がいた。卓上の花を撫でている。

「国境の街ハシェイブまでの案内、加えて旅の知識を教えてください者。」

「ハシェイブに行く気なの、アレ。」

アレ、とデイノが指差した女性は、どこからどう見ても国境を越えられるような玉に見えない。少女の殻を脱がないでいる、そんな印象を与える弱々しく華奢な女性。

国境までは長く、野宿は当たり前。そして獣や盗人が蔓延る街道もある。皇都から離れるにつれ危険は高まる。おとなしかった魔物が近年凶暴化し、人を襲うことだって希ではなくなった。死ぬ者だっている。

「道楽か？家出か？自殺願望か？そんなのに付き合うなんて御免だ。」

「力試しにはいいんじゃないかい。羽振りも良さそうだ。へへ、それにもう契約は済んでいてねえ。」

「……まったく、面倒な仕事は直ぐ俺に押し付けやがって。」

デイノは溜め息をつくとしんまり笑うバーバを背に、スタスタ歩き始めた。

「おい。」

声をかけたのが急だった為か一瞬飛んで、女性は立ち上がった。

巨大な椅子に座っていた為に小さく見えていたが、デイノより頭ひとつ分高い。とは言っても、デイノは同年齢の男子に比べると、小さい方であるが。

「こんにちは。」

上品な口ぶり。薄茶の目に長い髪、白い肌。

右手に美しい杖を持ち、絹に赤い花の刺繍のマントを纏う。

下には革製コルセットを身に付け上品に笑う姿は、ディノが嫌いな上流階級の女のそれだ。

ほんわか微笑む女性にディノは無愛想に「仕事」と言った。

「え、貴方が請け負い人さんなのですか。失礼ですが、大変お若いんですね」

「ラルシエム専属剣士ディノ、それでも年は十四。ランクは…」

「ディ、ノ…?」

「アンタの名前は?」

ディノの問掛けに、少しの沈黙の後。

「…私は、アーシエ、ともうします…」

「ふうん、初めましてアーシエさん。」

いかにも思考を巡らしているといったアーシエの表情。

（ 契約破棄でも考えてんのかな…。）

ディノはラルシエムでも一級に近い力の持ち主ではあるが、幼い容貌の為に会った途端に契約破棄される事は珍しくなかった。いつぞ破棄してくれと思う。

考えが決まったのか、アーシエはディノに嬉しそうに笑いかけた。
「よろしく願います!」

契約は成立のようだ。

「その様子じゃ装備はまだか。金はあるんだろうな。」

ディノの問掛けにアーシエは曖昧に頷いた。

「えっと、宝石はあるのですが、お金は少ししかないのです…。」

（まさか本当に家出娘なんじゃねえのか… 面倒なことにならなきゃいいけどな。）

ラルシエムは一度契約したら最後、それを終えたという書類に契約相手からサインを貰うまで、基本的に仕事を続けなければならぬ。

これはラルシエムのもっとも重要な掟のひとつだ。たとえ家出娘との契約であろうと掟は掟である。

「宝石を取り合えず換金するか。お買い物はそれからだな。」
ディノはシエムバスの奥へと足を進めた。アーシエもそれに続いて行く。

シエムバスの中にはいくつかの店が繋がっている。その内容は質屋、換金所、武器屋、金貸し、カジノなど様々だ。

唯一の共通点は、大量の金が動く店、といった所だろうか。
力が集まる所には自然と金が集まるものだ。その為に皇国の聖職者団体や軍人やらには、かなりの警戒心と偏見をもたれている。

だが、力と金、一見その組み合わせは危険なようで、安全と等しい。
故にラルシエムは今まで潰される事無く、その力と金を保ち続けている。

ラルシエムの力と金の証、質屋換金所も、そのひとつだ。

「いらつしゃい。」

身体中を黄色い毛で覆われたバーバと同じ人種のラーラ。ここの質屋換金所の受付嬢だ。

「ラーラ、宝石を金に変えて欲しい。」

ラーラは直ぐに虫眼鏡を取り出す。

「アーシェ、宝石。」

「はい、分かりました。」

アーシェは腰にぶら下げていた皮袋から青い宝石をひとつ取り出すと、ラーラに手渡した。

「…見事な聖の魔宝石だね。あんた試練の者か。これは聖者達から下ったのかい？」

はい、というアーシェのしっかりとした返事に、ディノが少し驚く。

「聖なる祈り子様ってヤツか。聖なる者なんて初めて見たな。って、先に言えよ。」

「馬鹿だね、ディノ。聖なる者が試練の時は、なるべく自身では身分を明かさないのが務めだよ。」

ラーラの目線に気付いてアーシェが赤くつつ向く。

聖なる者とは、魔法には出来ない保護や治癒などが出来る聖なる力と呼ばれる力を生まれながらに持ち、竜と聖王につかえるさだめの中を生きる者達の総称である。

聖なる者の階級に「聖なる祈り子」という階級があり、更なる上位階級になるために、聖なる者は試練の旅を行わなければならない。世界に散らばる竜の神殿のひとつで、祈りを捧げるための試練の旅をするのである。

「大体、そうだね。三万、って所かね。」

「さ、三万リタもすんの、こんなんが!？」

ディノは飛び上がった。アーシエもまた驚いている様子である。三万リタといえば、庭つきの家が皇都にドカンとたてられる位の金である。皇都一般大衆の平均年収の実に五倍は下らない。

「…普通の試練じゃあこんな高価なの与えられないよ。アンタ、大変な事をしようとしているんだね。…その選択は、重くないかい？」

アーシエは柔らかく微笑むと、試練ですから、と言った。

物腰に隠れる、鋭いナイフのような決意に、ディノは頭がくらくらした。面倒な女を依頼主にしてしまったという、後悔で。

「でもどうしましょう。こんな大金を持って歩くのは…」

「この石を、いくつかの石と交換してやる。それを持ち歩くと良いそうだね、ただの石ころに見える魔法もかけておこう。取り合えず旅の装備には百リタで十分だね？」

「ああ、多いくらいだよ。」

ラーラの提案にディノは素直に傾いた。

シエムバスを出、商店街で地図や食糧など旅に必要なものを購入すると、二人はヒルポポスという粘土を皮膚にしたような巨大な生き物がひく荷車に乗って、皇都の端へと向かった。

アーシエは何か思う所があるのか、じいっと荷車の格子を流れ去る皇都の街並みを見つめていた。もうすぐ旅立つのだし無理も無いな、とディノは思った。

「なあ、アーシエ。あんた一体どこに行くつもりなんだ？」

「とても遠い所だと思います。」

まるで行き先を知らないような言葉。

「?…あんさぁ試練って皇都神殿でも受けれるんじゃないの?」

「そうですね。それも試練の選択のひとつですけど、私は皇都神殿を選びませんでしたから。」

「まさか、まだ試練を受ける神殿を決めてなくて取り合えず外へとか思ってるんじゃないやねえよな。」

ディノの茶化すような台詞にアーシェは沈黙でかえす。

(マジで?)

ディノの背中を冷えた汗が落ちた。

「知らない所に行くのです。気持の上では近いのかもしれませんがね…」

「知らない神殿って、ああ?どーいう、」

「あちらにあるそうです。」

アーシェが照れ臭そうに差し示したのは。
上。

…上?

……上!?

「嘘だろ!?!」

アーシェの差し示す場所、それは誰もが知っていて誰もが知らないという、場所。

その名は古き都ルシファン。

創世記に登場する、天空の聖都。別名、

「…月に行く気なのか!?!」

第六話

創世記は語る。

古き世、世界は上下に浮かび相對する二つ半球であった。すなわち、球。そして卵。

神竜、卵を産み、それを永遠より遠い日々、あたためる。

やがて卵は二つに割れ、中から産声をあげる者あり。すなわち、世界。

溢れる世界の体液は海となり、また肉は大地となりて古き時の中、生命を抱く。

神竜は名付ける。上の大地、人と魔法の地、ドラグフレアなり。下の大地、獣と精霊の地、ドラグノアなり。

神竜その身を六つに割りて上の地に三つを下の地に三つを捧ぐ。

（中略）

ドラグフレア、魔の石を抱き、争いを好む者あり。生命の生き血をすすり肉をほふりて、文明を育てるなり。文明、やがて大きな戦を産みて、死す。

戦火、上の大地焼きはらい、多くの生命食らう。

殻は形骸まで失いて消え去るなり。残る大地は僅かなり。すなわち、滅亡。

獣と精霊の地ドラグノア、僅かに生き残りし人の子ら包む。

残された大地、文明の知識秘め、死者をまつる聖都となり眠る。

ルシファンの都、ここに誕生す。

人の子ら、帰れぬ大地に涙を流し、詠うなり。

下の地の者ども、眠りの大地を月と呼び、憂うなり。

「行けるワケないじゃん」

「行くって決めたんです。だから…」

うつ向くアーシエに、デイノは溜め息をついた。

この女は、空にどうやって行くつもりなのだろう。

そう思い、そして気付いた。自分でも知らない旅とは、そういう事なのだろう。行き先も行き方も終りも分からない旅路。

だからこそ聖者達は極めて高価な宝石を渡したのだ。

「…ハシェイブの向こうは灰の大地だろ。あんな無法地帯に一人で行く気かよ」

「…はい。試練ですから」

デイノは自身の口腔が苦くなるのを感じた。自身の力を過信し無謀な行為で死んでいったラルシエムの者達の顔が浮かんだ。堪らず思ふ事を端から言う。

「命が惜しくないのかよ。行ける筈無いだろ。ってか月に行く迄に死ぬのがオチだ。第一月まで行ってどうするつもりだよ。観光気分で行くのか、それとも苦行を積んで人々の幸せを願うとか？馬鹿か？おまえ」

「違います。私には目的があるんです」

デイノの辛辣な言葉の数々に、それでも怒る事無く聖なる者は真

っ直ぐディノを見つめた。

「目的？なにが？」

「…あの、その…」

途端にうるたえるアーシェ。言えないのか。

「まあ、頑張れば良いさ。あんたが国外で死のうが生きようが俺には関係無いからな。」

荷車に冷たい沈黙が満ちた。

国境の街ハシェイブは竜皇国エアドラドの西に位置する。　まずはゼルダ街道を通る事となる。

「アベドルト平原を通って行くからな。その方が近い」

沈黙を破るディノの声に、うつ向いていたアーシェが顔をあげる。
「え？でも、平原をまっすぐ通るのは普通の方には…」

「ああ、その点は大丈夫だ。俺、風馬一族だから」

「風馬…遊牧民族さんなんですな。」

おっとりとしたアーシェが驚く。無理もない。風馬の人間は大抵、平原から出ないからだ。また、ディノのように十二歳の成人の式の後すぐ平原を出る者は極めて少ない。

「まあな。…平原を通ったら、ハシェイブはすぐだ。」

盗賊や魔物にさえ会わなければ、案外楽な仕事かもしれない。…
会わなければならないが。

何気無い会話をかわしている内に、車は皇都の端についたらしく停止した。二人はすぐに車から下りる。続け様に、車に皇都へと向かう客が乗り、再び皇都へと向かって行く。車の向こうに、湖を囲

むように広がる皇都が花のように見えた。

「ここからは歩きだ。気合い入れろよ。」

「はい、頑張ります。」

二人は、皇都から東西南北、十字に広がる街道の一つ・ゼルダ街道の入り口の両脇に立つ二つの竜の巨像を見上げた。

ゼルダ街道。

かつて皇国の西に繁栄していたバーミア王国との貿易のために作られた街道である。

バーミア王国が数々の内乱により滅亡してから貿易のための使用は少なくなっただものの、今も皇国の貿易には欠かせない。

また石畳の整備された街道は商人の他にもさまざまな職種の者や旅人が使用している。

だがそれゆえに盗賊や魔物に襲われやすい。雇われ兵等の守り人で周囲を大量に固めて進む商人達が襲われる事は少なく、彼等の主なターゲットは、少人数の旅団等が大半である。

「本当に行くのか？」

ディノは、最後の問いをアーシェに与えた。

「あ、はい。ディノは大丈夫ですか？」

あっけらかんとしたアーシェの返答にディノは溜め息をつくど、あつたり前だろ、と紡いだ。

二人の旅は、こうして始まった。

第七話

苔むした石畳の街道を深い森が囲む。

太陽は傾いて綾線が橙に染まりはじめていた。もうすぐ夜か。

「そろそろテントを張らなきゃな……」

ディノの言葉に前を歩いていたアーシェが嬉しそうに後ろを向いた。

大分歩き疲れていたらしい。無理もない、白衣の裾から見える腕や足はあまりに細い。

「えーと、旅の技言うぞ」ディノの旅の知識の講義。アーシェが途端に真面目な表情になる。

「テントを張るのは日が暮れる前、周囲にテントがないか見渡す。あつたら隣接していいか交渉！何故？」

「群れをなすと襲われる確率が低くなる。あともし襲われた時に逃げれる確率もあがる……かな？」

「ご名答と言うと、ディノは街道の先を指差した。そこにはテントがまるで集落のようになり始めていた。

二人は早速向かう。

「ディノじゃないか、駆け落ちかい？」

（この悪い冗談は……）

「バンシャ！って事は……」

見渡すとテントを張っている者達に見覚えがあつた。

女戦士バンシャを頭とするバンシャ戦士団——今朝方シエムバスで会った戦士達だ。どうやら大きな隊商の護衛をしているらしい。

「隣接ね。うちの雇い主に聞くと良いよ。おいで」

バンシヤに促されテント村を通っていく。老若男女の商人達、見習いの子供。荷を運ぶ大小の動物。

まるで民族移動のようだ。

一番大きく派手なテントに入り、ようやく気付いた。

噂に聞く長い兎のような耳、顔を持つヒュームの子供ほどの背丈の人物。

隊商の長は、竜皇国で最も金持ちだと言われている男。ロツゾ商会の会長ロツゾそのひとであつた。

「やあやあ、こんばんはシエムバスの風馬さんと依頼主さん」

「はじめまして」

挨拶に促されるように二人は頭を下げた。

「隣接希望？だよね？いいいいいよ、ドンドンね」

「あ、そう、サンキュー！」デイノは踵を返そうとした。だが、待つてよ！という大声にとめられる。

「ロツゾも頼みがあるな、聞いたよ、ハシェイブに行くんでしょ？じゃさ一緒に街道渡らない？」

ロツゾの提案にデイノはピンと来た。

ロツゾはラルシエムを支える大商人のひとりだ。彼は自分を守る者をひとり増やそうとしているのである。こちらにも得ではあるが…。

「俺の雇い主次第」デイノの発言にアーシェが目を丸くする。

「え、えと、どうしましょう？」知識が足りないアーシェが逆に問う。デイノは溜め息をついた。

「俺の雇い主が全ての優先だ」
ディノの発言にロッゾは手を叩いた。

二人は暫くの間、隊商と同行する事となった。
商隊との穏やかな旅路。ディノはアーシエに旅の合間合間に知識を与え、アーシエが水を吸う砂漠のように覚える。

時間がゆっくり流れてゆく。だが、変化は唐突にして起った。

群れをなして二日目の昼の事であった。
ボ口切れのようなものが道に転がっているのを、先頭護衛の戦士が見付けた。隊商は、一時停止する事となった。

「ディノ、来てくれ」
戦士に呼ばれ、ディノはアーシエに待つように言い戦士の元へ走った。

先頭に戦士達の垣根が出来ている。割るように中心に入る。

悪臭、肉と血が腐った臭い。

目に飛込んできたもの、それは旅人の死体であった。

「酷いな、これは」
死体は無惨にも肉を食われ内蔵をさらけ出していた。魔物に食われたのだ。持ち物が散乱しているのを見ると、死者の金品をさらに盗賊が奪っていったようである。

「噂通り、ひでえ事しやがるな」
「まったく、警備兵共は何をやってやがるんだ」
戦士は悪態をついた。

「ゼルダ街道は無駄に長いからな。治安悪化に兵が対応しきれないんだ。それにしても…魔物とは対峙したくないな…」

以前はこんな事はなかった筈である。

魔物の食物は大気に巡る魔力、また魔力を蓄積する力を持つ一部の草木だった。魔物が人を食らい始めたのは近年の事だ。

「国は早急に手を打つべきだな。そのうちみさかえ無く魔物が村や街を襲う日が来るかもしれない」

ひとりの戦士の言葉に、皆ゾツとした。

そんな悪夢がいつか始まるのだろうか。目の前に横たわる虐殺は、序章に過ぎないのだろうか。

商隊は旅人を埋葬すると、静かに歩み始めた。

それから五日がたっていた。襲われた旅人の無惨な姿をもう何度も見ていた。隊商に同行を頼んで良かったと、ディノは心底思っていた。

ゼルダ街道の端まであと一、二日といった所だろうか。もうすぐ端に付く。それまで、何もなければ良いが…

隊商は自分達は襲われないだろうと信じきってた。いや、誰もがそう祈っていた。だが、祈りは脆くも崩れ去る事となる。

第八話

月が漆黒の夜空に唯一の光源として瞬いていた。

ディノとアーシェは狭いテントの中で八日目の夜の帳にまどろみ始めていた。

突然、ディノはその気配を感じ飛び起きた。遠くの空気が震えたような感覚。アーシェも気付いたのか、素早く体をあげた。暗闇に、耳をそばだてる。

「ディノ……」

「静かにっ」

雪に冷えたような緊迫した空気。そして糸は、何者かの咆哮によって断ち切られた――！

「があああうっ――！」

獣らしき声が奔流となって四面を囲う。

戦士達がぶち叩く警鐘の音が木霊する。

ディノは揺籃を蹴るように立ち上がると、直ぐ様に剣を担ぎアーシェの手を取りテントから走り出た。

辺りでは既に戦士達の戦いが始まり、四方八方で刃が爆ぜている。完璧に囲まれている。よりによって大群に。

隊商を襲っているのは魔物であった。

魔物の群れとはディノも対峙した事があるが、その時の比ではな

い。百近くいるだろう。もしかしたら超えているかもしれない。

そればかりか種族も様々で、旅人がよく目にする狼魔だけではなく泥魔や木魔、見慣れない魔物までいる。魔物が別種族と群れなして人を襲うなど聞いた事がない。

アーシエが周囲を見て震えている。

ディノはアーシエの手を強く握ると「走るぞ！」と叫んで大地を蹴りあげた。

逃げ場を失った武器を持たない人々が一箇所に集中するべくひた走る。

その列を容赦無く魔物が牙を向ける。風が駆け抜け、魔物の腹から血が吹き出し跳ね返される。

「はやくロツゾのテントへ！」

戦士達に守られるようにして人々がロツゾの元に駆け込んでゆく。空では騎士達に向けられた、救済を求めるのろしと花火がもつれあい戯れていた。

テントに入ると、人々が祈り、泣き、震えているのが二人の目に飛込んだ。それは宛ら、狼に襲われる羊の姿だ。

中心にいるロツゾと目があつた。

「お嬢さんはコチラに！ディノさん、お願いする！」

「ああ、任せろ！ここは頼んだ！」

ディノはアーシエをロツゾの元へと導くと、踵を返して戦場に向かった。

体は震えている。ぶるぶると。恐怖？いや、ディノはそれが武者

震いである事を知っていた。

「うおお！」

テント横の戦士を囲む狼魔の固まりめがけて突進する。

狼魔が気付いて拡散する。逃げ遅れた何匹かを切り伏せる。

続け様に横へ刃を伸ばす。狼魔が跳躍、かわす。ディノがそれを追わず大剣を翻す、背後に詰め寄っていた狼魔を弾いた。

「ふあー、やるじゃねえか、ガキ」

「まあね」

狼魔に囲まれていた戦士は傷をおっていた。

バンシヤの戦士に傷とは敵はかなりのようだ。戦士は斧でディノが叩いた残りの狼魔を退くと叫んだ。

「ありがとよ、ここはいい。頭の所が一番てこずってる、行け！」

戦士に促されディノは再び戦場を駆ける。

左右の森や切り立った崖からウヨウヨと魔物が出て来ているのをディノは横目に疾駆する。

「くそ！」

ディノは魔物達を威嚇しつつ大テントの北東部に向かう

。回り込んだ途端、吐気を感じた。生命が、食らい合う様だ。

女戦士バンシヤと仲間が両手に斧を持ち魔物を弾いてゆく。

魔物が次々と両断され、魂が空に飛弾する。魔物の屍を魔物が食らい、さらなる獲物を得る為に戦士達を襲う。

むちゃくちゃだ。まるで終りがないじゃないか。

ディノは魔物達の飢餓状態の人間と変わらない瞳の色に、背筋が凍るのを感じた。

人間は多少ではあるが皆、魔力を持っている。その為に魔物にとって人間の魔力を帯た肉は美味なのだという生命論がある。

だが、これは飢えだ。

枯渇に近付く生命が水からに力を注ぎ生き残る為に決行する殺戮だ。

何故、こんなにも飢えている？

「きりがない！」

バンシャの声が聞こえた。それは泥のような焦りに染まっていた。

テントの中にも周囲の殺戮が響く。

布地に血のりが爆ぜる音は激しい雨音に似ているが、叫び声が雨である事を許さない。

刃が肉を切る音、血の落ちる音、獣の息遣い、足音、罵声…戦いの音、臭い。それらはテントの隙間を抜け、あるいはテントの布地を叩いて人々を残酷に揺さぶり続ける。

アーシエは杖を握りながら、必死に考えを巡らせていた。

今まで教わってきた様々な呪文が頭の中を右へ左へ駆けてゆく。

魔物への魔法や聖なる力の実践は一度もない。

失敗したら？

戦士達も巻き込んでしまったら？

アーシエは迷いの沼地を彷徨っていた。

ふと、視線を感じた。

それは、震える熱と共にアーシエの皮膚に触れた。

子供である。幼いペルシャ族の子供がアーシェにしがみちな
がら見つめている。ガタガタと、恐怖に凍えながら。

腹をきめた。

「ごめんね、少し離れていて」

アーシェの言葉に子供が痙攣するように離れる。怒られたと思っ
たようだ。

違っよ、ごめんなさい。

言葉は、出なかった。子供が離して直ぐに、アーシェは目をつむ
り自らの思考の海に落ちたのだった。

しんと静まっている。魂が空間の中に揺れたり走ったりしている。
密集してちじこまっている魂の群れ、アーシェは世界を魂の欠片で
見下ろしながら、群れは自分達だと知る。

感じ慣れた魂、私自身だ。

あれは子供、商人達、ロッゾさん。

ああ、あれはバンシャさん、戦士達。

……ディノ。

守りたい。

「冷徹なる死神、全ての魂を溶かした黒衣、終幕の運び、導く、あ
るいは引きずり、空の門を叩けよ、……………死の世界。」

瞬間、光が放たれた。

「ごめんなさい」

第九話

狼魔が風を切るように駆ける。

ぐるぐると戦士達を囲み回り、隙あらば牙で喉を貫こうとしている。一瞬たりとも気を休める事は出来ない。

「うじゃうじゃと……」

焦りが戦士達の精神を蝕んでゆく。あまりの敵の数の多さ。異常な死線に摩擦され続けた肉体と魂は今にも壊れそうだ。

「騎士団はまだかつ」

バンシヤが叫ぶ。

のろしをあげてから未だ半刻も経っていないという現実が冷たくあざ笑う。

「負けるかつ」

ディノが剣を大きく狼魔に降り下ろす。
かわされた！

ディノは焦りに捕われた自身を憎んだ。大きく下ろした剣が地面の土にぶつかり爆ぜる。

狼魔がディノの首に牙を向ける――。

死。

いや、違う。

狼魔の牙がディノの首の動脈を切り裂く寸前。狼魔の体を光が突き刺した！

狼魔の悲痛な叫びが轟く。叫んだのは、ディノを襲った一体だけではなかった。

魔物、テントを囲んだ魔物の全てが、叫び、床に倒れ、苦痛にうめきながら痙攣している。

「どうなってるんだ！」

ディノの疑問の声に、バンシャが呆然として呟いた。

「…魔法だ」

戦士達は皆、その一点を見つめていた。テント。ロッゾのテントが、内から淡く優しい緑色に輝いている。

ディノがテントに向かい猛然と走り出す。

魔法、そんなものを使えるのは、あいつしかない。

「アーシエ！」

ディノの声に気付いて、アーシエが顔をあげる。

信じられない事に、アーシエが全身から光を放っている。いや、全身の皮膚を覆う紋様が緑に輝いているのだ。

古代文字だろうか？先程までは皮膚にあんなものは無かった。

「アーシエ、それ、なに！？」

ディノの酷く驚いた様子に戸惑い、しどろもどろになりながらアーシエは答えた。

「…麻痺の呪文の魔法紋です。体を痙攣させるのです。死の世界、といいます。」

魔法紋とは、別名聖紋と呼ばれ、聖なる力特有の魔法陣の事だ。聖なる力には、人体に魔法陣が浮かびあがるという特徴があると噂には聞いていたが…。

死の世界。確かに魔物が悶え苦しむ光景は、さながら死の世界だ。

アーシェの体から段々と光が弱まっていく。力が切れようとしているのだ。

「ありがとう」

ディノは一言感謝の言葉を投げ込むと、早々と踵を返した。魔法が切れたら再び襲ってくるかもしれない。

バンシャの元へと駆けるディノの目に、魔物達が体を震わせうろたえる姿が飛込む。あるものは走り、あるものは這うようにテントの周囲から離れていく。

効いている。勝ち目が無いと判断したのか。遠くにいる魔物すっかり戦意を喪失している様子である。

「やった……」

だが、それはほんの一息の安息だった。

ディノはその揺らぎに、地震が起こったのだと思った。

だが、そのあまりにも激しく且つ微弱な振動にリズムのようなものを感じた。

そしてすぐ、その揺れの正体に気付いた。信じたくはなかったが、目の前にした以上、現実には夢幻に成り得ない。

「伏せる！」

ディノとバンシャの声が折り重なり響いたと思うと、轟音が宙を切り裂いた。

風が奔流となり、逃げ遅れた魔物達を八つ裂きにする！

それは、三本の太くて鋭い爪だった。

「化け物だ！」

戦士達が悲鳴をあげた。

無理もない。眼前で爪に刺さった魔物を食らうのは、異常なまでに大きな熊だった。

爪が発達し、肩まで覆っている。背は戦士達の実に三倍はある。

「親玉、いやガキ大将の登場か。禍禍しいな。旅人を食ったのはコイツか」

食われた魔物がボロ衣と寸分違わない姿で捨てられていく。魔物を優雅に食いながら、その目は既に戦士達に向けられていた。

逃げられないだろう間違いない。ならば

「やるまでだ！」

バンシヤを筆頭に戦士達が駆け出す。

大熊が気付いて爪を戦士達に振り下ろす。何人かが暴風と鋭い爪に押され吹き飛んだ。

攻撃をかわし、バンシヤが大斧を振った。

がちんと硬い音が響いた。爪でバンシヤの巖も砕く一撃をとめたのだ。

バンシヤの後に続くように走り込んだ戦士達の斧や剣までも。生臭い匂い。

大熊は小さく息をすると、軽々と人々を弾き飛ばす。かわしきれなかった者達の体が子供が投げた玩具のように宙へ放られる。

血しぶきと悲鳴が拡散する。

先程、大量の魔物達と対峙した後である為に、既に体力が限界に

近付こうとしている者達は、大熊の爪から逃れられない。

大熊は傷付き血を流す弱った個体に目をつけた。

「うわあああ！！」

腕から血を流していた戦士のひとりが爪に捕えられる。

抵抗するも身動きが出来ないようだ。そればかりか、今にも潰される勢いだ。

戦士達が青ざめ爪にめがけて怒涛の攻撃を集中させるもビクともしない爪は、戦士を空に掲げる。

獣が口を開く。

「させるか！」

バンシヤが大斧を熊の胴体めがけて投げつける。片方の爪が難無く弾いた。

が、それが一瞬の隙を作った。風より早く跳躍したディノの剣が熊の額をかちわる！

「あぎゃああつ」

まるで理性のない赤ん坊のような声。戦士を掴んでいた爪に力がかもる、が、戦士の体が柔らかな果実のごとく潰される寸前に、バンシヤの大斧が熊の腕を切断した！

絶叫が爆ぜる――

大熊が叫び、のけぞる。倒したか、そう戦士達は思ったが、全くの逆であった。

雄叫び。大熊の怒りが頂点に達したのだ。

「くるぞ！かわせ！」ディノの叫びに似た戦士達への命令が無様に熊の地響きのような足音にかき消される。怒涛の突進！

戦士達の群れを太鼓のように熊の巨体がぶつかり、跳ね飛ばされる。

戦士達は何が起こったのかも分からずに地面にたたき付けられた。頭から、背から強く打ち付けられ、戦士達は足を失った蟻のようにうろたえる。熊が地面に横たわりうごめく彼等に更に向かう。

させるか、と突進を避けた者達が熊に向かうが、回避により離れた距離はあまりに大きかった。間に合わない――。

「光の矢！」

洗練された音楽のような言葉。瞬間、熊の肩に輝く細い矢のようなものがあたり、熊が横に崩れた。

「火であり土であり水であり風である者よ、その肉体のあるべき力を表せ。器の癒し！」

アーシェである。

テントを抜けて聖女は飛び出した。彼女の全身がこの世のありとあらゆる光に包まれ、光が爆ぜる。

それは、四散し、傷付いた者達の全身をつつむ。戦士達の傷口がみるみるうちにただの皮膚となつてゆく。

それを横目に、バンシャとディノの二人はまるで二対の刃のように熊に向かって大地を蹴ってゆく。

「でええい！！」

十字の切っ先の煌めき。その光に押されるように、熊の体が吹き飛んだ！

飛弾する熊の最期の叫びと血。熊はそのまま地面にめり込み、ぴ

たりとその動きをとめた……。

終わった？ 終わった！

戦士達の間から歓声が沸き、まっすぐに彼等はある人物の元にひた走ってゆく。彼等が囲んだのは、熊を薙ぎ倒したバンシヤやディノではなく……。

「アーシエさん、凄いつす！」

「魔法か！」

「助かった！」

称賛のあらし。アーシエが戸惑ってディノをちらちらとみつめる。その光景は、肉食獣の獅子達に囲まれた一匹の兎のよう。

「……なにあれ」

全身で激しく息をし足りない酸素にうめきながら、大量の汗をばうだと流すディノがバンシヤにぽつりと漏らす。

同等の様であるバンシヤは、更にボスにいつもは見せる尊敬の眼差しを一片も向けない部下達を、眉間に怒りの皺を刻んで睨んでいる。目立ちたがりの二人の自尊心がぶちぶちと湯気をたてる。

「お前ら！！」

二人がキレたのは、見事に同時であった。

第十話

地上が微かに輝いている。

肉の器の破壊に耐えかねた魂が星となり空を巡るため、ひとつまたひとつと上昇してゆく。

人々の口の隙間から僅かな風となり、振動は地に落ちた雨のように沈んでゆく。

鎮魂歌。

それを歌いながら、戦士は獣の体を解体し肉や内臓に塩をまき或いは煙で焙る。食料となるのだ。

人は剥いだ獣の皮を叩き、撫でる。

牙や爪などを磨ぐ。

衣類や剣や装飾品となるのだ。

人々のナイフや箒などの道具の奏でる音が、歌が、夜に染み入る終りの頃、その蹄はやってきた。騎士だった。

「どうどう」

土埃をあげて馬を停止させ次々と地に足をつけてゆく。

黒い鎧の騎士が一人、他の四人は緑。なんとも場違いな色合いだ。

「おいおいっヘッポコどもがやって来たゾ！」

「のろまな口バが馬に乗ってやって来た！」

戦士達の笑いが沸く。怒りを隠す、叩き付ける為の笑い方だ。

緑の騎士達が震えている。恥ずかしいのか、誇りを傷つけられて耐えられないのか。だが、悪態を浴びせられて当然だった。

のろしをあげてから二時間はゆうに過ぎていた。はつきり言うところ、普通は死んでいる。彼等は間違い無く死体を確認するつもりだったろう。

黒騎士が兜を外して辺りを見渡す。その表情は驚愕であるのは無理もない。彼等の前で人々が始末しているのは、力に自信ある者達を切り刻み食らい、彼等が何度も取り逃がしていた大熊の魔物ダークベアである。

「驚いた。素晴らしい勇者達がいたようだな。」

中年の黒騎士の素直で柔らかな言葉に、戦士達がいやりと笑う。そこに、跳ねるように商人の長ロツゾがやってきた。

「はじめまして、私ロツゾと申します。いらっしやいませ騎士様、お買い物ですか？」

騎士のおおらかな性格を読み取って、明らかに酷い洒落を付け加えてのロツゾの陽気な登場に、騎士は微笑んだ。

「私はゼルダ街道第五区間騎士隊隊長カズン。鎮魂歌を買いに来たよ。…その様子だと、死人も怪我人もいないようだな、なんと凄い者達を護衛にしているようだな」

「ええ。ラルシエムの戦士達は皆、屈強です」

「…そういじめないでくれ。よかつたら戦士達の長と会わせてくれないだろうか。素晴らしい戦士達をまとめる者をこの目で見てみたい。それと専属の魔法使いと」

カズンはどうやら戦士達の殆んど傷のない様子から魔法使いの存在に気付いたようだ。

ロツゾはカズンの賢さに嬉しくなって、すぐさまバンシヤとアーシエ、ディノを呼んだ。

「戦士団長バンシヤです。こっちはディノ。そして魔法を使いました、アーシエ」

バンシヤに握手を交すと、黒騎士は頭をひとつ下げた。

「私は街道守りのカズンです。遅れてしまいお力添え出来なかった事を謝罪すると共に、貴方方の力に敬意を表したい。」

そして再び一礼した。騎士にしてはあまりに腰が低い男にバンシヤは戸惑い、ああ、うんと照れ臭そうに漏らす。

「所で、」

カズンがふいに騎士らしい表情でアーシエを見つめ、跪いた。

「聖なる者にこんな辺境で会えるとは思いませんでした。その上、貴方様はアーシエ嬢だといいます」

「私を知っていらつしやるの」

「ルキという騎士からかねがね」

「ルキは騎士となったのですか」

驚きのあまり、アーシエは口元を押さえた。

「アーシエ、こいつと知り合い？」

「私はアーシエ様の兄上の元教師でございます」

「ええ！」

三人の中でアーシエが最も驚いている。

「以前、剣の士官学校で教員を勤めておりました。アーシエ様、あの方は異例の早さで御卒業後、王国騎士試験どころか金獅子団の試験に王国史上最年少で合格し、今は金獅子の騎士でございます」

「金獅子……」

金獅子団とは、王専属の護衛騎士団である。普通の騎士でさえ、剣で岩を斬れるほどの腕を持たなければならぬ。

金獅子団に入るには、年に一度開催される王国騎士大会の上位三位に入り、獅子の牙と呼ばれる試験に合格しなければならぬ。腕だけでなく精神も屈強で頭もキレなければ。

「ふええ、アーシエのにいちやん天才？」

「ただの天才ではありません。百年に一度、いや五百年に一度の天才でございます」

立ち上がって興奮するように声を出すカズンの目の前で、アーシエの頬が赤くなる。嬉しさが花開く。

「ルキは、兄はお元気なですね？」

どうやら、兄の素晴らしい経歴よりも体調が気になっていたらしい様子に、カズンは目を丸くした。

「ええ、お元気ですよ」

「よかった」

まったく自分の生徒が優秀であるという興奮が空回ってしまったカズンは、アーシエの林檎のような頬より顔を赤くした。

「それより騎士さん、酒でも飲んでいらないか。いい肉が入ったんだよ」

バンシヤが恥ずかしそうにうつ向くカズンに助け舟を出す。カズンは首を振ると、「今からすぐに皆に報告をし、見回りを強化するので、お心だけいただきます。ありがとう」と微笑んだ。

そして、踵を返し立ち去った。

隊商が街道を下る。ヒルポスに引かれ、ゆっくり荷車はディノとアーシエを乗せ進んでゆく。

「ですから、会場は大盛り上がりで……」

カズンが興奮しながら、大会でのアーシェの兄の活躍を語る。アーシェがうきうきと聞きいつている。

ディノは空を見ながらカズンの話を聞きながしていた。カズンが同行するようになってから、ずっとアーシェの兄のルキという人が会話の種となっている。

最初は興味があつたディノだったが、えんえん続く顔も知らない人物の華々しい経歴の話に、もう飽々していた。

カズン達は隊商を端まで誘導、警護してくれるらしい。

戦士達は魔物達との戦いで疲れきっていたから、それを受け入れたのだった。

ディノだけ、正直、気が進まないでいた。

ルキという金獅子のせいではない。何だかよく分からないが、騎士の鎧を見ていると胃がむかつてくるのだ。

力がない癖に偉そうな騎士にばかり会ってきたからかもしれない。カズンはいいい男ではあるが、やはり騎士だ。

荷車に合わせ横に並んで騎士達が進む。軽快な蹄の音が音楽のようになど大地を蹴ってゆく。

「おー、竜と平原が見えるゾ」誰かの感嘆の声に、ディノ達は首をあげた。

隊商の前方、遙か遠くに、ゼルダ街道の入り口と同じく二頭の竜の像が、背景に女の腹のような、なだらかな草原を広げ、陽炎に僅かに揺られ佇んでいる。

「これがアベドルト平原ですか。地平線が緑色ですね」

「ああ、この国で、いや東の国々の中で最も大きな平原だ」

隊商が街道の端に立ったのは正午の事であった。

カズンと部下の騎士達は隊商が竜の像を横切るのを確認すると、馬を街道に向け、もと来た道を優雅に帰っていった。

街道の端には、無事に街道を渡り終えた者、これから街道を渡る者が作った多くのテントと、旅人のための小さな村がある。

隊商はそこで一時休み、日が暮れる前に平原の脇のカンシエという都市に入る予定だ。隊商とも、ここで分かれる事となる。

「いやはや、色々ありましたねえ。本当にありがとうございました。あなた方のお力がなければ、今頃熊の餌です」

ロツゾがケラケラと笑いながらディノとアーシエに頭を下げる。

「お互い様だよ」

ディノの言葉に、アーシエが頷いた。

「いえいえ、契約以上の警護をもらったと思ってますよ。そこで、お礼としてですが」

そう言うと、ロツゾは両手に布に巻かれた何かを持ってきた。受け取ると、軽い。それは、あの熊の爪だった。

「うわ、いいの、貰っちゃって！」

あの大熊の爪。堅く、鋭く、そのくせ羽のように軽い。武器に加工すればかなりの品になる。

「頂けません！」

アーシエが戸惑ったように答える端で、ディノがいかにももったいなさそうな顔をした。

二人の顔を交互に見ると、ロツゾは熊の爪に手を置いて更にディノに強く押す。

「いやいや。貰ってくださいな。気持ち、ってヤツですし」
ロツゾがにんまりと笑う。

「アーシエ、貰っておこう、悪いし」

アーシエはディノの言葉を受けると、両手に熊の爪を大事そうに抱え、深々と頭を下げた。

過大なお礼が、本当に申し訳なさそうなアーシエの表情に、ディノは心の中で、この男は聖なる者と金獅子の騎士に恩を売りたいだけだよ、と呟いた。

ロツゾ、バンシャ達に別れを告げ、二人はアベドルト平原へと足を向ける。

平原は地平を金に染め、なだらかに線を描いている。広大すぎるのだ。

「ディノ、装備などは揃えなくてもよいのですか」

なにもない、ただ緑の草が覆う平原を見据えてアーシエは言った。ディノは、自分より少し背の高いアーシエを横目に見ると、だいたいぶだいじょーぶ、と首を上下に振る。

アーシエは小さな疑問を胸に抱きながらも、ディノの横に添うように歩き出した。

青い空が、どこまでも伸びていた。

第十一話

アベドルト平原。

皇都シオンの真西に位置するこの平原は、横断するのに徒歩で一ヶ月はゆうにかかり、また、星を読むことの出来ない者は迷い死ぬと言われている。

それはまごうことない真実で、紛れもなくアベドルト平原は竜皇国で最も広大な平原である。

遊牧民族風馬が住み、平原を遊牧して一生をおえる彼等にとって平原は庭であり、母体である。

彼等は東の民から総じて、《永遠の旅の人》とも呼ばれている。

平原は、何処までも続き、地平までも緑色だった。
風がディノの額を撫でる。

「風馬…俺の族はさ、元々は旧王国王家の家来だったんだ。暗殺とか、なんだろうな、隠密ってやつ。やってたらしくて。これなんかその時代の武器が元になってるんだ。クナイってな。」

ディノは胸元に下げられた小さな刃を摘むと、アーシエにゆらゆらと揺らして見せる。逆二等辺三角形の細長い刃が太刀魚の腹のようになまめかしく輝いた。

「それは武器ではないのですか」

アーシエの質問にディノは唇の右端をニヤリと軽くあげて刃を唇に当てた。

「これは、こうして使うんだ」

ディノの肋骨が小さく膨らんで、肺から喉へ口の先へ、そして切っ先へと細く長い呼気が触れる――。

「笛……」

大気が小さく震えているようだ。
刃と唇の間で揺らめく風が、何処か荒い重低音の旋律となって、草原の彼方へと吸い込まれていく。

「……ん。こんな感じかな。まあ、聞こえるだろ」暫くクナイで音を奏でた後、ディノが小さく呟いた。

「聞こえる？」

「まあまあ、少し座っててよ」

ディノの考えが分からず、アーシェは地面に座した。

草独特の芳香が駆ける子供のような風に連れ添い、アーシェのマントの端を摘んで逃げてゆく。

そのまま暫く、二人は空ばかりを見ていた。

「風馬は、旧王国が倒れた後、平原へ逃れた。王の命令とは言え、暗殺や虐殺も数多く行っていた風馬の長は、罪を忘れないために武器を笛に変えて、鎮魂の音楽を作り、平原を鎮魂の魔法陣を描くように渡り歩いた。それが元で、風馬は音楽と共に旅する遊牧民となった……」

どれほど時間が経ったのか、急にディノがそれまで瞑っていた目を開いた。

キラリと、赤い虹彩が光る。そして再び、今度は力強く何より清く高らかに笛を吹いた。

透き通る閃光のような高音。さつきとは真逆の音。

「来るぞ」

ディノの声と直後に、アーシエはいななきと大地の振動を感じた。それは女の腹部のようなならかな平原の向こうから始まり、確かにこちらへ向かって来るようだ。

地平に煌めく点が現れたと思うと、それはぐんぐんと大きくなり、一筋の疾風となって二人を横切った。

「きゃあ！」

空を貫く槍のように現れたそれは、金色の短毛を纏った獣であった。

「大丈夫、アーシエ。これは、シンガだ。平原のシンガは風馬が全て調教とかしてて…風馬の足って呼ばれてるけど、どっちかと言うと家族みたいなもん」

ディノはシンガの頭を撫でると、干し肉をやった。うまそうにほふる姿は、いかにも逞しい肉食獣そのものだ。

「初めて拝見します」そう言うと、アーシエはまじまじとシンガを見つめた。

獅子のような顔と体付き、四本の足は毛で覆われている。立派な角が一本、額から伸び、犬歯も長く首もとまである。

「りりしいですね」

「はは。じゃあコイツに乗って集落まで行くぞ」

「え、風馬の、ですか？」

「当たり前だろ！それに親戚から旅の道具貰えば良いしな！」

デイノの言葉にアーシエはデイノの考えにピンときた。

「…デイノ」

「知ってる？タダより高いモノはない、アレ馬鹿の造語なんだぜ。」

デイノは弾けるように笑うと、シンガに飛び乗って、すぐさまアーシエに手を差しのべた。

第十二話

ゆつくりと太陽が地平に沈んでゆく。大地が火の粉をあげるかのように、暮れる日の色に染まっていくのを、獣の骨と皮、僅かな木で組み立てられた高い見張り台の上で、じいっと見つめる青年と少女がいる。

二人とも黒い牛皮の衣服を纏っていた。

「ユズ、もう日が沈む。帰れ」

「ヤ。綺麗なんだもん」

ユズと呼ばれた少女は、青年に大きく首を振ってみせると、すぐに地平へと視線を戻した。

「毎日見て、よくもまあ飽きないものだ」

青年は呆れるように呟く。

それもそうだ。東西南北、集落を囲むように立つ見張り台から見る晴れた夕焼けは、いつも同じ色をしている。

それを毎日飽きずに見に来るユズは、すこし変わり者かもしれない。

彼女の目には、毎日違う色に見えるのだという。しかも、彼女が見つめるのは東。ここは東の見張り台であり、太陽が沈む西とは真逆の景色に彼女はみとれているのだ。

なんとも稀有な事だ。

青年には、いくら見ても、たそがれどきは変わらぬ色に見える。狩りや訓練などで忙しくなった時など、ふいに見た夕焼けに心を奪われることはある。

だがそれは、多忙な日々はその色を忘れていた時に限る。

しかも、青年が心捕われるのは夕日の輝きであり、のびた光の矢が差し込む大地や夜の混じり始めた空ではない。

そんなふうには、青年がボンヤリと考えていると、ユズが突然、弾けるような声を出した。

「何かがこっちに来る！」

ユズの一言に、青年は大きく見張り台の柵から乗り出して、ユズの指差す方を見た。

金の草原を駆け抜け、確かにこちらに向かってくる黒い影。

青年は首にかけた望遠鏡を手に取り、除いてみるも、光の反射の為に何なのか分からない。物凄いスピードで近付いてきているようだ。

「シンガだ。シンガに誰かが乗ってる！」

ユズは興奮していた。

流浪の民の集落を目指す者など珍しい。遊牧の友シンガを連れている。敵ではないようだ。

ああ、あれは…。

青年は乱暴に見張り台についている鐘をうちならした。

呼応するように、鐘の音を北、西、南の見張り台の鐘がうちならされる。

各見張り台に三つある、敵、客、家の鐘。そのひとつ、家の鐘の音が、橙に柔らかな黒い影をのばす集落を、優しく包んでいた。

慣れないシンバの背にしがみつinaながら、うつ向いてアーシェは大声を出した。口に疾風が入る。

「デイノ、そろそろ休みませんか？もう夕刻ですよ！」
「もうちよつとで着くつて！大丈夫大丈夫！」

シンバは小さな跳躍を繰り返すように走る。黒い影が大きく伸び、より勇ましく感じられた。ふと、その影の足取りが緩やかになる。

「見ろ、あれが風馬達の集落だ！」

その言葉に直ぐ様アーシェは、顔をあげた。

地平に沈みゆく夕日の輝きが、もう一筋の光の線のように見える。逆光の中に、巨人の家族がテーブルを囲んでいるような固まりがあった。

巨人はどんどんと背を伸ばし、怪物のようになった頃、ようやく全貌が窺えた。

それは骨や木や土、様々なものから作られた高い壁だった。

一見、鳥の巣のように乱雑に積み上げられたそれらは、よく見るととても精巧に出来ているのだと分かる。

その壁から、四本の塔のようなものが顔を出していた。遠く火竜山脈から吹き降りてくる力強い風に軋み揺れている。

皇都シオンではけして見られないだろう建造物に、みとれていると、突然アーシェの耳を高い金の音が襲った。

「これは!？」

「、客、の鐘だ!！」

銅で出来ているのか、まるで耳元でならされているようだ。

パツと二人を乗せたシンバが暗がりにはさまれた。建物の影に入っ
たようだ。壁がずんずんと迫る。

「ディノ、ぶつかります！」

アーシェの悲鳴に似た声に気付かないように、ディノはどんどん
シンバを加速させてゆく。

「ディノ、ディノ！キヤア！」

アーシェは薄く目を閉じた。
ぶつかる――。

瞬間、フツと体が壁をすり抜けた。いや、壁が直前に口を開いた。
そのままゆっくり、やがてストンとシンバは足をとめた。

アーシェは恐る恐る目を開くと、周囲を見渡した。

壁の内側。人の二倍の背丈ほどの半球のテントが不規則に並んで
いる。

そのテントから、ひとりまたひとりと早足で出て、二人を囲むよ
うに集まってくる。ざわざわと祭りに集まるように。みな、ディノ
と似たファーのついた黒い革製を着ている。また、口元を黒いきれ
で覆っている。

「あーディノだディノ」

「嫁つれて帰ってきてるわー」

ぼんやりとした気が抜けた驚き顔で、風馬の者たちがまつたり騒
ぐ。

穏やかな人種のような。まるで珍種の生き物のように二人を歓迎、

もとい観察している。

「山！」

突然、はつきりと大きく、女性の声がした。

「マジで？まだやってんの」

「何いつてるんだ、伝統だよっ？アンタはホント天邪鬼だね」

「はいはい、合言葉ですね、かゝわゝ」

「はい、よくできました」

人混みからズンズンと女性と少女が出てきた。少女がすぐさまデ
イノに飛び付く。

「おかえんなさい！」

「おう、ただいまだ、ユズ」

ユズと呼ばれた少女が弾けるように笑う。

「デイノが女の人つれてきた！」

「まったく、おかしな話だね」

ユズと共に出てきた女性が微笑んだ。少し獣人が混ざった容貌の、
明るい笑みだ。

「本当に嫁かい？やだね、この子は」

「嫁じゃないって！仕事の雇い主で、アーシエっていうんだ」

デイノは周囲のみなに聞こえるような声を付けてアーシエに向い
た。

…なんとも様子が変だ。照れたような、困ったような、驚いたよ
うな。アーシエがやけにもじもじしている。

「どうした、アーシエ？…まさか嫁に来たいのか！？」

「いいえ！そうじゃなくて、あの…」

もじもじと人みしりの激しい子供のような様子のアーシエに、突然、女性が大声を出した。

「アーシエ、だつて!？」

ずい、とアーシエに近付く。アーシエは、じっと目を合わされて、やがて観念したような顔で軽くお辞儀をした。

「…お久しぶりです」

「やっぱりかいっ！」

「し、知り合い!？」

仰天するディノに、女性があきれたように苦笑した。

「なにが雇い主だよ、覚えてないのかい？やっぱり頭が悪いんだね」

「なになに?？」

ディノの腕に全身をまかせるように揺れるユズが跳ねる。

「…あんたは知らなくて当然だね。わたしは僅かな大人のほかに、誰にも言つたことがないからね」

女性はディノをこづくと、アーシエに向き直った。

「元気だつたかい？」

女性の微笑みに緊張をほぐされ、アーシエはハッキリと答えた。

「はい、…キリア母さん」

第十三話

ざわめく風馬の人々に「あとで説明する」と言うと、すぐさまキリアは自身のテントに二人を導いた。

テントではキリアの夫のキリコが食材を切っていた。

外からの音に状況を理解していたのか、ディノを挨拶がわりに寡黙に叩き、アーシェに礼をすると、そのままユズを引きずって外に出ていってしまった。

キリアは、ディノとアーシェをテントの中央にある円卓の回りに座させると、水を入れた碗を円卓にふたつ置き、自身も腰を下ろした。

「さて、随分といきなりだが…ああ、いったい何から話せばいいのかね…あまりにも色々な事が…」

そして、宙をほんのすこし仰ぎみた。

あの日、十四年前、神が私の前で自ら命を絶った日。

「…キリア。私の名前はキリアというんだよ」

オルセの両肩に、三人の背後にある、遠のいていく自分達の育った場所をただただ見つめながら、しがみついている二人の子供に、キリアは優しく言った。

赤ん坊は、キリアの腕の中でスヤスヤ眠っている。

「…」

右肩の女の子は、ただめそめそと泣いている。

左肩の男の子は、決心しているようにジッとキリアに目を合わせ

た。

洞窟を出る前に、爆破の魔法陣をいくつか神殿に敷き、離れてから呪文をつむいで発動させた。

洞窟も、神殿も、とうに崩れてしまったはずだ。神竜と共に。

背後にそびえる山脈は、二人の、そしてキリアが抱いている赤ん坊の育ての親の墓標だ。その事実を、この小さな体で受け止めようとしているのか。

…この私でさえ、竜を殺して、あまつさえ、名を捨てるという命を飲み込むのに、何日もかかったというのに。

事実、登山の最中ずっと自問自問していた。

何故、騎士団長の為に自分まで名を捨てなければならないのか。

騎士試験、獅子の牙、あれらの辛い試験を越える為に、故郷・風馬から出て、必死に努力した。

金獅子に入り、魔法騎士として、故郷に届くほどの名をあげた。

金獅子では、団長ガプ、騎士オルセ、騎士パピコ、彼等についての力を持っていた。四元素を操る魔法で四天のキリアと呼ばれた。

その名を捨てると、言われた。

実力がある他のものは選ばれなかった。後で気付いたが、キリアもオルセも、独り身だ。

洞窟に着いた時は逃げ出したいと体が訴えていた。今なら、逃げられると。

…何故、私は逃げなかったのだろう。オルセ、何故お前は逃げな

かった？

両の腕に支えられる、赤ん坊の顔を見つめる。

挙げ句、子どもを背負って、神の命さえ狙うという正体の分からないものから、逃げ続ける運命をも背負わされた。

《神竜に導かれた》

本当に、そうか？
分らない。

これから私たちは、どうなってしまうのだろう。
心臓を驚捕まれているような暗い感覚に、めまいを感じているキリアの耳に、風が囁いた。いや、風ではなく、かすれるような少女の声だった。

「…ア、…シエ」

「え？」

突然に現れる、真紅の月のような、目だ。

「…アーシエ」

ああ、この子の？

「…ルキ。隣は、ルキ。あとね、ディノ」
そう。

「…私はキリア。」

手をのばした。ああ、なんて小さい手なんだろう？

「あんたたち、よろしくね」

逃れるように、流れるように。私たちはある街に向かった。

国籍不明のものや、力しか取り柄がないもの、行き場のないもの、家出人、娼婦、盗人……。様々な人種が、集まるエアドラドのさいたる形のような街。まるで食材をレシピを見ずに鍋に詰め込んで混ぜたような……。

木は森へ、人は人混みの中へ。命を狙われている人間が隠れるには、丁度いい場所だったよ。

——三年後。

ならず物の街、エドガー。

その街の外れの裏山の、小さな家に、雷が落ちた。

「どうやったらそんなに泥だらけの傷だらけになれるんだい！」

キリアの怒鳴り声に、一斉に二人は間にたつ子供を指差した。

「『ディノが悪い!!』」

指をさされた子どもは、一番泥をかぶりながらヘラヘラと笑っている。

「信じらんないのっディノったらジジの沼に入ったのっ」

女の子が半泣きで訴える。

「うんうん、アーシエの言う通り、あと少してマギフロッグに食べられる所だった」

男の子がウンウンと相槌をうつ。

ジジの沼とは、街の外れの魔法使いの老人ジジが魔物を育てている沼の事である。

マギフロッグは、人間の背丈ほどの肉食魔蛙だ。

「ああそうか、またジジの所に魔法を習いに行ってたんだね」

ギクリと二人が目を丸くする。ディノだけクスクスと嬉しそうにしている。

「あれほどあそこには行くなと言ったろう！駄目！禁止！一週間外出禁止！」

外出禁止という言葉に、一瞬固まって、すぐに三人の子ども達が喚き出した。

ピーチクパーチクの抗議の大合唱と一緒に、三人の体にべったりとついた泥がダンスをするように部屋に飛び散る。

耳を押さえながら、ついにキリアは我慢の限界をこえた。

「ええい、うるさい！ルキ、アーシエ、ディノ！さっさと風呂で泥を落としてくるっ命令だよっ」

三人はすぐさま玄関から外に駆け出した。キリアもそれを追っていく。

走りながらポイポイと泥付きの服を脱いでいく、三人の器用さに呆れながら、次々服を掴む。

家の裏手にある風呂に飛込むと、またざわめきだした。

「水ー水ー」

「きゃあ冷たいっ」

「母さん、氷水？コレ！」

溜め息をつくとき、キリアは呪文を詠唱した。途端に、水は湯気をたてる。三人が、漸く黙った。

さっきの元気はどこへ行ったのか、と心底キリアは不思議に思った。

…いつまでも、飽きないもんだね。

三年前の不安が嘘のような生活がある。何もなく、日々が過ぎて

いく。

あの出来事が、夢のように。

キリアが過去を臆気に見ていると、庭の脇にある深い森がユサユサと揺れた。

現れたのは、これまた泥に塗みれたオルセであつた。

「……おとーさん、泥んこー！」

デイノが嬉しそうに奇声をあげる。ルキとアーシェは必死に笑いを堪えている。

「蛙さんと喧嘩をしました……」

オルセが両手をあげると、服の裾から泥が滝のように落ちた。それを見て、子ども達は堪らず吹き出し、一斉に笑い始めた。

「アンタってヤツは……」

あきれて物も言えないという顔をして、キリアは自身の眉間を抓んだ。

最近はいつもこうである。子ども達と散歩に行き、子ども達に巧くまかれて置き去りにされ、危険地帯に遊びに行く子ども達を追い掛けては、このような目にあつて帰ってくるのだ。すっかり子どもの玩具である。

（これが三年前、金獅子だったなんて言っても誰も信じないだろうね）

「こども達があがったらアンタも風呂に入るんだよ」

キリアは溜め息混じりにそう言つと、小屋の裏口に向かった。

「今日の晩御飯なーに？」

背にかけられた言葉に、キリアは顔だけ振り向くと、「蛙以外だ

よ」と言って、裏口の戸を開けた。

第十四話

パチパチと、暖炉の薪が爆る。先ほどまで仄かに浮遊していたゆうげの匂いが風に溶けてゆく。

「怪獣が眠りにつきましたよ」

子ども達を寝かし付けたオルセが、居間に入ってきた。

「ご苦労だな、オルセ」

ガアプは円卓にオルセを招くと、木の杯に果実酒を注いだ。

「いいえ、ガアプ様も…。うん、美味しい果実酒だ」

オルセは杯を口につけると、感嘆するように言った。

「当たり前だ。私とガアプ様の二人で毎日丹誠込めて育ててる畑から採れたぶどうから作ったんだからね」

「そう、お前が蛙と遊んでいる内にな」

「…そんなにいじめないで下さいよ」

照れ笑いを含む。だが、すぐに真面目な表情に変える。

「…あの子達は、元気がいいです。とても。どんどん成長してゆく…」

ルキもアーシェも、今年で七歳になった。デイノは三歳。

三人とも、大人の手を放して走るのが巧くなった。目を少し離すと、もう何処かに行ってしまう。

「街の人々が三人を大事にしてくれているから、まだ助かっています。…ルキは騎士坊や、アーシェは姫様、デイノは小鬼なんて言われている。フフフ」

オルセが笑う。目はどこか悲しみに淀んでいる。

「…過去が嘘みたい」

「…そう、ガアプ様は何も言わなかったが、みんな過去が幻のように思えていたんだ。それほど、平凡で穏やかな貧乏農民のような生活だった」

キリアは目を細めながら言葉をつむいだ。

「俺、ぜんっぜん覚えてない」

キリアの話に、デイノは首を左右に振る。

「デイノはとっても小さかったから、仕方ないです」

「仕方ないことあるもんかい。あんなに、みんなに心配させて迷惑かけて、あげくアーシエを全然覚えてないだなんて、我が子ながら本当に呆れるよ」

「わりい」

デイノのあつけらかなとした謝罪にアーシエはクスクスと笑うと、懐かしい、と呟いた。

「もう、十一年も経つんだね…」

「えいやっ」

ポコツと軽い音がして、木刀が返される。

ぴゅんぴゅんぴよこびよこ、小さいルキとアーシエの体が飛び跳ね、二本の木刀が、ガアプに向かってゆく。

「そんなんじゃ二人とも、憧れの金獅子にはなれんぞ…」

ガアプの木刀が、素早い動きで次々と二人の太刀をはねかえす。まるで緩いリズムの太鼓のようだ。

ガアプは平然としている。対照的に、幼い二人は必死のようだ。ぜいはあ、と荒い息をして、ガアプめがけて木刀を振る。汗が滴る。

ふと、二人がチラリと両者を見つめた。キラリ、と小悪魔な目が光る。

「わぁっ」

瞬間、つるりと木刀がルキの手を滑って、ガアプの顔の横を鳥のようにすり抜けた。バランスを崩して、そのままズデンと転ぶ。

「むっ」

ルキが転んだのを抱き起こそうとガアプが手を伸ばす。

「すきあり〜!!」

すかさず、しゃがんだガアプの頭にアーシェの太刀が振られる。だが、それはスルンとかわされて地面に不時着した。

ポコン！ポコン！！

「「いたいつ」」

ガアプの太刀が、二人の頭を叩いた。

「：姑息な作戦だな。そんな事ばかり考えていては、いつまでたっても強くなれんぞ。堂々と剣を交えなさい」

ガアプが諭すように言うと、ついには二人ともめそめそと泣き出した。

「だっておじいちゃん強いんだもんっ」

「そうだよっ」

涙に鼻声混じりで二人がいじける。二人の様子に、ガアプはおろおろとろたえた。ガアプは、二人を溺愛しているため、泣かれるのが苦手なのである。

「わかった、手を抜かないおじいちゃんが悪かった」

よしよし、と二人をなだめすかす。だが……

「「すきありっ！」」

ズテンツ。

二人の同時攻撃。難無くかわされてしまった。

そればかりか…

「…ルキ、アーシェ…刀を置いてそこに座りなさいっ！！」

第十五話

街の外れの、沼の横。

樹で出来た、というよりも大きな樹の中に、そのまま人が住み始めたような家。

魔法の臭いが立ち込める、そこは魔法使いジジの家――。

「…でね、おじいちゃんったらさ、昨日ずっと同じこと言ったのっずつとよ、きつと一時間くらい!」

「お前たち、そんな卑怯なことをしていると墮落の道を歩き、しまいいには…だって!」

アーシェの憤慨の側で、ルキがガアプの真似を交え乍ら状況を訴える。

「君達のおじいさんは正しいよ、とつてもね」

「ジジはおじいちゃんの味方するのね?」

ジジ、と呼ばれた初老の樹の魔人は、フフフと笑うと、「大人になつたら分かるじやろうよ」と言っつて、片手に持っていた試験管に呪文を唱えた。

試験管は緑色のゲップをすると、七色に光輝き始めた。

「ジー、なに?」

ディノの質問に、ジジはニコリと微笑むと、机に乗る燭台の火をひとつ残して吹き消した。

たったひとつの小さな光源のみ。部屋には、子ども三人の真っ赤な目が六つ、そしてジジの樹の窪みに水晶をはめたような目が二つ、そして七色に輝く試験管一つしか見えない。

「この試験管にはある魔法気流が流れとる。ここに魔法植物の種を入れる…」

ジジの指先の小瓶から試験管へと種が落ちる。
すると、途端に種は芽をだした。

「これはなんの魔法気流か？」

ジジの問いに、ルキが素早く、土！と言った。ジジが左右に首を振る。

「種には魂が入つとる。この種という状態の時、魂が欲するのは…」

「…水！土は、魂が肉体を種から芽に変えてから必要なの」

「ご名答！」

アーシェの答えにジジはニンマリと笑うと、試験管に土の魔法気流を送り込んだ。

「さて、これはなんの植物になるかのう…」

そういうと、ジジは試験管を試験管立てに置いた。蝋燭に火をともす。

「それは、時間と、この植物の体と魂、そして魔法の流れが教えてくれる…」

試験管の中の植物は、豊かな茶色をしていた。

「ジジみたいになる？」

デイノがジジに問う。

「…時間をかけて魔法を蓄積し、そして他の生命が接することで魂を少し分け与え、その魂に引き付けられ、魂と魂の核である星が降ったら、もしかしたら実に樹の魔人が生るかもしれんがのう。」

ジジの答えに、三人ともつぶれたような顔をした。

「なんだかとても難しいね、世界の仕組みって」

ジジはルキの言葉に、

「…だからこそ人々は、学び、探すのじゃよ」

そう言って微笑んだ。

ぐつぐつとスープが煮立つ。キリアがスープを執拗な程、掻き混ぜている。

「……ですから、そのジジというのはですね……」

キリアはジジの事を非難しているようだ。その言い方はぐつぐつと煮立つスープに酷似しており、何処か笑いを誘う。

小言を聞きながら、ガアプとオルセは茶をすすっていた。

「……でもまあ、悪い人ではないよ。沼に結界を張ってくれたし、正直、良い託児所になってるし」

オルセがやんわりと言うと、キリアが振り替えた。

「あの子達は竜の血飲み子なんだよつ命を狙われているかもしれないんだっ」

「……ああ、私もな」

ガアプの言葉に、キリアが二人をじっと見る。何か言いたげに、けれど背を向け、スープに向かう。

ガアプと血飲み子の命を狙う者の正体は分かっていない。三年もその陰に脅えている。きっと、これからも。

全く音沙汰が無く、過去の出来事が嘘のように思えていても、警戒は常に心の中にある。

だが、自分達が生きていく為には働く事が必要だ。それが、酷い緊張を生んでいる。

「正直、ジジの存在には助かってます。彼は、沼に精神力が特に鍛えられた元騎士の私でも近付けない結界を張れるほどの力の持ち主です。その彼が、一定時間こどもたちを保護してくれている。とても力強いですよ」

キリアには、否定できなかった。

だが、それでも小言は何処からか知らないが湧いてくる。

「…力がそんなにある魔法使いがこんな街で蛙なんかを飼って生活してるのが、そもそもおかしいんですよ。しかもモグリでしょう」

それは、キリアの勝手な考えであり解釈である。力ある魔法使いが低階級の街にいる事がおかしいとは限らないし、魔法を学校で学んだ、或いは教えた経験がないとも言えない。

ようは、焼きもちなのだ。

子どもの面倒を取られて、キリアは無意識に嫉妬を抱いているのである。

それに、彼は魔法使いだという。キリアも一応、魔法を学んでいた者だ。自分だって子どもに魔法を教えられる、そんな闘争心もあるのだろう。

…と、ガアプとオルセの二人はそんな事を考えていたが、口にするとキリアが今度は憤慨しそうなので黙っていた。

「…きつと、ろくな奴じゃないよっ！」

ついに荒く言葉を吐き出す。キリアは首元まで赤くなっていた。仕方ない。

ガアプは少し考え、そして言葉をついだ。

「ならば、今日は私が子ども達の迎えに行こう。ろくな奴じゃないかどうか、一度会ってみよう」

第十六話

「…そうして、魔法使いアランは姫を救い、王様になりました、めでたしめでたし…」

ジジは魔法物語の魔法使いアランの章に琴を挟むと、ゆっくり分厚い魔法物語の本を閉じた。

ちらりと見ると、子ども達の反応は様々である事が窺えた。

アーシエの目はキラキラと瞬き、ルキは何でもなさそうな顔をしていて、デイノはすっかり眠っている。

全く性格が違う兄弟である。

「素敵だわっ魔法って！ああ、私もアランみたいな魔法使いになりたい…」

「つまり、王様になりたいんだね」

ルキの言葉に、アーシエがキツと横目に見る。

「ルキって本当に夢がないっ。でも、確かにそうね。それに、魔法使いが王様になれるわけないわ…物語だもの」

「なれるとも」

の突然な言葉に、二人がハッと顔を上げた。

「ふふ、今のエアドラドの王、レマは元々は魔法使いなのじゃよ」

「「本当っ!?!」」

途端に元気になる二人に、ジジはゆっくり首を上下に振ると、

「ああ、本当じゃよ。正確には、聖なる者じゃが…」

「「聖なる、者?」」

ジジは、本棚に魔法物語を納めると、かわりにエアドラド歴史書、

と書かれた本を取り出した。

「…これには、エアドラドの歴史が記されておる」

ジジは最初の頁を開いた。タイトルの上に、一枚の挿絵が載っている。革命の王、ヒルドと記されていた。

右目を眼帯でかくし、左目は燃えるように赤い。鷹揚と一本の剣を両手に大きく掲げており、背に大きな神竜が描かれている。

「これが、初代の王ヒルドじゃよ」

「知ってる。母さんから聞いた」

気付くと、二人の目は真剣そのものであった。いつの間にか、デイノが起きてヒルドをつついていてる。

「ほう、キリアさんがのう…」

「違う。本当のお母さん。」

安穩と相槌つジジに、アーシェがきつぱりと言う。ジジは軽く眉をひそめると、何も詮索せずに続けた。

「神竜の血を飲んで育ったそうじゃ。真つ赤な目はその証と言うがどうだか分からぬよ。目が赤い子は獣人にはよくおるし、時折ヒュームにも産まれおる。お前達のようにじゃな」

ちらりとジジは三人の子どもの瞳を見た。三人とも、赤い目をしている。挿絵の、ヒルドのように。

「ヒルドは革命を起こしたのじゃ。獣魔人革命と言ってな、それまで人間としてではなく、獣や奴隷として扱われておった獣人や魔人の、人としての権利を訴えたのじゃ」

「…人として扱われなかった…」

デイノの言葉に一瞬顔を曇らせ、ジジはかぶりを振った。

「そんなものではない。正に獣以下、石ころ以下じゃった」

ジジは更にページを捲った。

エアドラドの国地図。皺くちやの固い指先は、皇都シオンの真ん中をさした。

「エアドラド城。世界でも有数の美しき竜の城。ここには昔、悪いヒュームの王様がいた」

指先は更に、城の周りの大きな湖をくるりとなぞる。

「アルタナ湖。世界最大と言われる人工の湖。悪い王は獣人、魔人、反抗的なヒュームに城と湖を強制的に作らせた。男も女も子どもも老人も関係なく、粗末な餌に汚水を飲ませ、痩せた体に鞭を打ち休みもなく働かせ、毎日何人も何人も死んだ」

ジジの目は悲しみに沈んでいる。

この樹の魔人は、その長命さから、もしかしたらその場にいたのかもしれない。思い出を語るような、悲哀に満ちたさえずりだ。

「やがて城が出来た。それから数年後、湖が出来た。人々はやっと解放されると思った。彼等の多くは貧しい農民じゃった。重い税と赤貧に苦しむ日々の方がまだ幸せじゃったから。皆、村に帰れると思っておった」

子ども達は、皆不思議そうにジジを見上げた。

「…帰れなかったの？」

ルキの憶測は残酷にも正しかった。ジジは重く息を吐くと、指を移動させた。

城、アルタナ湖、アルタナ湖に注ぐメルン川。水門。

水門に指は止まった。

「奴隷達が、王に命ぜられ水門を開けた」

水門、アルタナ湖に注ぐメルン川、アルタナ湖、城。

「ここで王族は宴をし、獣人、魔人が突然の水に逃げ惑い、流され

てゆくのを見下ろしておった。死んだ人間の数は、数百万とも、数千万ともいわれておる。湖の底に、皆が沈んだ…皆、死んだ…」

子ども達の息を飲む音が、僅かにページをゆらした。三人とも、怒りにうち震えているようだ。そう、その姿は、その時のヒルドそのものだろう。

いや、ヒルドは…

「ヒルドだけが、生き残った」

ヒルドはヒュームだった。彼はだが、獣人魔人を愛していた。彼は彼等が人間だと知っていた、理解していた、認めていた。

だからこそ、ヒルドは革命の準備をしていた。それが、王の密偵の一族、風馬に悟られた。

「革命を企てていたヒルドと、その仲間を根絶やしにする為に、そして戒めの為に、王族は人々を沈めたのじゃ。」

だが、ここに誤算があった。

ヒルドは生き残った。

そして、無慈悲な王に絶望した風馬の長がいた。

風馬の長こそが、ヒルドの命を救ったのである。そして彼を匿った。うちひしがれ、絶望していた彼に、懺悔と共に喝を入れた。

「立ち直り、ヒルドは風馬の長と和解し、義兄弟の契りを結び、国中をかけずりまわり、力を蓄え、そして革命の狼煙をあげた。国事犯の牢獄に使用されていたイリバスト城塞を襲撃し、解体したのじゃ」

革命の火は瞬く間に広がった。

人々は、王の元に蟄集した。手に手に頑丈な棒や、鍬や鋤やらを掲げ、暴徒と化して。

それが生き残る為に残された、唯一の方法であり、人間の自覚だった。

力への意思が燃えたぎり、革命王・ヒルドは叫んだ。

「我々は、人間だ！！」

「かつこいっ」

アーシェが嬉しそうに手をたたいた。ジジはにんまりと口を右にあげた。

「絶対血縁王制の定義は、実質、その日に崩れたのじゃよ。ヒルドは王になったが、ヒルドが王になった理由は、革命を起こした者としての責任を払う為じゃ。すぐにヒルドは、王とは血ではなく、優れた者が司る、と王制のシステムを作り替えた。王の剣、盾、杖により選ばれた…な」

何、何、と子ども達が一斉に説明を要求する。まるで、親鳥に餌をねだる雛のようだ。幼い頃の知的欲求は、食欲と同質の渴きをもっているのかもしれない。

ジジは三人を順に見ると、更にページを進めた。

今度は、美しい正三角形の midpoint に冠が、各頂点に剣、盾、杖が描かれた挿絵がのっていた。ジジのカサカサの指が紙と摩擦して、柔和で柔らかな音を奏でる。

剣。

「警護と秩序を司る。つまり、騎士などのお仕事じゃな。ここの王

さまは護王と言いよる」

盾。

「政治を司る。国の約束事をみんなで話し合う。この王さまは治王じゃ」

杖。

「法律を司る。聖なる者もおるな。聖王」

「これらを三身といい、王を一天と言う。三身が王を選ぶのじゃ。現王レマは元々は前王アレオンの妻じゃったが、妻じゃから王になれたのじゃあない。この三身に選ばれたのじゃ。そして王は……」

「…ジジ、ジジ」

デイノが机を揺らし手をあげている。

「なんじゃ？デイノ」

「せえなるのつて何っ」

デイノが興奮ぎみに訪ねたのを、ルキが驚きぎみに答えた。

「え、デイノそんなこともしないの？聖なる者は魔法使いだよ」

「ちっが~~~~うつ!!」

いきなりのジジの大声に子ども達は一気に目を落ちそうなくらいに開いた。

その様子にジジは赤面し咳き込むと、更にページをめくった。

「聖なる者は聖なる力を持つものじゃ。魔法使いじゃあないわい」
そういつて、ジジが開いたページには、竜の城のある島の地図。
ジジの指の先は城の隣である。

「ここが彼等の住んどる所じゃな、聖園という。聖なる力とは治癒

など魔法では出来ない事が出来る。元々は様々な地方におったが、一ヶ所に集められるようにのうたのは、日中は太陽の光で押さえられておるアルタナ湖に沈められた人々の怨念を、毎夜癒してゆく為じや。怨念は魂の歪みであり、癒された怨念は空に上れる。これはアベドルト平原にもいえる事じや。アベドルト平原は改心した風馬の長がアベドルト平原に渡りて聖なる力ではないのじやが聖なる……」

すでに、子ども達は何が何だか分からなくなっていた。

アーシェとルキは、まるで苦いものを噛むよう言われているような、デイノにいたっては泣きそうな顔である。

だが、そんな事には気付かず、一心にジジは本に向かって説明をしている。

ジジは教えるのが好きなようだ。狂つてると言っても差し支えがないくらいに。

気持ちに火がついてしまったらしい老人は、熱に浮かされ、有り得ない加速度で舌を回してゆく――。

と。

『カラン、カラン、カラン』

「すみません、オルセです」

「おやおや、もうお迎えの時間じやな。時が経つのは早いのだ」

ジジとは逆に、時間が経つのは遅い、と苦痛と共に思い始めていた子ども達は思わず、互いの表情を見た。にやり。

ジジは残念そうに本を閉じると、部屋の扉を開けて玄関へと歩み出した。子ども達も一斉に駆け出す。いつの間にやら、ジジを追い越して。

「わ、おじいちゃんっ」

玄関には普段迎えに来るオルセの他にガアプがいた。

「おや、これはこれはガアプさん。お話はかねがね…」

「お初にお目にかかります」

そう言つて、ガアプは深深と頭を下げた。ジジも続く。

「じー、今日、王さまの事ならつたよ」

ディノはガアプの足に掴んで体重を乗つけた。

「そうか。…いつもありがとうございます」

「いえいえ、ただのお喋りな年よりの道楽ですじゃ。」

ジジはそう言つと照れたように鼻を掻いた。

ふと、ガアプは、心に引つ掛かるものを感じた。

…何処かで…

「何処かで、一度お会いしませんでしたか？」

ガアプの言葉に、はて、とジジは首を傾げた。そして、

「申し訳ないのじゃが、覚えがありませんのう。…はじめましてですじゃ」

ジジは微笑んだ。

「おじいちゃん、早く！」

ガアプは心に引つかかりを感じながらも、子供達の催促の声に押されるように玄関を出た。

「ガアプさん」

ジジが、ふと思いついたように声を出した。

「裏の道を通つてお帰りなされ。花畑がありましてな、丹精込めて子供達と育てたものなんじゃが、これがなかなかでしてな」

子供達が一斉に咲いたの？と声をたてた。ジジは微笑んで首を上

下する。

「花畑ですか。行きましょうよ」

オルセの言葉に、弾かれる様にして子供達が走り出した。

「・・・では」

ガアプはジジに頭を下げると、子供達の背中に早足で続いていた。

ジジの強い視線を、背中に感じながら。

風景が柔らかに背後へと駆けて行く。

子ども達は瞬く間にいくつもの風を切った。

すぐに、花の力強い芳香が、した。

ジジの家に隠れるようにして広がる畑に、その花達は咲き誇っていた。

黄色。赤。白。

極上の色彩世界。

山陰に下ろうとしている鮮やかなたそがれの光の帯に彩られ、しなやかに風に揺れる。

「見事なものですね。遠回りになりますが、うん。これはそれだけの価値がありますね」

「ああ、素晴らしい」

子ども達が兎のように跳ねながらだんだん進むのを、オルセが転びますよ、と注意するのを、まるでガアプは夢の中で聞いているように感じた。

心に、棘があった。

それが、ちくちくと痛む。

幻想的な景色の中、ぼんやりとその正体を探しても、まるで分からない。

目の前の美しい無数の花花から、灰色の花を一本見掛けてしまったように。心にぽつんと、雨の滴がおちたように。

「おじいちゃん…！」

痙攣。

足元に、アーシェがいた。

「はい、これ」

差し出されたものに、ガアプはひざまずいた。アーシェの両手から、ガアプの白髪混じりの頭の上へ。…それは、花の冠であった。

戴冠式の、ようだ。

アーシェの頬が、林檎よりも赤く誇らしげに綻んでいた。

「あなたは、王の杖、剣、盾に選ばれました」

ふと、目頭が熱くなった。何故だ？

「おおせの儘に…」

立ち上がり、アーシェを抱き締めて抱えあげた。また少し、重くなった。

「王の杖、剣、盾を学んだのか」

ガアプの言葉に、頷く。

「王は、三身に選ばれるんだって。わたしね、ずっと王様って血で選ばれると思っていたの。だからね、とても嬉しい。だってそれって平等で、正しくて、素晴らしい事だと思うのっ」

——何？

「…ジジさんは、そう教えてくれたのか？」

「とても凄い人なのね、革命の王ヒルドさんって。わたし、好き！」

アーシェの幸せそうな顔に、ガアプは苦いものを感じた。

——あの老人は、そう教えたのか。

それは多分に詳細で、だが間違っている。

ガアプはそう言おうとして、だが言葉を飲み込んだ。否定してどうなるのか。

確かに歴史の書や法では、王は血で選ばれないとされている。三身が、平等に選ぶと。

だが、実際は違う。

この国が生まれかわってから、王は皆、ヒルドの末裔かそれらの血族、あるいは親族である。三身は、その中から選び続けているのである。

ヒルドは望まなかったろう現実、あまりにも彼が突出した男であつたから生まれたと言える。

まさに、王と呼べる男だったのだろう。虐げられた人々が、或いは王を奪われた人々が、すがりついた男。だからこそ、皮肉にも矛盾は産まれたのだ。

この国は、ヒルドの血に今だすがり続けているのである。

それに異論を吐いていた過去の自分。そして今、反逆者の汚名を着せられ、命を狙われている、自分。

まさに、腐敗——。

だが、そんな事を子ども達に語ってどうするのだ？

平等を否定しなくとも、彼等はこれから大人になるに連れ、嫌と言つほどその矛盾をつきつけられるだろう。

無論、教えない事が罪になりえる事は、ガアプ自身しっていた。

だが、この笑顔を壊してまで教える事だとは思えなかった。

「きっと、レマ様も素晴らしい方だわ。わたし、会いたい」

瞬間。

ズキリ、と。

棘が心の臓の壁を食らった。

「ああ、そうだな。きっと素晴らしい方だ。…きっと」

ガアプは、幸せだ。

人は、金や地位など無くとも、例えば鳥籠のように狭い世界でも、幸福を歌うことが出来る。

自身の中に、幸福の青い鳥を容易く飼育する事が出来る。

愛しい子ども達に囲まれ、愛や夢や、或いは希望に胸を膨らます。
至福という名の、幸福で美しく、平凡な日々。甘く、優しく、
抱擁されるような日々。

ガアプは、幸せだった。

鋭い棘から、細く線を描いた血にさえ、無意識に目を瞑ってしま
うほどに。

第十七話

木々が、ざわめいている。

ジジはガアプ達の姿が見えなくなった頃、正面の道をゆっくりと歩みだした。

道の向こうから、ゆっくりと近づいてくる三つの影があった。

影は、橙に染まり始めていた道を、普段子供達が行き帰りに使う道を、静々と足を進めていく。

ジジもまた、歩みを寄せる。

…ゆっくりと…

近付くにつれ、その姿がくつきりと見え始めた。

三人とも、白い装束で身を隠している。

フードを深く被り、きりりと締まった口元しか顔は確認できない。だがジジは、三人が何者なのか分かっているようだ。立ち止まり、真っ直ぐ彼等を見据える。

ついに、三人がジジの前に、立つ。

「久しぶりじゃのう、セリス」

「ええ、全く…お久しぶりございます、ジジ」

年老いた、女の声。

三人の中心に立つ人物が、深々と頭を下げた。ジジも続く。

どうやら、長い杖をついた中央の人物―セリスの―が、最も地位が高いようだ。

斜め後ろの両脇に立つ人物は青年と言って良いほど若く、白い槍を片手に持っていると見ると、護衛のようである。

「ここではなんじゃから、まあ汚い家じゃが、入りなさい」
そう言って、ジジは集団を迎えた。

三人は、ゆつくりとジジの後について進んでゆく。
護衛らしき青年は二人とも、ひどく緊張しているようだ。同じく、セリスも。

ジジの言動に神経を行き渡らせているという事が、端からみても分かる。

三人はゆつくりとジジの後について、玄関、廊下と渡る。通されたのは、客間であつた。

「さて、お茶をいれますかな。よいヒマワリ茶が…」

客人に対し、にこにここと微笑むジジに、セリスは首を左右にふつた。

「いいえ、結構です。それより…」

——意を決するように。

「お迎えにまいりました」

セリスは、よく通る声で、ジジの背に言った。

「はて、何の事じやろうか…」

「お迎えに、まいりました」

今度は更に、ハッキリとした口調だつた。

「分かっているでしょう、ジジ。あなたは選ばれたのです。それに…あなた以外にはいないのですよ。」

「すぐるような口ぶりだ。ジジは溜め息をつくつと、振り返つた。顔の皺が目立つ。」

「わしの代わりはいくらでも」

「—おりません。あなた以外には。あなたは…」

セリスの目がフードの隙間からちらりと見えた。強い、目。

「あなたは、ただ一人、」

そう、ただ一人

「イエズガルドの名を受け、そして――」

聖王になるお方です――

「……聖王、のう……」

ジジは床に視線を移動しながら、途端に嘲笑した。

「……女皇帝レマの教育係が聖王、とな……」

セリスは小さく、関係ありませんと答えた。それに素早く、ジジは首を振る。

「……関係はあろう。もし、レマが悪政を行おうとした時は、どうなる？ わしはその芽を摘めるじゃろうか？」

「あなたなら出来ます。あなたは本当の意味でレマ様を教え子として愛していらいっしやる」

凜と背を伸ばし語るセリスに、ジジはその水晶のような目をやった。

「何故そんな事がいえるのじゃ？ どうしてわしが、悪政を行うような者を育てたと言う汚点を隠そうとはしないと。聖王という権力の椅子にしがみつく事なく、正しく事が行えると、どうして言えるのじゃ？」

セリスは、睨んだ。

「わたしはあなたの妻ですよ。」

ずい顔と顔を近付ける。その目は、まるで鉄を錬金する槌、女傑の目である。

「自分の役目の大きさにうろたえて聖園と妻から逃げような腰抜けと赤縄を結んでも、耄碌の拳句、そんなつまらぬ事をやらかすような愚か者を夫になどしません。聖園管理人セリス・ビンセントを舐

めないで頂きたい」

ジジはうつ向き陰にセリスをチラリと見た。

何か言おうとして…だが言えないようである。その姿に、更にセリスは語る。

「あなたの妻としての私は、あなたなどどうでも良いのです。ですが、聖園管理人として私は伝えたい。――聖園はあなたを選びました、国もまた、あなたを選びました。あなた以外の、何者でも無いのですよ」

そこでジジは、溜め息を吐いた。

「…もう一度、考えさせてくれんか」

空がじわりじわりと、東から暗闇に侵食されてゆく。

桃と漆黒と紫が、雲に融解し風に流れてゆく。

夜になると、エドガーは、不思議な活気で充ち溢れる。

朝にも昼にも無い、静かに燃えるような活気だ。露店が並び、街道には人が溢れる。

ドラグノア各地から集まった珍品、芸術品、中には販売が制限されている筈のものまで、太陽を失った月の影に乱雑に並ぶ。

月が美しい年頃の娘のように輝く時、この街は、言わずとした闇市と化すのだ。

これは旧王国時代に、獣魔の商人達が、ヒュームに隠れて市を開いていた事を発端にする。ならず者の街エドガーの、艶のあるもう一つの顔だ。

そして。

街の最も高い建物の屋上に、一つの人影があった。長いマントが突風に扇がれ、はためく。

「…竜の、血飲み子…」

その呟きに気付く者は、誰もいない。

梟がホーホーとまのびした歌を、雲の少ない夜に響かせている。

囁きはとても遠く、月にでも向けているようだ。

ディノ、アーシエ、ルキの三人は川の字に、ベットに横になつていた。

布団を頭から被り、その隙間から窓に浮かぶ月を、僅かに見上げながら。小さく、今日の出来事を囁きながら。

と、突然、三人の真ん中で、うとうとしていたディノがむくりと起き上がった。

「おしっこー」

「…さっき行つたじゃない」

「おしっこ、行こっ？」

「一人で行けよ」

眠りの甘さが少し降りてきている二人は、ベットから離れたくないので、ディノにとってもそっけない。

「ねえ、行こー！」

ディノはベットの上をピョコピョコ跳ねた。子供用の樹で作られたベットが、ガタガタ音を鳴らす。

二人は完全に無視をしていたのだが、ついにあの人が反応したようである。

「ガタガタうるさい！さっさと寝なさいっ何時だと思ってるっ」

子供部屋の扉を、ボタン、とキリアが開いた。アーシェとルキはすかさず狸寝入りをしたので、ぽつんとディノだけ睨まれる。

「おかーさん、おしっこー」

「はいはい」

キリアはベットに近付くと、ひょいとディノを抱え上げると、そのまま反転して扉に向かう。そして。

「あんた達も、さっさと寝なさい！」

ボタン、と扉を閉めた。

…狸寝入りはバレバレだったようである。

二人は顔を見合わせると、布団から素早く顔をだした。クスクスと忍び笑いをする。眠気は、どうやら今ので吹っ飛んでしまったようだ。

ルキは立ち上がると、音をなるべくたてないように、ゆっくりベットの前にある窓を開けた。

ふわりと冷たい風がカーテンを押しやる。夜の光に照らされて、それは、踊る死霊のスカートのように揺らめいた。

アーシェはというと、ベットの間に小さな熊の形をした木彫の箱をとりだした。パカリと熊を割ると、中からナッツを摘む。それを、外の窓枠に丁寧に並べてゆく。魔法の紋様でも、密かに象るように。

そして、窓は閉められた。

小さな夜の恐怖と、小さな夜の興奮の中、二人は布団の中にちぢこまる。視線は、窓の外。

二人は、息を殺して待った。

暫くすると、遠くの木々がわさわさと揺れる音がした。風ではない、生き物の出す、音。

ひゅん、と、それは華麗に風を切った。

森の風馬と呼ばれる、蝙蝠のような翼が生えた小さな羽リス。

羽リスは、窓枠に着陸すると、端から器用にナッツを拾い始めた。

この羽リスは、二人が毎晩、窓際にナッツを置いて、最近になって漸く来るようになった夜のお客である。

羽リスは遠慮なく、次から次へと頬袋にナッツを詰め込み、モソモソと口を動かした。最後の一個に手をのばした手は、だがナッツを胸に抱えるだけである。

「この子、九個が限界みたい」

アーシェの呟き。

「十、食べたら区切りがいいのになあ」

ルキの呟き。

羽リスは、窓の側でそんな観察をされているとは露知らず、ひたすらガシガシとナッツを歯で削っていた。

ふと、再び遠くの木々がざわめいた。羽リスが、途端に痙攣するように立ち上がる。

「あれ？仲間でも来たのかな？」

ルキは布団からノソリと出ると、羽リスに気付かれないよう注意を払いながら窓の外を見た。

羽リスは、震えていた。
そして、
突然、消えた。

第十八話

居間で、ガアプとオルセが寢酒を組み交していた。

「…で、ジジさんに見覚えがあると…」

オルセの言葉に、静かにガアプが傾く。

「そうだ。何処かで会ったような気がするのだが…だが、思い出せん」

「剣には樹人はいませんし…」

「うむ。樹人は珍しい人種だ。街中か何処かで樹人を見掛けて、それでジジさんに会ったような気がするだけかもな」

「…樹人は皆、似たような顔をしていますから…案外そうなのかもしれないね」

オルセは酒瓶からガアプの盃に酒を注ぎながら、微笑んだ。

と、そこに、ドタドタという独特の足音と共に、ディノが駆け足で廊下から飛び出した。

「ディノ、まだ寝てないのか。早く寝なさい」

「おじーちゃん、まぜてゝえ！一緒にね、ごはんするっ」

「ディノ！」

ずい、現れたキリアに、ディノは軽々と担がれる。

「全く、目を離すとすぐだね、あんたは」

キリアの肩の上で、じたばたとディノは抵抗するものの、キリアには意味は無いようだ。

「はなしてゝずるいつ」

オルセは立ち上がると、キリアにぶらんと垂れ下がったディノの頭を撫でた。

「大人になったら一緒に飲みましょう。」

「くさいっつやっつ」

ディノは、酒臭いオルセの顔を両手で押しやると、鼻を摘んだ。思わず、その仕草に笑みが溢れる。

「ふふ、それじゃ、おやすみなさ………！？」

それは、あまりに突然の衝撃だった。

小屋が振動した。刹那の間を置かず響く、バリバリと何かが破壊される、雷に似た音。

「キャアアアア！！」

アーシエの、悲鳴――。

ガアプとオルセは立ち上がり、廊下に飛び出した。そのまま、音の源へと土煙を蹴りながらひた走る。

「アーシエ、ルキッ！？」

――闇の中に、血の臭いが凝縮していた。

男が立っている。

だが、男はすでに死んでいた。頭がパツクリと割れ、中から破壊された脳がみえた。汚濁の黄色にぬめった目玉がふたつ、獰猛に光っている。

死霊。

それも街の人間の死体である。遠隔呪文により、操られているのか。

その体軀に生えた二本の太い腕が、がっちりとアーシエ、ルキを

抱えこんでいる。

二人とも、気を失っているようで、ぐったりとしていた。

死霊は、ガアプとオルセに気付くと、素早く踵を返した。

「くっ…！先に行きますっ！」

オルセは叫ぶように言うと、子供部屋にぱくりと空いた穴から飛び出した。そのまま、死霊を追う。

「何があつたんですか…！？」

デイノを担いだキリアが、子供部屋をみて、はっと息を飲む。

「今、オルセが死霊を追いつけていった」

「…死霊！？」

死霊とは、生命が死んだ後の、あつてはならない姿の事だ。

生命は死すると、魂が肉体を離れ星になり、天空で流転することで浄化し、生まれ変わる事が出来るとされている。

だが、生前の憎悪や怨恨や愛情が強すぎたり、魂操師こんそうしに魂を奪われたりすると、死霊と呼ばれるモノとなる。

前者の場合は、ただただ燃えるような負の感情に侵され生けるものに危害を加えようとする。

また、生への執着が底無しの空腹を生み、なりふり構わず生けるものの肉体、そして魂まで食らうのだ。

だが、近付くと、大抵の生けるものは寒気を感じ存在に気付く。己の魂が、歪んだものの存在に警告を発するからだ。

後者の場合は、気付かない。魂そのものが術者に操られており、ただの糸引き人形のようなものだからだ。魂はそれに警告を発しないのだ。

だから人々は年の始めに、生者の守りと呼ばれる魔法陣を、街の周囲を練り歩き、かける。

それにより、死霊が街に入らないようにするのだ。魔法使いが正式にかける魔法ではないとはいえ、大勢で念をかけるので、効力は普通の魔法使いがかかる守護魔法よりもある。

「…そんなつまさか…」

——街の中に魂操師がいる。

しかも、魂操師は街の人間を殺し、術に使ったのだ。間違いなく、ただの人さらいでは無い。

——竜の血飲み子を狙っている——

「キリア、すぐにデイノをつれて、隣の山を越え、アルベルト平原に、風馬の元へ行きなさい」

「……なっ！」

「風馬は、鎮魂文化を持っている。そこなら安全な筈だ。二人を助けだした後、我々も向かう」

「そんなっ…私も」

——戦います。

そう言おうとして、キリアはその言葉を飲み込んだ。

騎士の、金獅子騎士団団長の男の目が、強くキリアを見つめていた。

ふと、キリアの頭に、あの言葉が浮かんだ。

「剣と、失われた翼に誓いを」

神と騎士の、あの誓いの言葉が。

「…お前はディノを守るのだ」

キリアは、その言葉に震えた。

忘れていた、感覚。自分は、騎士なのだという、紛れもない事実。それが、蘇った。

「はい…！」

キリアは心臓に右拳をあてて、凜と返答した。

何が起こったのか分からず、不安そうにしていたディノが、途端に笑顔になる。そして、キリアの真似をした。

ガアプはそれをみやると、すぐに背にして、オルセの後を追う。

キリアもまた、すぐに行動をうつした。

居間に戻ると、床に片膝をつけ、敷かれた板を押し上げた。

「うわぁー秘密基地？お母さんすごいねぇ」

「まあね」

地下へ続く石の階段。キリアは床板の扉を閉じて、駆けるように下った。何もない暗がり、ディノが怖がって胸に顔を埋める温もりが痛いほど感じられる。

…ああ、ここを本当に使う日が来るとは。

そこには、一頭のシンガがいた。

普段は、家の横に広がる畑を耕す時に使うシンガだった。よく、なぜヒルポスを使わないのかと言われたものだ。

全ては、この日の為に。

キリアは地下室の隅に積まれた藁を崩した。中から長い外套を二つと、大入りの革袋を取りだし、ディノの寝巻きの上に長外套を着せる。

「これからどこ行くの？」

「あんたの友達がいる所だよ」

「おともだち？」

不思議そうに眉をよせるディノを、シンガの鞍橋に乗せると、自身も跨った。

「よろしく頼むよ」

眠りを邪魔されて荒い鼻息をたてるシンガをなだめるように、その首を擦ると、ディノに腹から覆い被さるようにシンガに捕まる。そして、軽く尻を蹴った。

途端にシンガは暗闇を疾走した。ぐんぐんと風を切り裂き、視界がだんだん明るくなる。

月の光。

その周囲に今夜もまた、星となった魂たちが、円を描き、夜空をさ迷っていた。

これが、キリアとディノが騎士たちと暮らした、最後の夜となった。

第十九話

月は雲に隠されて、辺りは闇が闇とおり重なり合い、虚ろな夜の植物の匂いをかもしだしている。

その中に、僅かに血の芳香があつた。

「くっ」

オルセは、アーシェとルキを担ぎ逃走する死体を懸命に追う。

森の茂る下り坂を、風を全身で切り裂くように疾駆する。木の葉や枝が、皮膚を弾くのも気にもとめずに。

だが、歯がゆさを感じるほどに、全く距離が縮まらない。

そればかりか、ぐんぐん開いているようだ。無理もない。相手は、操られた死体なのだ。

肉体が操られ、本来ある肉体の運動能力を越え、そればかりか限界を無視して動いているのである。

並大抵の早さではない。操られた死霊が最も敬遠される理由のひとつである。

死霊の割れた頭骸から滴った血が、宙を飛んでオルセの目に入る。陰もない漆黒では、つんとくる死の独特の臭いだけが頼りであった。

やがて、視界に僅かに星のような明かりをオルセは見た。伸びた葉樹の無数の手の間から、瞬き光る。

街だ。エドガーに向かっているのか。
何故だ？

考える余地は無い。ただ、追うのみか。
オルセは大地を蹴りあげる。

視界が一気に広がる。獣道を切り裂いて、ついに森を出た。そして、信じたくはない現実をみてしまった。

街の入り口。そこに、二体の竜の像の中央に並ぶように、十人はいるだろう死霊が、頭を揺らして立っていた。

一体、何人の街の人間を殺したんだ…！？

二人を担いだ死霊の足が、あらぬ方向に螺子曲がった。

そして無様にくずおれる。慣性のままに、アーシエとルキはまるで人形のように飛ばされ、それを死霊たちががちりと掴んだ。

しまった！

アーシエとルキを丸太でも運ぶように担いだ死霊達は、二手に分かれて、左右の通りに消えて行く。

左へは、二人を担いだ群れが、路地裏へと。

右は、よりによって、繁華街へと。

オルセは立ち止まり、左右を交互に見た。

…どうする！？

「右へ行け！」

背後から、ガアプの勇ましい声が聞えた。弾かれるように、オルセは右の通りへとひた走る。

そしてガアプは左へと、更なる暗闇へと消えて行った…。

エドガーの街は活気に充ちていた。

通りには人と光が溢れ、歓声とも罵声とも取れる声が飛び交って

いた。松明と人の体臭が充満し、絡み合いながら夜空に上っていく。

「さあ、安いよ！その兄さん、この剣はどうだっ！」

「いやいや、そんなものなど玩具だ、飴だ！こちらが最強の剣だよっ！」

商人達は競いながら客寄せをしている。今にも、暴動でも起きそうなほどの熱に、皆浮かされているようだ。

酒場からは、既に喧嘩する声まで歌姫の歌に乗せて、踊るように爆ていた。

音が、光が、人が。

安宿の二階の窓辺で、一人の娼婦が、細くしなやかな腕で、キセルを吹かして何もない夜の虚空を見上げていた。行為を終えた気だるそうな瞳で。

ふと、その瞳が、奇妙なものを見付けた。

「あれはあ、なあにい？」

娼婦がキセルを空につきだした。その先を、娼婦の腰に手を回していた酔っぱらい男がみやる。

「なんだあ、男の尻でも見付けたかあ」

冗談まじりの酒くさい息を吐き出して、赤い鼻が雲に月を奪われた暗い空を向けられた。

「……はあ？」

……そこには、男が産まれてこの方、見たことも聞いたこともないものが、あった。街の、中に。

男は、目をしばたいた。更に重い目をこすって、見つめた。

……山？

「なんだあ？」

男がほつけた声を出して、女と共に窓から体をのりだした時。突然、悲鳴が夜を切り裂いた。

「し、死霊だああ!!」

絹を切り裂くような悲鳴に、二人は山らしきものを一瞬で忘れ、東を見た。

人がまるで波を描くように次々と逃げて行く。繁華街は川にでもなったかのようだ。

人が人を押し、押しへしあい、潰されながら、我先へと逃げる。

猟氣的な、パニック。

その波の端に、ばりばりと複数の死霊が、人間を生きたまま肉体を引き千切り、もて遊ぶように食らっている。

ふいに、死霊達は人間の肉片を体に絡ませながら再び走り出した。

そのつま先に、人々の混乱の渦で怪我をし、足をひきずり地に伏せながらも、懸命に逃げようとする一人の毛纏系の商人がいた。獲物を狙う死した狂人達の目が光る。

商人は、怪物を目の前にして体をちぢこませ目を瞑った。おしまいだ。

長い毛で覆われた商人震える体軀に、血まみれの手が伸びる――

ズンッ!

商人の耳に、そして街道に重たい音が、響いた。そして、

「早く逃げて下さい!」

商人が目をあけると、そこには一人の青年が立っていた。
先ほどまで商人が売っていた、剣が死霊の背中に塔のように生え、
輝いている。

青年の勇気に震え立ち、商人は感謝の言葉を呟きながら、足を引
きずり走り出した。それを商人仲間達が介抱する。

青年は「オルセ」は、それをみやると、死霊に向き直った。死霊
の口に、潰れかかった眼球があった。そして次の瞬間、果実の粒の
如く、噛み砕かれる。

オルセは、切長のかなしげな目でそれをみやると、呟いた。

「すみません」

「斬ります。」

オルセは猛々しく叫ぶと、柄を持つ左手に力を込めた。

肉が裂ける音と骨が断たれる音が剣を共振させたかと思うと、刹
那の間もおかず、死霊は切り裂かれた。

二手に分かれた体躯から肉体のあらゆる汚物が爆ぜる――。

それが、火蓋となった。

猛然と死霊が、オルセに突進する。

剣を横に振り切断し、更に心臓を突く。なぎ払う。

死霊がオルセの腕に噛みつく、否、かわす。

後退しつつ死霊の頭をかち割り、瞬間、踏み込んで背後に近付いていた死霊をかわす、首を斬る！

逃げ隠れ、武装し、或いは建物の窓から、人々は、青年の剣さばきを見た。

そして、口をあんぐりと開けた。

人々には、まるで、舞いでも舞っているかのよう見えた。なんて華麗で、残虐な、剣士。

たまらず、窓から娼婦が声をあげた。

「…が、頑張つてえください！！」

そのひと声で、人々は怒濤の如く湧き出した。

「がんばれっそこだっ負けるなあ！」

「右右、左からも来てるぞっ」

「ぎゃー！後ろっ」

オルセは割れんばかりの応援や歓声さえ聞こえないかのように、冷静に斬り続けてゆく。

敵は、一度切ったとしても、魂が残れないほどに肉体を斬らなければ、胴体や足だけでもオルセに向かってくる。

かわし、蹴り、オルセは剣を振った。

オルセの剣に、次々と死霊は倒れていく。

そして、最後の、ひとり。

オルセは、血に塗みれた剣柄を強く握ると、突き上げるように心臓から喉、後頭部へと一気に切り裂いた！

—死霊が、小さくうめく。—

オルセは無言のまま、剣をひいた。死霊の傷口から血が吹き出し、オルセにかかる。

そして、死霊の体は糸の切れた操り人形のように、ごとんと、石畳に落下した。

風が強いのか、雲は漆黒の炎のように流れている。雲に隠されていた月が、ふいにその肌を露にした。

血しぶきに濡れたオルセと剣が、月光を寂しく反射させるのを、人々はいつしか言葉を忘れて見つめていた。

先ほどまでであった割れんばかりの歓声が嘘のように。

最後の一人、死霊が、大量の血を噴き出しながら大地に崩れた時、最高潮に達していた筈の人々の熱気は、見る影もなく消え失せた。

何故なら、死霊が剣で無惨に貫かれた瞬間、人々には、オルセが自分達を救った英雄というよりも、自分達とは全く異質なものに見えたのだ。

石畳の道に転がる死霊は、ぴくりとも動かなくなった為に、すでにただの街の人間の死体に他ならなかった。少なくとも、人々にはそう見えていた。

そして、血だまりの上に立つ、自分達を救った筈の戦士が、まるで残虐で冷徹な、死神のように見えていた。

自分達を救った戦士に対する労りや感謝の言葉が、不思議と喉から出てこない。

まるで海よりも深い、心の奥底に沈んでしまったかのように。それほど非現実的に、彼は強すぎた。

オルセもまた、忘れかけていた自身の強さに呆然としていた。

ああ、自分は金の獅子だったのだ、と。

オルセは、自身が残酷に切り捨てた死霊達を見下ろした。黄色く濁った皮膚から除く、醜い茶色の肉が、どんどんすえた鉄の匂いを含んで赤すぎる真紅に染まる。

オルセは思わず、目を背けた。
心臓と肺が、せわしなく空気を欲する。全身が、粘土のように重い。

剣を握ったのは、恐ろしく久しい。
人を切ったのは、何年ぶりだろう。

私は何故こんなにも躊躇なく切れるのだ。何故こんなにも強いんだ。
だ。

何故、ガアプ様と、キリアと、子ども達と過ごした日々が頭にちらつくんだろう？

もう戻れない気がするのは何故だ？

ふと、オルセは手を見た。

その手は、血まみれだった。

「…ねえ死霊つてえ、どういう事お？」

窓から乗り出して、娼婦が隣に同じく乗り出す男に尋ねる。

「さあ、わっかんねー…あ。」

「なあに？」

途端に、男が青ざめ、窓から一気に離れた。

「逃げるぞ」

「ええ、だつてえ退治したよ」

娼婦は、頭を揺らして男に抱きついた。なんでえ帰らないでえ、としがみつく。男は蒼白のまま、窓の外を指差し、呟いた。

「山なんかじゃ、ない」

第二十話

死霊達の、まるで遊びに興じる子どものような背を見失わぬよう、ガアプは狭い路地を駆ける。

今にも暗がり足をとられてしまいそうになりながら、それでも交錯させる。

街の静脈を走るような、うねる道は、やがて石畳では無く、踏み固められた土に変貌していった。

更なる闇の外れへと、誘われているのか。

次第に両手に広がる建物が減少し、ついにはただの田畑と移る。家々の密集地は、既に背後であつた。

その頃に漸く、この道が何処に続いているのか、ガアプは悟つた。

——悪趣味極まり無い——

そこは、墓地へ続く街道であつた。

ひとつの竜の巨像へと道がのびており、道の横には小さい竜の石像が並んでいる。それよりいくばかりか大きい竜の像が、円を描き巨像を囲む。

巨像は、ガアプの背丈の実に三倍以上はある。

エアドラドの多くの地域は、土葬でなく火葬である。

死した者は燃やされた後、この竜の巨像の下に集められ、巨像の下にある巨大な地下室に納められる。皆、ここで静かに眠る。

ふざけている。

ガアプはついに、竜の像の円の中へと入った。

猛烈な風が天をめぐるっている。雲は漆黒の炎のように流れている。雲に隠されていた月が、ふいにその肌を露にした。

月光に照らされ、闇の中から巨像の前に立つ者の姿がくっきりと浮かぶ。

男だ。

黒衣に身を包み、定かではないがほくそえんでいるようだ。螺子曲がった猫背が、厚い布地に覆われていても分かる。

背後に、数十の死霊になった街人を従えており、街人の幾人かは槍や剣などの武器をぶらぶらと両手で揺らしている。

「…何者だ」

男がにんまりと口を歪めると、茶色に汚れた歯が、ぬめぬめと月光を撥ねた。

「ガアプ、お前ガアプだろう」

男はそう呟くと下品な笑声を出した。意外にも若々しい声質だが、それは喘息に似て、不快なものであった。

ガアプは沈黙のまま、男の横に放置された子ども達を確認した。ぐったりとしてはいるものの、確かに息はしているようだ。

「…聞こえないのかあ！お前ガアプだろおー！この老いばれ騎士がよおー！！」

男が、努声をあげる。どうやら、かなり沸点の低い男のようだ。しかもこの男は、ガアプが騎士だと知っている。

この男、一体…。考えを巡らせながら、ガアプは答えた。

「…そうだ。私の名はガアプという。」

その返事に、男は手を叩いた。

「ガアプ！やったあ！ガアプ！」

そして、

「じゃあ死ね」

男の言葉に、首輪が外された飢えた犬のように死霊が放たれた。

その牙は、勿論ガアプに向けられている――。

「むう……！」

ガアプは気合いを入れると、自ら死霊の荒波へと飛込んだ。

ガアプはまず、首に噛みつこうと顔を寄せた死霊の腹部を正拳突きし、吹き飛ばした。死霊の群れが、一気にその列を乱し、或いは崩れる。

ガアプは更に踏み込む。

今度は回し蹴りを行い、ガアプを囲んでいる死霊を弾き飛ばす。円を描き死霊が崩れる。

後ろに潜んでいた、武器を持った死霊達の刃が煌めく。

ガアプはその乱雑な打ち込みを一瞬でみきると、その刃と刃の間にスルリと入り込む。

剣を持った死霊の一人の手根骨を上から手刀で打つ。死霊の手から反動で落ちた剣を握ると、そのまま死霊を蹴る。

そして上腕に力を込め、叩き斬る！

「……ああ……？」

黒衣の男はうめくと、頭に触れた。フードのように男の顔を隠していたそれが、黒の両翼を広げた。それは、烏であった。

烏は男の頭から離れると、弧を描き男の周囲を飛び回りながらゲ

エゲエと鳴きわめく。

男は、鳥の作り出す風の中で、がりがりとした乱暴に頭を掻きむしり、ぶちぶちと髪を抜き、じたんだを踏んだ。

「…あんだよつふざけやかってああ…！」

男の苛立ちを剥き出しにする姿を、ガアプは死霊の肩と肩の間から見た。

と、光が突然に瞬いた。瞬時に、体を振り、かわす。

爆裂音。

ガアプが先程まで足をとめていた大地が輝き、次の瞬間吹き飛ぶ。

「魔法…」

厄介な相手だ。死霊を操り、しかも魔法まで使うとは。

だが、ガアプの脳裏には引つ掛かるものがあつた。

死霊を操る方法を知っているという事は、魔法の知識をある程度持った上で、更に独学が裏で学んでいるのだろう。

魔法を学んでいるのなら、魔法学校に属していた可能性がある。魔法学校を落ちこぼれ、闇に手を染めたのか？

だが、死霊をこんなにも操る点を見ると、相当の使い手である。成績がかなり優秀であつた筈だ。だが、男の様子や使役の仕方を見ると、魔法戦術を含む魔法の知識にたけているとはとてもではないが、思えない。

…そんな事よりも、男は何故「竜の血飲み子」そして「騎士ガアプ」を知っているのか。

「竜の血飲み子」を探す内に「名を失った騎士の存在」そしてそれは「金獅子ガアプ」という事象にたどり着いたとも言つのか？

この男が？そもそも何故、血飲み子を狙う？

そしてガアプは、気付いた。

——これは、組織的なものだ。

血飲み子を追ってガアプに辿り着いたのか、ガアプを追って血飲み子に辿り着いたのか、それとも両者を追っていたのかは分からない。

だがどれにせよ、この広いエアドラドから、たった三年でこの男が血飲み子とガアプを見つけたとはとても考えられない。

ならば、この男は何者かが仕向けた下の人間かもしれない。また、ガアプをそもそもの狙いとしていたのだとしたら、一天三身の…多分、盾の、それも地位が高い人間が絡んでいるのだろう。

——なんて、厄介な——

「死ねよ、死ねよ、何で当たらないの？！」

男は魔法を弾きながら犬のようにわめき続けている。

男の放つ魔法は敵味方の焦点さえも乱雑なもので、男の魔法により何体もの死霊がその体をえぐられてゆく。

無論、痛みを感じない死霊達は、魔法で腕や足といった体の一部が吹き飛んでも、ガアプにその牙を向ける。

ガアプは魔法弾の間を抜け、次々と死霊に剣を振るう。

その刃は、恐ろしく正確に死霊の首を撥ね、或いは心臓を突いていく。

だが、この緻密な動きが長く続かないだろう事を、ガアプは知っていた。

体が思うように動かない。そればかりか、重く感じた。

自分は剣の代わりに鍬を振るい過ぎたのだと、痛感していた。

だが、ここで終るわけにはいかない。諦めたら最後、ガアプのみならず血飲み子の命さえ危ういだろう。

ここで倒れるわけには、ゆかぬ……！！

「あんだよ、なんでだよ、ふざけんなよ……！」

ガアプが死なない事に、そして魔法が当たらない事に、黒衣の男は罵声をあげた。見境無く、次々と魔法を放つ。

男の頭上を、ギャアギャアと烏が叫び飛び回っている。殺人を促すような、頭に響く、汚らしい、音。

ふと、ルキの体がびくんと痙攣した。気が付き始めたのだった。薄目を開けて、小さくうめく。

そして、一気に目を覚ます。

「……あ、う……。」

その小さな赤い瞳は、信じられぬ光景を映した。

わけもわからず、混乱した頭で、横に倒れるアーシエの肩を激しく揺する。

「アーシエ！起きて！」

小さく寝起きのような声を出して、アーシエが瞳を開いた。

そして、直ぐ様、ルキに抱きつく。

「……！」

アーシエは恐怖に顔を引きつらせ、人垣の向こうのガアプを見た。全身がガクガクと震える。疑問が頭を駆け回る。

おじいちゃん…何故剣を、振るっているの？

…どうして、人を殺しているの？

あなた方に、大切な事を、伝えなければなりません。

なあに、お母さん。

もうすぐ、ある御方が、この場所にいらっしゃいます。

ある、御方？

よいですか、何があってもその方に付いてゆくのです。

その御方は、あなたたち二人を、導く者です。

導く、者？

ええ、その御方はあなたたちを守り、

愛して下さいる御方です——。

お母さん、

おじいちゃんが、

死んじゃうよ…。

「
…やだ。
」

ガアの背中を、容赦なく剣と槍が打ちつけ、切り裂いて、ゆく。

「
やだ。
」

その肉を、爪と歯で噛みつき、食らってゆく者が、いる。

「
やだ。
」

あかい、

あかいあかいあかいあかいあかい。

あかいあかいあかいあかいあかいあかい……！！

あかいあかいあかいあかいあかいあかいあかいあかいあかいあかいあかいあかい……！！！！！！

「やだあああ……！！」

第二十一話

月が、輝く。

オルセは、煌めき乍ら刃から滴りおちる血を、ひとつだけ目にした。そして、頭を振った。

今は、呆然としていない場合ではない。自身のほうけた頭を瞬時に冷ますと、踵を返す。

ガアプと血飲み子を守らなければ。それが彼の使命であり、騎士としてのわずかな誇りであり、生き甲斐なのだから。

が、その足は反転はしたものの、走り出すのをふいにやめた。最初に、違和感があった。

暗い。先ほどまで月下にあつた周囲が、何故か暗い。月が雲に隠れたのか？

だが、この妙な恐怖心はなんなのだ。

オルセはゆつくりと顔をあげた。人々もまた、オルセにならった。騎士も、救助者も、傍観者も、野次馬も、その場にいた誰もが、衝撃を受けた。

「あなたのお相手も、ですか？」

オルセは自身の心臓が肋骨を叩くのではないかと思った。化け物。

そう、化け物、あまりにも巨大な。

闇市に並ぶどのテントより高く、どの建物よりも高いそれは、首が無い巨大な赤ん坊を彷彿させるような形をしていた。

それは、人間の肉体やヒルポスやテントや車や生活家具——まるでひとつの隊商を、巨人が土と水で混ぜて泥人形にでもしたようだった。その表面には、キラキラと何かが光を反射している。

人々は、夢だと思い込むことすら許されなかった。

次の瞬間、それは、路地からぬるりとい出、最初の一步を踏みだした。

激震。

「逃げる——！！」

誰が叫んだのかは分からなかった。

人々は巢をあばかれた蟻のように一気にバラバラに散り、走り出す。大移動の一部は、オルセの横を濁流の如く駆ける。

奔流の中で、彼は剣を握りしめた。

「仕方ありませんね……」

神竜ほどではないが、あまりにも敵は大きい。しかもあたりは人間が住む建物が囲む。

このような敵には、広範囲一点集中型の魔法で、一気に叩くのが最も良い方法だが、あいにくキリアはいない。

細かく切り刻み続けるのみか。

一体どれほど時間がかかる？

こうしている間に、ガアプと血飲み子に何かあつたら？

だが、迷っている暇はない。

「本当に仕方がない……！」

オルセは電光石火の早さで大地をかけると、テントを台にして、建物の上へと飛翔した。

まずは一撃。右腕の先を切り落とす。

怪物がオルセに気付き、ガチャガチャと音を立て右腕を振る。瞬時に蹴りあげ、それをかわし、左腕の先も切り落とす。

怪物が腕を振る。

かわす、右、左、右――！

オルセは冷静に巨体を切り刻む。

本体から離れた物体が、轟音をたてて地面に落ち、大地をひしゃげてゆく。

素早く回避するオルセの残像を追う粘土の巨人は、ついに両腕を振り回そうとした。

だが、時既に遅く、腕は振り回せる長さでは無かった。

思ったより早く終りそうですね…。

オルセは、巨人の腹を蹴り後退、そのまま着地した。巨人は、上体をぐるぐる回している。

巨人は、目も、耳も無い、所詮は土人形のようなものである。正体はよく掴めないが、このままいけば順調に巨人を、ただの瓦礫と出来そうだ。

すぐに終らせる、そう思い再びオルセは大地を蹴った。

が、その動きを何者かが邪魔をした。

「……………」

突然オルセの体に、前触れ無く激痛が襲った。痛みを追い、オルセは背後を見た。

——死霊！？

目線の先に、先程切り刻んだ筈の死霊達が、それぞれ武器を手にしていた。

死霊のひとりの槍が、深くオルセの背中を突き刺している。その刃は貫通し、わずかに自身の腹から銀色が光っているのを、オルセは見た。

しまった、とオルセは自身の浅はかさを恨んだ。

だが、同時に疑問が浮かぶ。確かに先程、魂操さえ出来ぬ程に斬った筈だった。何故、切り刻んだ筈の肉片が再び接合し、動いているのか。

頭を巡らせ、強烈な痛みにも耐えながらも、オルセは背後に剣を振るった。

死霊が後退し、乱暴にオルセの槍が引き抜かれる。血が大量に吹き出す。

「……」

片手で燃えるように痛みが暴れる傷口を押さえながら、死霊を分断してゆく。

足に力が入らない。心臓と体が躍動するままに、出血も止まらない。体が燃焼するに熱い。

武器を持ち攻撃を繰り返す死霊、激しすぎる痛み、刻々と過ぎる時間への焦燥。そして再び、オルセは油断した。

爆音。

足が大地から離れ、体が吹き飛ぶ。そしてその儘、オルセは街の

外壁に叩き付けられる！

ガラガラと崩れた外壁が、オルセに滝の如く降りかかった。
砂埃が爆風と共に舞い、オルセを食らう。

身体中が麻痺し、身体中が痛みに声を荒げた。

「…ぐう…あ、…っは…」

オルセは何度か咳き込み、次に血を吐き出した。どうやら、口内を切ったらしい。油断して、焦って…ざまあない。

先程の巨人が、両腕をブラブラと回している。あの腕に叩かれたらしい。酷い衝撃だ。

「…可愛くないなあ」

そう呟くと、オルセは横に疾駆した。

第二打。

再び、砂塵と瓦礫が舞う。

最悪な攻撃のふたつめを避けて、オルセはひた走った。

痛みで頭は脳髄まで悲鳴をあげているようで、全身は鉛をまとったように重い。肉体が大地に降りたがっているようだ。

慟哭する体を意思でねじ伏せて、無理矢理に剣を振るう。

先程斬った場所を的確に打つ。玩具の如く、死霊の首が跳ねる、が。

オルセは愕然とした。感覚が殆んどなかったのだ、つまり、再生したのではない、確実に斬れているのだ。

勝ち目は、あるのか？

絶望が先程斬った死霊の首を瞬時に繋げ、オルセに牙をむく。オ

ルセは、赤く染まり始めた視界の中でそれを専断する。

が、それで再び隙をみせる事となった。
瞬間、ぴたりとオルセの体は停止した。

「…な！」

体に、糸のようなものが絡み付いている。それはどんどん数を増やし、肥大してゆく。

抵抗するものの、その行為は糸の絡まりを加速させるだけであつた。

バランスを崩し、ついにオルセは、受け身も出来ず転倒した。
無防備をさらし、オルセは見た。

糸が、巨人の体から無数に吹き出しているのを。

そして今まさに、オルセに向かって巨人が両腕を降り下ろす――
――！

ドンッ！

大地に物質がぶつかり、碎かれる音が、響く。
だがそれは、オルセの肉体が破壊された音ではなかった。

「助太刀いたします」

白い長外套がはためく。

一人の青年が、オルセの目の前に槍を持ち立っていた。
槍についた竜の杖の紋に、彼が何者かオルセには瞬時に分かった。

――聖園護衛隊！？

刹那、するりとオルセの体が軽くなった。気付くと、横にも同じ装備の青年。

「その身を縛りし悪魔の手綱、我が力に解せよ、締結の焼失！」
青年の呪文に、オルセに絡まった糸が、熔融された鉄のように光り、綻んだ。

「…器の癒し！」

次に発動された聖紋で、オルセの傷が塞がり、瞬時に肉体が回復される。その動きは、金騎士時代に聞いていた噂以上に俊敏で適切だった。

「あ、ありがとうございます。あなたがたは…、何故？」

オルセは立ち上がると、再び剣を強く握り、敵を牽制しながら問うた。

「私の名前はカツキユ、あちらはスイク。我々の主が今、呪文を詠唱しております。それまで敵を押さえましょう。…その前に」

そう呟くと、カツキユの全身が七色に輝き始めた。

スイクの体も、同じく。そして、信じられない変貌を遂げた。

「…それでは、行きます！」

それは、成人に満たない少女だった。

第二十二話

巨人の背に、ひとつの半円形魔法障壁が築かれていた。
その中に、セリスとジジはいた。

セリスは巨人と死霊、そしてそれらと懸命に戦う一人の騎士と、
二人の少女の様子を冷静に見つめている。
一方、ジジは、早鐘のように打ち付ける心臓を押さえながら、一
心に呪文を呟き、羅列していく。

その指に、輝く石を持つ指輪があつた。
石が放つ高貴な紫色の光線は、緩やかに魔法陣と姿を変えながら、
ジジを中心にみるみる内に肥大してゆく。

その指輪は、街の異変に気づき此处に来る途中に、セリスが差し
出したものであつた。

何故、これを？とジジは驚きと共に尋ねた。するとセリスは、こ
う言い放つたのだった。

——これは、貴方の命です——

セリスの言葉は、全くその通りであつた。
もしも自分が、聖王となるならば。そう、イエズガルドの名を受
け継ぐのならば。

ジジの脳裏に、前聖王であり既に故人のシェイダの姿が。
そして、彼等の姿が浮かんだ。
なんという皮肉だろうか。

まさか自分が、この力を使う日がくるとはのう……。不思議じゃないか、師・イエズガルドよ…。

「てえいつ！」

カツキユが槍を振り回し死霊の武器を弾いてゆく。

牛系の獣人特有の二対の太い角が生えたその姿は、まるで気高い自然の王者のようだ。

一方、一見カツキユとは対象的に穏やかな様相の羊系獣人スイクは、その可愛い風貌とは裏腹に、堂々と巨人の体を蜂のように突き刺している。

若い女性ではあるが、二人はなかなかの腕前のものである。

オルセは、巨人から放たれる糸を回避し、或いは次々とたたつ切る。

「しかし、この糸はなんなんでしょうか、ね!？」

「肉食系魔虫です」

「……そういう事ですか。」

スイクの返答に漸くオルセは、埃を被った海馬から記憶を弾き出した。敵は死霊だという、その思い込みが、全てを暗く閉ざしていたのだ。

肉食系魔虫の中には、綿のように柔らかく、鉄のように固い糸を吐き出す生き物がいる。

その糸で生き物を絞め殺し、食べるのだ。

また更にその中には、生き物に寄生して殺した後、その生き物の全身に糸をはり、操るものがある。

そうして、安全で温かい場所に移動し、死体に卵をうえつけて、命を繋ぐという。

つまり、死霊を操っていたのは虫なのだ。

だからこそ、斬っても斬っても、再生して見える。正確には、糸で繋いでいるだけなのだ。

―敵は人の魂を操っているのではない、虫の魂を操っているのだ―

それでは、ガアプがオルセと同じ状況だとしたら、まず勝ち目はない。

ガアプも金獅子団長だった事から、多少の魔法を使える。

だが、この怪物達は、多少の魔法で倒せるようなものではない。その上、ガアプは敵が虫を操っているとは知らない。明らかに、不利である。

焦りの中、オルセは円形保護魔法陣で術を唱える者をチラリと見やった。

その姿にオルセは先程、目を疑ったものだ。まさか、彼が聖園に關係するものとは…。

ガアプ様はあの人に見覚えがあるようだった。聖園の上位階級者なら、それは理解できた。

様々な謎や疑問が、頭を巡る。

だが、考えはまとまらない。どの仮説も仮説の域をこえる事はない。

ジジ達は味方であるという事さえ確証はない。だが今は、彼等の力を借りるしか道はない。

オルセは敵が魔法陣に近付かないよう、牽制と攻撃を加える。力ツキユとスイクもまた、それに習う。

オルセには、この攻防が酷く長く感じられた。

ジジもまた、魔法詠唱の長さに痺を切らし始めていた。

なんという長さ、なんという精密さ、難解さ。

また、唇から呪文がこぼれおちるほどに、体も重くなつてゆく。体力がどんどん削られてゆく、おぞましい感覚。それが、精神をもそぎおとしてゆくようだ。死に近づく恐怖とは、このようなものを指すのかもしれない。

「我、光の殉教者。我、闇の殉教者。」

ジジの言の葉に、音律と周波紋とともに、神羅万象に絡み付いている魔法流が、次々と影響されてゆく。

「東西南北から出でる、認識への包括、そして知識への愛撫。」

数々の反応が、パズルのように組み取られ、世界が結合してゆく。

「導くものよ、輝ける守護者よ、涅槃の森から覚醒せよ……！」

ジジはその石を掲げた。

「出でよ！魔聖霊・イエズガルド……！！」

瞬間、ジジの周囲の光が、爆裂した。

「な……！」

オルセは、強烈な光に思わず目を瞑った。それでも、瞼の薄皮を貫くそれは、一切弱まる事無く、瞬き、彼を包んだ。この世の全ての可視光線が膨張するかのように。

それは、どこまでも四散し、やがて呪詛となり始めた。

幾何学模様の光の束が、雪崩のように大地を埋め尽くす。

巨大な魔法力がけたたましく世界を揺らす。

やがてそれらは、収束して、見慣れた形を築いてゆく。

「…ひ、人？」

光が漸く元の形に戻ったのを合図に、オルセは目を見開いた。

「はあゝい、こんにちは」

宙に、先ほどまでいなかった筈の巨大な男性がひとり、浮かんでいた。いや、正確には、ふたり。

「……これは？」

オルセはそのあまりにも奇怪な形に呆然とした。四本の足にほっそりとした肩からふたつに分かれて、顔がよきりと生えている。

「魔聖霊、イエズガルド様です。」

カツキユがいかにも感動をしているような様子で、イエズガルドを見上げる。その脇に立っていたスイクが洸惚を露に「聖典の通り麗しい御姿ですわ…」とやけに艶っぽく呟いた。

「…はあ、麗しい、ですか…」

オルセは、紫の長外套に半裸を隠したそれを仰面する。彼女が言う麗しいポイントがイマイチ掴めない。

——魔聖霊——

徳が高く、強い魔法力・聖なる力を持った人物の魂が封印された宝石を魔聖石、封印された偉人を魔聖霊と呼ぶ。その程度は、一般常識だ。

だが、まさか、イエズガルドが魔聖霊だとは…。しかも、奇形？…と、イエズガルドのふたつの首がオルセに傾いた。

「あらあ、タイプだわ」

「師は…全っ然お変わりが無いようで」

足元にぼつねんと佇むジジに気づき、それが同時に毒づいた。

「やだわあ、なにアンタ、ジジ？ちよっと見ない間に随分枯れちゃったのねえ、なに？今、冬？」

ジジとセリスは苦々しい顔で小さくため息をつく。

「魔聖霊イエズガルドよ…師よ、実に30年ぶりじゃ。…まあ、師を呼んだ所為でまた100年は年をとったような気がするがのう。」

「そう、今度は貴方が聖王なのね…。」

「いやあね、因果だわ」

右の顔と左の顔、同じ顔が全く別のことを同時に話す。

「で、お相手はあの子？」

「やだあ、結構素敵な子じゃない」

「やあよ、なんだか金獅子野郎を思い出すわ、あの構え」

「やん、騎士なのね！」

「金獅子は騎士じゃないわよ、騎士オタク糞野郎でしょ」

「あの超絶救済不能馬鹿と騎士サマは違うわよ、ああ〜ホントいいわ〜」

四つつの目に捕らえられて、思わずオルセは後ずさる。何だか、妙な身の危険を感じた。

「違う違う、あっちじゃ、あのでかいのと、死霊じゃあ、見りゃわかるじやろうがあ。」

その会話を黙って聞いていたジジがついに声をあらげた。痩せほそりかわいたジジの指先が、巨人と死霊をズバリと差ししめす。

「そこが分からないのが」

「私たちなのよね」

イエズガルドは、ぶらぶらと上体を動かす巨人と死霊を交互に見やると、鼻で笑った。

「…蟲ね」

イエズガルドは即答すると、四本の腕をするりと真横に伸ばした。

「「消えなさい」」

刹那。

突然に、雷撃が空気を切り裂いた。

光線が膨張し、飛散する。

猛烈な火柱が直立し、激しい熱風を噴出する。

爆裂音が、嵐のように街道を突っ切る——！！

…それは、あまりにも一瞬の出来事であった。

「…な…」

次の瞬間、オルセ、カツキュ、スイクは、自身の目を疑い、愕然とした。

先程いた筈の巨人も、死霊もそこにはいなかった。

ただ、彼等のいた場所には、円形の小さな影のような、存在と焼失の結果だけが大地を焦がしていた。

「…炎系高度魔法？雷と組み合わせ…？詠唱もなく？」

カツキュが眉間に皺を寄せて、その現実を口にした。

ゾツとする。なんて強大な力なのか。

これが、魔聖霊——。

オルセは、イエズガルドを見上げた。全くもって、平然としている。だが、

「聖王！」

セリスが、ジジの体を支えている。ジジの顔は、すっかり青ざめている。

「……ほんに、容赦ないのう。」

ジジは咳き込みながらイエズガルドを睨んだ。

イエズガルドは遠くを眺めてジジを無視している。どうやら、魔聖霊の魔法の付加は、そのまま魔聖霊を召喚したものにかかるようだ。

オルセはジジに歩み寄ると、すぐさま剣を下ろし膝をつき、躊躇なく額衝いた。

「聖王様。お力添え、まことにありがとうございます。何卒、様々な無礼をお許し下さい」

オルセは、頬が熱くなるのを感じた。

まさか聖王だったとは。

知らなかったとはいえ、ジジをただのモグリの魔法使いの老人だと思い接していた事に、オルセは青ざめ、恥じた。
なんとという失態を犯してきたのか。

「……顔をあげては下さいませんか。わしはただの老いぼれですじゃ」
ジジが酷く困ったような声を出した。それをセリスが正す。

「なりません。貴方はイエズガルドを召喚いたしました。貴方は既に聖王です」

それは明らかな聖園管理人の戒めの言葉だった。ジジはうつ向き、溜め息を噛み殺した。

……と、遠くの景色を傍観していたイエズガルドが、ふいに言葉を吐いた。

「アンタ達、そんな形式じみたお遊戯やってる場合じゃないんじゃない」

「アレを見なさい」

イエズガルドの言葉に、全員が彼等の視線の先を見た。

街の外れの墓地。

オルセは、身体中の血が地獄の底に沈められたように感じた。

そこには、誇り高き竜の巨像が、赤く燃えていた。

第二十三話

ガアプの背中に、蟻のように死霊が群がる。

死霊達はガアプの体を機械的に切り刻み、或いはむさぼる。

それを、ガアプは必死に耐えていた。

ガアプの胸の下に震える子ども達の周囲を、血だまりが侵食してゆく。

黒衣の男は、ガアプの懸命な血飲み子への愛に、腹を抱えて笑った。

「…あはははは！馬鹿！すっげー馬鹿！面白いつすげーマジ面白いよ！」

ガアプは無言に、ただ子ども達を守る。それしか、彼には方法がなかった。

男は、哄笑にむせながら、ガアプにゆっくり近付いく。男が歩み出すと、途端に死霊達の動きがピタリと止んだ。

「…微笑みをありがとう、おじいちゃん」

男は巧笑を柔らかに繕いながら、ガアプの後頭部に靴底を下ろす。そしてそのまま、蹴仆した。

ガアプの額が、鈍い音をたてて大地にめり込む。男は更に、ぐりぐりと踵を押し付ける。

「君達、素敵なおじいちゃんを持てて良かったね…」

勝利に陶醉しながら、男は語りかけた。子ども達の目が、ルビーのように輝いている。

男はその色に興奮を覚えた。それほどまでに、それは純粹で無垢で、血のように赤かった。汚してやりたい。壊してやりたい。凌辱してやりたい。もっともつと。

「でもね」

男は、腰から短剣をひいた。女の白眼のような鈍い光をたたえる。
「もう、おじいちゃん」

片手に持ちあげる。そして、

「殺すから」

振り下ろす――、が。

おかしい事に、感覚が、なかった。

「あ？」

瞬間、男の体が吹き飛んだ！

まるで巨人にでも弾かれたかのように無様に宙を飛んで、そのまま受け身も出来ず落下する――！

「ぎゃっ」

蛙が潰されたような声を出して、男は石畳の地面に強かに叩き付けられる。

「……うう」

身体中、どこもかしこもズキズキと痛む。

何故だ？

どうしてだ？

何があつたんだ？

男は、動かない体に鞭打って、僅かに体を起こした。そして、目玉に入った景色に驚愕した。

世界が、ぐにぐにと歪んでいる。

色彩が境を失い、渦を描きながら混濁している。

まるで、断末魔のような声が、上から下からも横からも聞こえる。周囲を万の馬が駆け回っているような激震。

重力が体の中央から派生しているような、無茶苦茶な感覚。異世界だ。

これは、魔界だ。

「…あかい」

幼い、声だ。

「…あかい、あかい」

子どもだ。子どもが二人、宙に浮いている。…違う！違う、違う！

——竜だ！！

そう、男の目の前には、竜がいた。

その竜は、全くもってごく普通の人間のヒュームの形をしている。だが、その小さな体躯は宙に浮いており、男の身長と同じくらいの高さに、彼らの赤い視線は存在していた。そして驚くべきことに、彼らには通常のヒュームには存在しない「翼」があった。

右の肩甲骨から白い鳩のような翼を3、左の肩甲骨から黒い蝙蝠のような翼を3。計6つつの、ツタのような血管を這わせた、血みどろの翼を。

空中に足を揺らしながら、二人は感じていた。

怒りが奔流のように動脈を、殺意が瀑泉のように静脈を流れていくのを。

強烈な力が底もなく生まれてくるのを、二人は感じていた。

肉体の隅々が、どこかしこも電気を放っているかのように痺れている。

皮膚から下の全てがマグマのような熱を発しているかのように、
熱い。

頭蓋は中身を失ったかのようにクラクラしている。
心臓ばかり生き物のように継続的に跳ねている。

二人は、自分たちが今一体何をしているのか分からなかった。
そればかりか、何処にいるのかさえ明確ではない。
ただ、烈火のような憎しみだけが、敵を殺せと体中を蠢いている。
そして何故か、とても悲しいような…。

二人が、ぐったりとうつ伏せになったガアプを見下ろす。
ガアプは、泣いていた。黄色く濁った目玉から目尻の皺、白髪まじりの髪へと、涙がうつすら線を描いている。

「…痛いのか？」

「…苦しいのか？」

二人の問掛けに答える事も出来ず、ガアプの虹彩はただただ二人を映している。ふと、瞳の中の子ども達が優しく微笑んだ。

アーシエが、小さな小さな手を広げ天に掲げ、呟いた。

「治してあげる」

細くしなやかな腕に、輝く紋様が走るように現れる。そして、ゆつくりと放出される。

蛍の光。

あまりにも小さな、眩い光たち。
それが、たちまち膨張し、傷付いたガアプを抱擁するように包み込んだ。

みるみる内に、ガアプの外傷が塞がってゆく。まるで、傷などついた事がなかったかのように。

…それは、あまりにも高度な聖なる力だった。
ガアプが回復したのを確認すると、二人はくると男に向き直る。

瞬間、二人に火の玉が襲いかかった。

男が体を無理矢理動かし、放った魔法弾。それは爆炎となり、二人を包んだ。

「化け物が…！」

男は、卑下た笑みを浮かべた。だが、それは一瞬にして、男の顔から失われた。

「あかい」

二人は、自分の唇から小さく零れ落ちるその言葉に気づいていなかった。

「あかい、あかい」

柔らかくて幼く鈴の音のような可愛らしい声は、本質を剥き出しにしているかのようで、男の恐怖心を掻き立てた。

「なんだよ、…どうなってるんだよ！」

子ども達は無傷だった。黒焦げになる筈の皮膚は、艶やかで健康的だった。

子ども達はただ、男を見下すように見つめていた。

男は、必死で目の前にある分けの分らない現実から逃れようとした。

だが、二人から、そして周囲から発せられる正体の分らない威圧感が、男の肉体を押さえつけていた。

何故、自分の魔法が効かないのか、意味が分からない。

何故、体が縛られているかのように動かないのか、理解が出来ない。

死の恐怖が、男の胸を渦巻く。

殺される。殺される！

逃げなければ、逃げなければ、殺される！

男は、懸命に意識を集中した。呼応するように、死霊達が動き出し、子ども達に牙を向ける。

「いいから死ねよ……！」
が。

瞬間、死霊は次々と、破裂した。

正確には、水溜まりに飛込んだような軽い水音をたてて、挽き肉と化した。そしてそのまま、肉と血は炎上した。

後には、灰も見えなかった。

「ひいやああああ……！」

無茶苦茶な力の差だった。

「……こんな話は聞いちゃいない……！……こんな話は……！！」

これが竜の血飲み子というもののなのか。これが竜の力というものののか。

これが。

「こんなの、俺は聞いてないぞ……!!」

男は、炎系魔法を連続で放った。だがそれは、子ども達に全く当たらず、横にそれてゆく。

「聞いてない聞いてない聞いてない!!!」

詠唱もせず、魔法を放つ。その為に、内臓に魔法が直接影響し、更に魔法陣が全身を焼く。魔法負荷が男の肉体を体の内から蝕んでゆく。

男は口から血を吐き出した。だが、魔法の連発をやめなかった。が。

「……ああ!?!」

突然、魔法生成が出来なくなった。

「……何でだ?何でだ!」

男は辺りを見渡し、ハッとした。世界を埋めつくしている筈の、魔法の流れが、男から逃げるように消えていた。

「無駄だよ。世界は僕たちの味方だから……」

いつの間にか、男の眼前にルキがいた。言葉は、冷酷な響きに染まっていた。

「誰に命ぜられたの……」

「言っ!言っから殺さないでくれ!」

ルキが微笑む。男は、ほっと胸を撫で下ろし、言葉を紡いだ。

男は必死にまくしたてた。

「酒場で俺に薬を売ってくれたヤツだ！名前は知らない！知らないんだ、本当だ！老騎士のガアプてか言うジジイ殺して血飲み子を奪えと言われた！」

ルキが男に冷静に問う。

「…この計画は自分で図ったの？」

「違う！そいつが全部！俺が魂を操れるつつてたら計画を持ってきたんだ！金も！俺は本当はただの薬中の酒飲みなんだ！俺は悪くないんだ！あいつが全部悪いんだよ、信じてくれ！」

男は懸命に懇願した。

「…そう、じゃあ、その人の名前は？」

「…知らない！本当だ！信じてくれ！殺さないでくれ！俺は知らないんだ！」

「分かった…」

ルキがにつこりと微笑んだ。

男が泣きじゃくりながら、ルキを見上げた。肺をひきつらせて、ルキに感謝をのべる。

「…ありが…」

「お前が悪い」

男は青ざめ、それを見た。

ルキの頭上に、巨大な魔法陣が形成されていた。

ルキがそれに、手を触れた。

そして、男に焦点を合わせ…

「ぎゃあああああああ！！！！」

男の叫声が辺りに共鳴する――。

……。

……いつの間にか、世界は通常に戻っていた。既に、異世界はなかった。

先ほどまでの、ごく普通の共同墓地。

空は朝に近いのか、青みがかっている。その青い天を照らすかのように……中央にそびえる竜の巨像が、火柱と化していた。

「……いけない」

ルキは、信じられないといった表情を浮かべて、その感触を感じていた。

「……お前達は、手を汚してはいけない……」

ルキを、背後から抱き締める者がいた。その事実が、ルキの魔法射程をずらした。

「……お前達は、そんな事をしてはならない……」

すまない。

「そんな事をする為に、お前達は生かされているのではない」

すまない。

「そんな事をする為に、お前達は生きているんじゃないんだよ」

お前たちにそんな選択を与えて、なにより…。

お前たちを、守れなくて――…

「お母さん…？」

ルキは自分を止めた人物を見つめた。

それは、ガアプだった。

ガアプは、泣いていた。

それだけで、ルキの怒りをおさめるのには、それだけで、十分だった。

――あなた方を守り――

――愛して下さる御方です――

「…ごめんなさい」

ルキは瞬時に、姿を変えた。翼を失い、打ち落とされた鳥のように、ガアプの胸に飛び込んだ。
アーシェもまた、同じだった。

二人は、ガアプの温もりを感じながら、心臓の音を聞いた。ガアプは二人を、ただ抱き寄せた。

ただ強く、抱き締めた。

「…はあ、はあ」

黒衣の男は、命をとり止めた事に驚きながら荒い息を吐いた。そして、ゆっくりとよろめき立った。

「…クソが！クズが！！」

男は三人に罵声を浴びせながら、もつれる足を動かした。

「…クズが！クソ野郎どもが！死んじまえ、バカが…！！ふははは、あは、あはは…」

と、男の朦朧とした頭が、何かにぶつかった。

「…馬鹿は貴方でしょう」

男は、ひっと息を飲み込んだ。眼前には、街道に追いやった筈のオルセが立っていた。

「…あ、ああ…」

オルセはたじろぐ男の肩を掴んだ。

「馬鹿はアンタじゃないかっ!!」

オルセが拳を挙げようとするのを、カッキュとスイクが寸前でとめる。

「この男は、我々にお任せ下さいませ。」

スイクがオルセをなだめすかすように言うと、直ぐ様カッキュが男を魔法で緊縛した。

「お前を杖にかけろ。覚悟するんだな」

杖——それは、聖園を舞台とした最高裁判の事だ。
男はそれを聞くと、うなだれた。

「…薬を使っているようですね。大分混乱しています」

セリスはカッキュの報告を聞き、ジジをみやった。

「いかほどに？」

ジジは、暫し考えた後に、オルセに問うた。

「…ルキ、アーシェ…彼等は竜の血飲み子じゃな。ディノもかのう。そうじゃな、金獅子・オルセ」

竜の血飲み子、という言葉に、スイクとカッキュ、セリスに動揺が走る。

オルセの顔が青ざめ、慎重に返す。

「はい。ですが、この事は公にはならさないで頂きたい…お願い致します」

「レマの命令で動いとったのじゃろう？」

ジジの言及に、オルセが押し黙る。そして、暫く思考を巡らせると、観念したように頷いた。

「…ふうむ」

数々の疑問が、ジジの中でぐちゃぐちゃと泡を立てて渦巻く。思考が、まとまらない。

…まずは皇帝であるレマに、この事を報告しなければ。早急に。

「聖園管理人セリス、そして聖園の守り人よ。この事は最重要秘密として処理する。今後、この事を口外する事を禁ずる。全ての処理・対処は、皇帝、および私の判断によるものとする」

「はっ！」

聖王の絶対命令に、三人は凜として答えた。

第二十四話

火をつけられた家畜のふんが、僅かに火をたたえて燃えながら、
疲れたアーシエの足を癒す。

「私とルキは、魔法や力を使った事を殆んど覚えていません。ただ、
無意識に使って……」

アーシエは、うつ向きながら続ける。記憶を辿る。

「私とルキは、ビンセントジジ聖王の保護に置かれる事になりました。
た。私は聖園に、ルキは騎士学校に入学しました……」

沈黙。

アーシエは、自身が出そうとしている次の言葉に、緊張していた。
伝えるべきか、否か、……その答えは明らかなものだった。

「お父さんとお祖父ちゃん……」

迷う、だが。

意を、決する。

「……この国から出ていき、今は行方が知れません」

それは、

それは、彼等の突然の決断だった。

理由は、アーシエもルキも、聖王も分からない。彼等は、誰にも
言わずに、忽然と消えたのだ。

かわりに「国を出る事をお許しください」とだけ書かれた手紙が、
あった。手紙以外は、なかった。それだけ、だった。

ガアプとオルセは、騎士として名を捨てていた。だから、聖園や

騎士学校のある帝都にいる事を、自分達が許さなかったのかもしれない。

また、彼等は彼等の力が足りない事を、しっていた。アーシエとルキを自分達は守れない、だが聖王ならば、守れる。

そしてその聖王に、神竜の事を口にするのだけは避けたかったのかもしれない。それは国の根本的なものを揺るがすことになる。知られる前に、消え去る決意をしたのかも、しれない。

どちらにせよ、彼等に、既に母国の未練はなかったのだろう。

そして、消えた。

アーシエとルキにさえ何もいわず、何ひとつ伝えず、二人は消えてしまった。

さようなら、とさえも、口にせずに。

「…そうか、そんな事が…」

キリアは、かぼそい声でそう呟くと、その引き締まった遊牧民の――細く感じてしまう、だが変わらずに暖かい――腕で、アーシエをかき抱いた。

「大変だったね」

アーシエは、顔を赤らめて、そして涙が落ちぬよう努力をしていた。長い年月が彼女を、キリアの知らぬ間に大人にしていたが、それは寂しい事ではなく、寧ろキリアにとって、なんとも感動的であった。

親として…キリアは、アーシエの全てを、受け入れようとしていた。

だが、次に告げられた言葉には、衝撃を隠せなかった。

「私、月に行きます」

耳を疑い、ゆっくりとアーシエと抱擁から体を離し、目を合わせる。

子どもの頃にはなかった、研ぎたての刃の切っ先のような強い輝

きが、その目にはあった。

「世界中を巡り、月に行く方法を探して、私は、月の都ルシファンに行きます」

決意と、強い意思の光。

「私は、月の神殿に行き、必ず、聖なる祈り子から聖人になります」
アーシェは、わずかに震えていた。

「何を言っているんだい？聖人には、帝都の神殿で祈っても、なれるじゃないか」

「どうしても、月で祈りたいの。月でなければ、意味がないの」
即答だった。

確かに、月は特別な場所だ。

かつて存在したという、ドラグノアの対の大地、ドラグフレア。

ドラグフレアは、大戦により、破壊されたという。それ故に、大地の殆んどはなくなった。

大戦で生き残った者達は、自身の愚かさを忘れない為に、自分達の文明の全てを置いて、ドラグノアに降りた。

そして、見上げるだけとなったドラグフレアの欠片の大地を、月の都ルシファンと呼んだ。

だが、だがそれは…昔話だ。ただの、伝説だ。

「…無理だよ、行ける筈が…」

うるたえるキリアに、それまで横で黙って聞いていたディノが口を挟んだ。

「無駄だよ、母さん。俺アーシェに超ムリって言ったけど、全っ然

聞かないでやんの。超ガンコ」

ディノは肩をすくめると、アーシェを横目にみた。

やはり、アーシェの気持は少しも揺るがず、その目には凜とした力強さがある。闇夜を照らす、松明のような。

「月には全てがあります…そう、神竜がおっしゃっていました」

ディノが、へっ？と小さく驚きの声をあげた。そんな話は、初耳だった。

「私は、この世界を少しも知りません。あまりにも無知です」

よく通る、透明な声だ。だが、ガラスのような脆さは無い。

そしてそれに含まれる、眩いばかりの宝石のような、熱望、いのち。

「私は月へ行き…全てを知りたい」

その言葉に、突然ディノの中で何かが弾けた。

ディノは、自分の中の何かが、爆発するような不思議な感覚に襲われた。体が燃えるように、頭に一気に血が巡ってゆくかのように――。

何だ？

この気持ち、何だ？

なんかスッゲー、ドキドキする。

似てる、あの時と似てる。

誰かと剣を交える時の、あの感覚。

武者震いだ…！

「…分かったよ」

キリアがゆつくりと傾いて、アーシエに微笑んだ。告白と決意に硬直しきっていたアーシエの頭を撫でて、呟いた。

「大きくなったね」

優しく、全てを受け入れてくれる…温もりのある、言葉。

アーシエはついに、せきを切って溢れ出した感情の赴くままに、泣き始めた。

巡り会えた驚きと嬉しさ。そして自身の無謀を、受けとめてくれたという感謝。それらが、吹き出す心の奔流となって、次々と涙に変わってゆく。

アーシエは——唐突に過ぎ去り奪われていったあの日々と同じように——泣いた。

慟哭するアーシエを、キリアもまた涙を流しながら、その腕で包んだ。

一方、ディノは、湧き上がる見えない謎の衝動に、うち震えていた。

戸惑いの中で、ディノの中の何かが今、確かに目覚めようとしていた。

第二十五話

ドラグノア最大の平原、アベドルト平原の西部に、その集落はあった。

遊牧民風馬の即席の里。宿营地と言ってもよい。

東に位置する火竜山脈から吹き下ろす風により、乾燥したこの広大すぎる土地には、道しるべはおろか、樹々がおい茂る事さえない。無限のごとく、わずかな草が生えるのみの枯れた大地が続く。

また平原には、古くから獣人魔人の魂がうつっている為に、普通、人は入ろうとはしない。

帝国でさえ、鎮魂が行える者以外の立ち入りを禁じている。

鎮魂歌ひとつも歌えぬ者が一歩足を踏み入れたら最後、魂にむさばられてしまう。無念の心に縛られて天に昇れず、ただただ這いずりまわる怨霊という魂に。

そんなおどろおどろしい大地とは裏腹に、上空に広がる夜空は完璧にまで美しい。

今宵も星は流転する。

月：ルシファンを天心に、僅かに明滅しながら大きな円を描く。光の尾を羽衣のようになびかせて、闇を駆け抜ける。

星は魂なのだと、エアドラドの民は言う。

それは生命が心臓の鼓動を止めた時に、生命から不思議な光が浮かび上がり、天へと絶えぬ火の粉のように昇ってゆくからだ。

魂。

それは人間の精神体であり記憶であり善意であり罪でもあるのだという。それは、実に様々な色をしていた。

：命という鎖をとかれ、肉体から離れ浮上する光。朝には、太陽という竜に照らされて見えないものの、曇りの日には雲母にかくされて見えないものの、何も無い夜には、だがくつきりと漆黒の空に存在を証明し、主張する。

魂、等しく、星。

星、流転、すなわち浄化。

再び大地に生まれゆく無垢な肉体と結合する為に、星は空を巡り浄化されるのだという。

孤独に、さえずるものもなく、道すらない虚空を、ただたださ迷い、大地のかつての自身を忘却するのだという。

まるで、行き先も帰る場所も無く、歩く旅人。

人が、人生とは旅そのものであると唱えるのは…必然なのかもしれない。

そしてそれは、標準点さえ臆気な、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚により確認される現実という幻想の中で、唯一の「リアル」なのかもしれない。

その一粒が、ふいに失速した。

そしてそのまま、流星群から外れてゆく。瞬く間に速度をあげて、地平へと消えてしまった。

あっけなく、何もなかったかのように。

だが、それにエアドラドの民は意味を感じるのだった。

今まさに、かの星の全てが浄化され、眠る母の子宮に還ったのだと…。

だがそれは所詮、空想である。宗教と呼ばれる、秩序の端の産物である。

人は創造する。世界の理さえも、脳内で描き続ける。

世界とは常に仮説の域を超えないものだ。

生きるとは正に、空想なのだ…。

感覚のままに、大地にも空にも、この瞬間にも、魂が這い、駆け巡り、産まれる。

人はまだ、この世界の真の意味を知らない。

「あつ、流れ星だ！」

風馬の里に住む少女…ユズは、門の両脇に立つ見張り台の上で、走り去る星を指差して声を張り上げた。

すぐ横には、聖なる者であるアーシェがたたずんでいた。

遊牧民と聖女。

その組み合わせは本来、実に奇妙なものだろう。だがしかし今は、姉妹のように自然でもあった。

二人は共に、同じものを見つめていたから…。

「赤ちゃんが産まれるのでしょうか。綺麗な桃色。もしかしたら…女の子かもしれませんね」

アーシエはユズに微笑むが、ユズはひとさし指を一本たてて、右へ左へゆらした。

「甘いアマゝい。お姉ちゃんユパのように甘いな。だってね、あたしが産まれた時は、ギンギラに燃え燃えの橙色の星が流れたの！だから皆てつきり男の子だと思ってたらしいよ！」

ふふふん、と鼻をならすユズは、やけに自信にたつぷりである。何故かは、分からない。そういう性格なのかもしれない。

だが、すぐにふてくされたような顔をして、「まあ、よく男の子に間違えられますケドー」とアーシエにぶーたれた。

「私もよく間違えられますよ」

くすくすと笑った後のアーシエの言葉に、ユズが「嘘！」と過剰反応をしめた。

「とっても、やんちゃでしたから。少し前からは、そんな事は少なくなりました」

アーシエの答えに、ユズが少し考える。

「ねっ、ねっ。それって、成人の式の辺り？やっぱり…成人の式の後だと、女らしくなる…？」

「帝都の成人の式は18からですから、風馬とは違うかもしれませんね。風馬は12で成人の式を行うのでしょうか？」

ユズがコクコクと頷く。

「そうなるとやはり違いがありますね。でも私、男女差がはっきりしてくるのは、やはりユズさんの年頃だとは思います」

途端に、ユズの表情が陰しくなった。

どうやら、ユズは女らしくなりたい、のではなく、女性という性に嫌悪を感じているようだ。

12…この年頃の少女とは、そういうものなのかもしれない。性差が肉体にも現れてくる年齢。

男性との力の差が歴然と見え始め、自身が非力な存在なのではないかと思ひ込む。

世間の目も、変化する。

何より、自身が自身の変化に何より気付かされる。

過去の自分が消滅してしまうかのような不安と、絶望。それが新たな自分の誕生であるとは、理解が出来ない、年齢。

「…お姉ちゃんとデイノ、暫くここにいるんだよね?」

「ええ、剣が出来るまで…キリコさんは三日かかるとおっしゃっていました」

ユズが、ゆっくりと立ち上がる。

「式は明後日なんだ」

ユズがうんとしなやかに背伸びをした。

「みんなに、見てほしいな」

ユズの表情にかげりを感じるのは、気のせいだろうか、闇のせいだろうか、（それとも……）

アーシェに成人の式はなかった。

それは聖なる者にそもそもそういった式が一切無く、かわりに聖なる力を強める為の式があった為だ。だが、成人への意識自体は帝都の者達とは然程かわらない。

共に、大人への変化を——まさに階段を上るように——理解して

いくからだ。

長いモラトリウムの中で、社会から協調性を学び、守るべき者が生まれ、大人への意識を強めていく。

そして、ふいに大人へと羽化した自分に気付く。

だが、風馬の子ども達のもラトリウムは非常に短い。医療も魔法学も、聖なる力の分析も大分すみ、人々の寿命が長くなると共にモラトリウムもまた長くなった今日を思えば、大変短いであろう。それは正に、階段を駆け上がるようだ。

「あたし、頑張るから。成人の式、頑張るから。…だから皆に、あたしが大人になる所をみてほしい…」

ユズが呟く。

遠くで、また星が地平へと駆け抜けた。

ユズは、女性への嫌悪と、大人へと成長せざるおえない焦燥と不安を、その小さな胸に抱いてるのかもしれない。なかった。

アーシェの心臓にもまた、正体の分からない感情の泥が伝染していた。

共感だろうか、同情だろうか。

分からない。分からないが…。

アーシェはその少女を見守りたいと思った。

大人が子どもを慈愛の目で見つめるのではなく、同じ変化に戸惑う友として。

ユズを見守りたいと、思った。

星は今宵も廻りゆく。

第二十六話

アベドルト平原の朝の空は、今日も青い。

「まったく、俺にだって予定があるんだぞ！」

ぶつくさ言いながら、ディノは火を見つめていた。

魔法陣の中央に抱かれた火に、時々、魔法を封じた家畜のふんを投げ入れる。ふんを乾燥すると、燃料となる。

それに魔法を詰めると、火炎になるのだった。

ディノは文句を言いながら、炎をひたすらつくっていた。

「あんたねえ、実の姉が世界を旅する時に、なんも持たせない肉親がいるかい？」

同じく炎をつくっているキリアが、不満を漏らすディノに、叱咤した。

だが、ディノは平然と自分を指差す。

「……ここにいるけど」

「アーシェが姉だって事さえ気付かないようなやつは論外だねっ」
キリアは、ふんつと鼻をならすと、家畜のふんを投げ入れた。

「まったく、一晩の内に姉妹のように仲良くなったアーシェとユズを少しは見習ったらどうだいっ？」

「しらねえよ。夜に散歩しに二人で出てった時に、アーシェの魂を鎮魂させて、かわりに家畜の魂でも入れてつれて帰ったとかしたんじゃないね？」

ディノの悪態に、キリアの目が冷たく光った。

「…あんた、本当に天邪鬼だね。いやだよ、本当の鬼の方がまだ可愛げがあるよ」

火がバチバチと燃え上がる。その周囲をキリアは、更に風の魔法陣で囲う。

「ま、こんな感じかね、キリコいいよ」

キリアの呼び声に、夫のキリコがのそのそ歩いてきた。その両腕には、ロツゾから貰った、あのダークベアの鉄の爪が抱かれている。『ったく、土産なんか渡すんじゃないかった…』

キリアとキリコはこれから、この鉄の爪で、護身用の小剣を一太刀、作る。育ての親として、アーシェに何か出来ないだろうかと思案していたキリアが、ディノからダークベアの鉄の爪を土産物として差し出された際に、思い付いた事だ。

ダークベアの鉄の爪は、昔から上質な武器の材料として高値で取引されている品物だ。希少価値が高く、本当に素晴らしい武器が産まれるので、一部の金持ちしか持てないほどだ。

これで護身用の小さな剣をつくらせてほしいと、キリアは懇願した。三日以内で必ず作る、と。

アーシェは、直ぐに懇願を承諾してしまった。

お陰さまで、ディノの予定が狂ってしまった。目的地ハシェイブの名物、ハシェイブ酒をがぶ飲みするという、実に下らない予定が。

「はあ。三日もこんな何もない草っぱらのまんなかで何やれつつーんだよ…」

愚痴を溢すディノに、キリアが即答した。

「なにいつてんだよ、あんたには明日ある、ユズの成人の式の導き

役をやってもらうよ」

「は〜いって…ハア!？」

ディノはキリアの返答に思わず飛び上がった。

「ユズ、もう12なのかよ？」

「あんたの3つ年下だからね…。ってかあんた、妹の誕生日も忘れてたのかい。風馬に寄ったのは本当に近道と物狙いだったんだね…」

「つたり前じゃん!」

「情けな〜」

キリアは頭を抱えこんだ。キリコは静かに笑っている。

その動作に怒りを感じつつ、ディノは続けた。

「てか、どうして俺が導き役なわけ？成人の式の導き役は、最も縁が近いものって決まってるじゃんか。普通、親のキリコ父さんか、母さんの役だろ？」

ディノの言葉に、キリコが僅かに悲しそうな顔をした。

「俺はユズの父親じゃねえ。ユズの父親は、ガンツ兄者しかいねえ…。死んでからもう五年になるけれど、やっぱりユズの父親はガンツ兄者しかいねえよ」

ガンツとは、キリコの血が繋がった兄の事だ。

ユズは、キリコの姪に当たる。母親はユズを産んだ後、産後の日達が悪くて亡くなってしまった。つまりユズは、男手ひとつで大事に育てられた子どもなのだった。

ユズを天塩にかけて育てていたガンツであったが、鎮魂に失敗し、怨霊に食われてしまった。

その時、ユズはわずか六歳だった。

「…そか、なら兄妹のちぎりを交した俺の方が近いな」

ディノはキリコの胸の内を理解すると、何もなかったかのように、炎にふんを投げ入れた。

キリコはガンツを尊敬していた。

力が強く、鎮魂も巧く、なにより賢かった凛々しい兄を愛していた。だから、ユズの父になりきれないのである。

死んでも心の中で人は生き続けるという。それは揺るぎない事実で、慈悲深い意味でも、残酷な意味でも…確かに残された者達の中にも存在する。

ディノは若かったから、ガンツがディノの中にあまり残ってはいない。

けれど、気持はよく分かった。

ぼつぼつと燃え盛る炎が、ディノの皮膚を、じりじりと熱していた。

その日の夜。

里を濃密な闇夜が覆っていた。そして、里の中央の大広場から、ついに成人の儀式は始まった。

獣の皮をよくなめし、きつく張り合わせた太鼓が並ぶ。太鼓の大きさは様々で、まるで満月が幾つも低空を浮かび上がっているようだ。

太鼓は、風馬の民に古から伝わる独特の方法で作られていた。ドラグノアの一般的な太鼓は、軽やかに高らかに咽喉を震わせるが、風馬の太鼓は違う。まるで何かを爆裂させるような、巨大な生き物

が大地を踏みしだき歩くような、重々しい音だ。

それらを、里の者たちが叩く。

太鼓の中央には、大きな炎が天へ天へと無数の手を伸ばしている。魔法と乾燥燃料で組まれた火は、焦げ臭い匂いを辺りに撒き散らしながら、更にその勢いを強めていく。

成人の式の、これは前夜祭。

今年、成人になる者は、ユズひとり。儀式の主役は、ユズただひとりだった。

燃え盛る火。

炎に照らされ、漆黒の闇からユズがゆっくり浮かび上がる。

全身を黒衣に包み、手に「刀」と呼ばれる古い形の剣を握り、表れたその姿は、当に闇から生まれでたかのようなだった。強烈な光に輪郭を奪われ、まるで両手に握る剣の切っ先のように、輝いている。大衆の瞳に囲まれ、緊張に神経をすり減らすユズの幼い横顔から、汗がひとすじ落ちる。

まばらな雨のような太鼓の打ちが、ユズの登場により、一気に熱を帯び始めた。加速し、纏り、膨張し、豪雨から滝へ、そして音の渦へと。

「風馬一族、羽化の形、はじめ！」

高まるボルテージは、その一声で破裂した。

「壱！！」

張りのある少女の声が、太鼓の音に押されて、一気に周囲を威圧する。

ユズは、電光石火の速さで太刀を振り下す。地面スレスレでぴたりと刃が停止する。

「弐!!」

次はそれを斜め上にあげる。正確な角度で、そして位置で、刃がまた止まる。

「参!!」

くるりと反転し、再び剣が振り下ろされる。完璧な垂直。ユズはそのまま、膝をつく。ユズは目を閉じると、大きく息を吐き出した。

ユズを囲み、人々は息を吞んで彼女を見つめている。民衆に紛れて、デイノ達もまた、ユズを見つめていた。

「あれは羽化の形と呼ばれる舞だ。」

腕を組みながらキリコがぽつんと呟いた。

「羽化の…形^{かた}?」

すぐさまに疑問を發したのはアーシェだった。その反応に、キリコはユズを指差す。

「先ほどの剣舞を“形”と言う。風馬の古くからの剣術の基本動作だ。ユズが持っているのが“刀”。全ては古くから伝わるものだ。」
「そうそう、アレばっか毎日やらされてた。」

デイノが嫌そうな口調で吐き出すと、すかさずキリアが耳を引っ張った。

「剣の受け方や流し方、打ち方まで美しくまとめた世界で最も無駄が無い動きだよ。この基本動作が、風馬の民の戦闘能力を培ってきたんだ。“形”がなければ風馬とは認められない。」

「わくってるよ！だけどクソ毎日はさすがに飽きるって。」

「そうだな、お前はサボってばかりだった。お前の“羽化の舞”は我流すぎて、まるで喉を詰まらせた蛙のようだった、うむ。」

キリコの間髪入れぬ発言に、キリアが腹をかかえる。

「あははっ！そりゃあ良い例えだねえ！」

「…個性だよ。」

デイノはまるで苦虫を100回噛み砕いたような顔を見ると、ユズを見やった。

「でも、ホント…ユズは上手いな。」

デイノの発言とほぼ同時、太鼓の音色が再び熱を帯びだした。

太鼓の影から、今度は黒いベールに身を包んだ六人の女性が躍り出る。

うねうねと身体をくねらせるその様子は、毛虫のようで、そして木々の揺らめきのようで、おぞましい動き…非人間的な、どこかゾッとするものだった。

「あれは…ルナファラ？」

「ああ、旧王国最後の姫、ルナファラの幻影だ。よく知ってんな、アーシエ。」

「ええ、聖園の鎮魂の舞のひとつと全く同じ踊りです。…こんな繋がりがあるなんて。」

アーシエが思わず感嘆を唇からこぼす。

「そりゃあそうだ。聖園はアルタナ湖に沈んだ魂を、風馬はアルベルト平原に埋められた魂を慰め、鎮めている。平原の魂を鎮めてい

る最大の鍵は、残虐な旧王国の最後の国王の一人娘の肉体なんだからね。」

キリアの説明に、アーシエは僅かに首を傾けた。

「ルナ、ファラ……」

その目は、何故か悲哀を浮かべていた。

六人のルナファアラが蠢き、這いずり回る。

悪魔の化身、泥で出来た邪心、血と快楽に溺れた魔女。ルナファアラ達はユズを誘惑し、闇へと引きずり込むかのように踊り狂っている。

「六人なのは、それぞれ頭・右腕・左腕・胴体・右足・左足をあらわしているんだよ。さあ、風馬の長の子孫であるユズが、ルナファアラをの肉体を切り離してゆく。」

キリアの言葉どおりだった。ユズは立ち上がると、次々とルナファアラを切り崩してゆく。

罵声のような太鼓に蹴落とされるように、ルナファアラ達が地面に落ちる。

まるで花びらのように等間隔にルナファアラは地面に伏せていき、その中央にユズは降り立った。

火炎を背に、ユズが声を上げて刀を上空へと突き刺す。

「我が名はユズ！今、邪悪な肉体を斬り、大地を鎮魂す！」

まるで天を貫くように立つユズのか細い両足は、堂々と大人へと翼を広げるひとりの少女を、しっかりと支えていた。

第二十七話

早朝。

東をみるとわずかに、火竜山脈から太陽が登り始めた。

綾線から、光の帯が空へと、大地へと注がれる。洗われるように、闇から青へとその肌を表す世界が、再び「今日」に生まれ変わる。

まだ、朝は寒い。

「まさかアーシエがついてきちまうなんてなあ。」

デイノは、寝起きの頭をかきながら、シンガを走らせていた。背中には、アーシエ。

「ふふつ、すみません。」

アーシエの唇から白い息が漏れる。

アベドルト平原の朝は、比較的温暖なエアドラドにおいて、寒い事で有名だ。山脈から降りてくる風が、昼間に大地が蓄えた温もりを奪い去るのである。

今は、春と夏の間と、わりと暖かい季節だ。だから救われているが、これが冬だったら、まずアーシエは耐えられないのではないかと、デイノは思う。

乾燥し、張りつめた空気が満ち、草木もわずかしかな大地。ここで生きられる動物は、一握りしかないのだ。

と、背後から勢いのよいシンガの足音。

「デイノ！アーシエに変な事言わないでっ。あたしが呼んだんだか

ら、アーシエは悪くないんだからっ。」

本日の主役、ユズである。

昨夜と同じく黒い衣服で全身を覆っている。成人の式の服装。まだまだ、成人の儀式はこれからだ。

「ったく。…ユズもアーシエも、二人とも“導いて”やるよ!」

ディノは叫ぶと、更にシンガを飛ばした。

目指すは、平原の中央にある「ルナファラ魔霊窟」――。

シンガが更にスピードをあげる。

烈風一列に駆け抜ける草原の冷たさに体温を奪われながら、ディノ達をのせてひた走る。

アーシエは、ディノの脇腹から腹へと手を伸ばしてがっちり掴んでいた。体をつけて、振り落とされまいと更に力をこめる。

腕の表面から、太く血の流れる腹の暖かさを感じた。温い。

暫くすると、漸くシンガの足がおさまってきた。そうして、アーシエは細めていた瞼を軽く開けてみた。

冷たい外気のために涙を微かに貯めるアーシエの熱い眼球が、ふいに何かを捕える。目を凝らす。

それは…砂ぼこりと涙で揺らいで見えるそれは、墓石を彷彿させるような塊だった。

ただし、ドラグノアのような竜の形をした墓石ではない。

楕円の丸、青虫のたまごに似ている。

「…ディノ、あれは？」
「そろそろ着くぞ！」

アーシエの声を押し押せる空気が遮り、ディノを叫ばせる。
ディノはシンガの首に抱きついた。

猛然と進むシンガが、ふと前足をあげた。
そのまま流れるような、長い跳躍。

太鼓が結末に力強く叩かれるそのように、シンガが大地を踏みしめる。振動に耐える。

「到・着！」

ディノは片腕を掲げると、すぐさまひよいとシンガを降りて、背伸びをした。

「うゝ体なまっちまうっ。」

目の前には、あの墓石のような石があった。
アーシエはゆっくりシンガから降りると、墓石をまじまじ見つめた。

高さはアーシエの腹部ほど。幅もそんなに広くはない。
そして微かに、緩やかな魔法の気流を感じる…。

ああ…それにこれは…聖なる、力？

「導き役が飛ばすなあ〜！」
ユズが興奮気味に飛込んできた。見ると、シンガもなんだか疲れ
てみえる。

「お、シンガがぐったりしてら。形は得意でもシンガは苦手なんだな。」

「ちがうつ。ディノが飛ばすからっ。」

プリプリと怒りながら、ユズもまたシンガを降りた。シンガにつけた荷物を下ろして、シンガを優しく撫であげながら、周囲を見渡す。

「で、中央についたの？一休みするの？」

アーシエは、え、と小さく驚くと、石とユズを交互に見つめた。ユズは、本当に石が見えていないようだ。

「アーシエは、集中しねえでも『石』が見えるんだな。」

「…え、あ！もしかして、この石すべてが魔法なんですか？」

「おう。ルナファラの魂を留める石。全部魔法で出来てる。…というか、ルナファラ魔窟全体が魔法を帯てんだ。」

ディノはユズに見えるよう石を叩いた。漸く見えたのか、凝視していたユズが小さく声をあげる。

「あつ、ルナファラ魔窟、来たんだ！」

「ルナファラ…魔窟…」

遠い昔から何度か、アーシエはルナファラの物語を耳にしている。

聖なる者たちを育成する為に存在する、聖園。

その聖園では、ルナファラの物語は、旧王国時代を語る上でついに、鎮魂を学ぶ際にもついはむ。ルナファラ魔窟は、物語の最後を締め括る。

聖園の教師達が、教科書をめくり、生徒たちに音読みをさせる授業風景が、アーシェの頭にふいに浮かんだ。

春の日差しの中も、夏の暑さの中も、秋の乾いた音の中も、冬のわずかに湿ったガラス窓の中でも、繰り返された音律がふいに響いた。

魔女ルナファラは、風馬の長に肉体を五つに斬られた。

肉体はアルベルト平原を囲むように円に埋められ、円を鎮魂魔法陣として風馬の民が回る事となった。これが風馬の民の遊牧の始まりである。

そして、円の中央には、ルナファラの魂を封じる為に、また、旧王国のかつての神である王族に、殺された人々の魂を慰める為に、魔窟が作られ、

魔女ルナファラは、千年の時を越えた今も…

「…魔窟でさ迷っている。」

「ユズ、来い。」

ディノがユズに手招きする。

ユズは、緊張で手足をぎくしゃくさせながら、石の前に立った。
「用意は、いいか？ちびんなよ。」

「う…うっさい…」

小声でユズは返すと、深呼吸をした。すぐさま真剣な熱が、ユズの眉目を整え、風馬の戦士の顔に変える。

「いいよ。」

ディノは確認のためアーシェもみやると、石に手をかざした。
「いいんだな。」

ユズも、アーシェもはつきりと頷く。

ディノはにんまり笑うと、石を両手で押さえるように、構えた。
ディノの唇から、歌がこぼれてゆく。昨晚の『羽化の儀式』の歌
と踊りと、同じリズムの力強い、律。

「我等、鎮魂の風馬の民である。暗闇の風馬の民よ、その瞳を開け、
我等をしかと見よ…しかと聞き届けよ…」

石が七色の柔らかい光を全体に帯る。ゆっくりと魔法陣が石に浮かび上がる。

「我等、十六夜の意志を継ぐ者なり。」

瞬間、地響きと共に大地が突然——消えた。

「きゃああああっ!!」

唐突に、消え失せた大地。そのまま三人は落下してゆく。
その様子をシンガが、ボクと見下ろしていた。

三人は、どんどん落下してゆく。

「こんなのきいてなああい!!」

「ちびんなよつつつたる！」

眼下には、巨大な岩の遺跡が広がっている。
ユズとアーシエは青ざめた。目を閉じて、体を丸める。

……ぶつかる！！

ドサ、ドサ、ドサ。

「いてええ！」

ディノが悲鳴をあげる。悲鳴でゆっくりとふたりは目を開けると、
ディノが座布団と化していた。

どうやら、ディノ、ユズ、アーシエの順番に落ちたらしく、ディ
ノが二人の下敷になっただけらしい。

「ごつめーん。」

「すみません。」

「うるせえ！マジいてえ！降りろ！」

陸にあがった魚のようにバタバタするディノを尻目に二人は立ち
上がると、周囲を見渡した。

あるハズの空が、もう無かった。巨大な遺跡を囲むように、まるで
鳥籠のように大地は空洞となっていた。ただ、魔法気流が摩擦する
ように周囲を流れており、暗くはない。

アーシエは、天井を見上げた。

一本の塔が立ち伸びて、先端が天井に埋まっている。

あの石は、遺跡の先端だったのだ。

遺跡は不思議な事に、神竜殿のものではなく、旧王国を彷彿とさせる形をしていた。竜ではなく、ヒュームを崇めていた頃の、作り方。

基本的な部分は現在と同じだが、竜のレリーフも竜の像もひとつもない。

また、旧王国時代、人は神を象ってはならなかった。偶像の崇拜を禁じていた。それは、神である王族の魂が偶像に分裂するのを防ぐためだったと言われる。

だから、美しいには美しいのだが、とても簡素な形をしている。石と石とを繋ぎ止め、正確な角度で組み込まれた、積み木のような姿。

「ルナファラ魔窟が、旧王国時代に作られたものだったなんて……アーシェの感嘆に、ユズが明るく反応する。

「あ、アーシェしらなかったんだ。ルナファラ魔窟は元々、旧王国王族達の隠れ家みたいなものだったんだよ。」

「初めて来ただろ、お前は」

「うん、初めて。」

ユズはピースをすると、笑った。緊張で、うまく笑えていないが。

「築千年、サービスでルナファラ幽霊つきでございます。お客様どうですか？」

緊張と不安、そして期待の為に震えるユズをほぐすように、ディノは挑戦的な瞳で言う。

「問題なし！」

ユズは言い切ると、その細い足を前へと伸ばした。

第二十八話

ユズは口の開いた入り口からゆっくりと魔霊窟に入る。入った途端に、冷風が首元をかすめた。

平原は、火竜山脈から海へと向かう季節風の為に、からりとかわいていたが、地下はじつとりと湿り気を帯ているように感じる。そして、ひどく肌寒い。

魔霊窟は、光の魔法気流を全体に巡らせている為に、微かに光をともしていて、まるで冬そのものが降りてきたようだ。

静閑としている。

靴音ばかりが、やけに大きく響く。

沈黙を打ち破るような大きい動きで、ユズは両手で腕をこすりこすり、背後をみやった。

「さむい！」

「ははっ、もうリタイアかよ。」

そういうと、ディノは背負っていた皮袋を下ろした。

中から、するりと黒い衣を取り出す。衣には、火の魔法陣が銀の糸で編み込まれてた。

ディノは小さく魔法を呟くと、魔法陣は一瞬光り、すぐさま普通の銀の色をとり戻す。

「二人とも、これを着るんだ」

手渡された衣は、触れると、じんわりと暖かい。防寒の為の魔法のフードだ。頭まで被ると、すぐに全身が僅かに熱をおびた。

「さっきコレだしてくればよかったのに」

「いちいち魔法こめねえといけねえだろ。ほら、ぶつぶついつてないで」

アーシェがユズの肩をたたく。

「ふふ、頑張りましょう」

「…うん」

見据える魔霊窟の中は、光が僅かにともっているとは言え、やはり薄暗い。それは、魔霊窟の広大さの所為でもあった。

「廊下…だよね？」

奥まで、とても見えない、高い天井の続く廊下。見上げると、縦に巨人が二人、入ってしまったそうだ。

独特の雰囲気、暗闇の中、三人は歩を進める。

長い回廊の果てには、再びぽっかりと開いた入り口が口を開けていた。

三人が、入り口の前にたつ。

と、瞬間、アーシェの中で、記憶の糸がきらりと光った。

シオンの都、アルタナ湖の中央にある島。

巨大な竜の城を囲み立つ、王支える三種の砦。

王の剣、金獅子城。

王の盾、法采城。

王の杖、…我等が、聖園。

アーシェの心は、聖園を走る。
その道は、女帝のいる竜の城の上階から、聖園へと延びる空中回廊。

光の注ぐ回廊を風のように駆け抜けて、端にたつ白い扉の前に立つ。

そして。

魔霊窟の廊下の入り口をぬけると、更に天井は高く、ドーム状に広がっていた。

「うつわあゝ…ひ、ひろい…」

ユズの唇から無意識に溢れた感嘆が、伽藍を木霊する。
隣に佇むアーシェもまた、思わず息を飲んだ。だが、それはユズとは違う意味合いのものであった。

「作りが、聖園と全く同じ…」

同じ時代に作られた？それにしては、あまりにもよく似ている、似すぎている。

アーシェは、すぐさま駆けだした。

「あ、アーシェー!？」

ディノが制す。

暗闇が深く、光は微か。床は見えにくい。

「気を付ける、そっちは…!」

ディノが叫ぶ。が、すでにアーシェは立ち止まっていた。いや、ほぼ同時だった。…そして、アーシェのその輝く瞳は、まっすぐ床へと延びていた。

アーシェの目にうつる、それは、階段。

聖園と、全くおなじ。

まるで、聖園を模して作られたかのように。

いや…もしかしたら、逆？

「アーシェ？」

ユズが不安げに見上げたアーシェの横顔には、真剣なおもじがあった。

「デイノ、この下には礼拝堂、そして更に下に、魔法陣がありませんか？…中央に、魔法を帯た石、または石像のある…」

「え！なんでしてんの！？」

デイノは驚いた。まさに、アーシェが言った通りだった。

この下には多くの部屋があるが、その部屋を囲むように礼拝堂がある。更に下には、壮大な魔法陣が、広すぎるその床を覆い、中央に魔石を添えている。

アーシェは信じられないという表情で二人をみやると、こう言いきった。

「ここは聖園と全く同じ形をしています。もしかしたら、風馬の成人の儀式は、聖園の祈り子の儀式と同じものかもしれません」

聖園の祈り子の儀式。聖なる力を持った者たちが最初に受ける、聖なる祈り子になるための儀式である。

多くの才能あるものは、聖園で基礎を学び、祈り子の儀式を経て、正式な聖園のものとなる。祈り子は、もともと力が弱く、もともと人数が多い。アーシェは、聖なる祈り子の称号をもっている。既に、儀式を終えていた。

「聖園と、この場所、どうしてこんなにも共通点があるのでしょうか

か…」

「…やっぱりアレじゃねえか、旧王国を倒したエアドラドの初代皇帝ヒルドに関係があるんじゃないかねえの？」

アーシエの疑問に、ディノが適当に推測すると、それに倣いユズも考えを述べた。

「聖園もアルタナ湖の鎮魂をしてるんでしょ？もしかしたら大元が一緒なんじゃないかなあ？」

ユズの大元、という言葉に、アーシエは頭の中であの人を浮かべた。

イエズガルド様…今はジジ様が聖王の証として持っている魔聖石イエズガルドで眠っている。

かつてあの方は、初代皇帝とエルペソ様とオプカー様の四人で解放軍の中心人物として、獣魔人革命を起こし、その後の建国にも力を入れた。聖園を作ったのはそもそも、あの方だ。

あの方は風馬一族の遊牧にも、関係があつたのでしょうか…。

「十六夜とイエズガルドが同一人物とは考えられねえけど、なんか関係があつたんじゃないかね？」

「十六夜？」

「風馬を遊牧民族にした、遊牧後の初代風馬の長の名前だよ。俺さつき、“十六夜の意志をつぐもの”って呪文言つたろ。」

「もしかしたら、十六夜とイエズガルドは友達だったのかな？」

ユズはピョンピョンと跳ねると、階段を降り始める。階段は光が灯っていないというのに、その動きはやけに軽快でウサギのようだ。ウサギははきはきと、

「でも、何も残っていないから分かんないけど。意思をつぐっていても、風馬でいう、風馬やつとけ！みたいな？。」

途中で立ち止まり、振り向いた彼女の瞳は、まっすぐアーシェに注がれる。

「何も考えることなんてないよ。そんなこと考えても、大昔に終わった話じゃん。人間、今が一番大事！」

そのまま、謎のポーズを決める。どうやら、彼女はディノと同じ直球タイプのようだ。

なにはともあれ、ユズの言うとおり、今は今のことに専念すべきか。

今日のこの場所での目的は、魔霊窟の探索ではない。ユズの儀式を終えることだ。

「しっかりサポート頼むよ、諸君！」

「はい。」

「わくってるよ！だから導き役の前には立たないでくれよ。」

ディノが前に割り込んで、階段でユズを制す。ユズは謎のポーズのまま、

「りょーかい」

と言った瞬間、首を傾げた。

「ううん？」

その体制のまま、目をこするユズ。
「どうしました？」

ユズの怪訝そうな顔。その目線に倣ってアーシェは背後を見たが、勿論おかしいなところはなにもない。

「……や、気のせいかな。あはは！いこいこいこ！」

ユズは景気よく腕を振り上げると、どんどんディノの背を押し始めた。

様々な疑問を振り払って、三人は進む。あっという間に、階段の深い暗闇に、三人は吸い込まれていった。

……だがこの時、実は彼らは考えるべきだった。

何故、聖園と風馬にこんなにも共通点があるのか。

何故、舞踏が何故おなじで、なぜ鎮魂のさだめを両者とも背負っているのか。

そしてユズが一瞬、見たものについて、考えるべきだったのだ。

考えさえすれば、あまり混乱をしなくとも良かったかもしれない。

三人が階段を下りていくのを、見つめる何かがいた。

その何かは、三人が地下深くへと足を進めたのを確認すると、ゆるらとつて行く。

真っ白な衣のような肢体を揺らめかせ、音も立てず、影すらもなく。

第二十九話

闇に染まりきった階段を下りると、そこには魔霊窟という名のとおりの神秘的な世界が広がっていた。

思わずアーシェは感嘆した。いつまでも美しい、懐かしいあの場所を、光で包んだような様相。息を呑むとは、このことであろう。「すっごいね…なんだか、月の光がいっぱい降り注いでいるみたいだ」

ユズは興奮ぎみに呟いた。ユズの小さな足から産まれる足音は、静かに、だが鮮烈に、ひとすじの矢のように高い天井へと向かい、鐘の音のように響く。

「なんて、魔法が満ちたところなんでしょうか。素晴らしく綺麗ですが…これでは、毒ですね。」

「毒？」

アーシェは頷くと、手をかざした。指先には、わずかに輝く帯を絡ませている。

「魔法は、大地を巡る偉大な力です。ですが、強大すぎる力の渦のなかでは、人の肉体はその組織を狂わせます。魔法中毒といって、肉体を少しずつ様々な病に冒されます。」

「ふうん、魔法はあんまり使うとか、ちゃんと勉強しなきゃ駄目って怒られるのってそういうこと？」

「知らなかったな…と、俺たち、やばいじゃん！」

ユズとディノは目を合わせると、顔を歪ませた。

「大丈夫ですよ。聖園魔法使いのような、上級魔法を日常的に使う

ような方しか発病しません。ただ、長居が危険であることは、間違いないありませんね。」

「はあ…アーシェの話をきいたら、なんだか段々具合が悪くなってきたよう。」

ユズが舌の上で苦いものでも転がしているような顔をして、溜め息をつく。

「だなあ…なんだか、頭が痛くなってきたよ。」

相槌を打つと、ディノは周囲を見渡した。風邪だと医師に診断された途端に、より体調が悪くなることがあるが、それと全く同じ現象だろうか。二人の顔色は少々青ざめていた。

中央に懺悔室や書庫といった様々な部屋を置いて、円を描くようにつくられた特殊な作りの礼拝堂であるため、丁度おりてきた階段とは真逆の位置にある、目的地である地下へと下る階段はまだまだ見えない。

が、その遠さはしっていた。例え、通常どおり四角の形をした礼拝堂であったとしても、向こうに蟻の巣程度に見えるくらいに違いない。

それほどに、魔窟は広いのだ。その広さは、かつて自分が儀式を行った時にしている。

段々、足も重く感じられてきて、降り切るように思わずディノは走りだした。

「あゝ、クソッ」

「ええゝ、走るの!？」

「危ないですよ、ディノ!」

「うるせゝ、ちゃっちゃんと終らそうぜ!」

走り出すと、流石に景色も早く後ろへと向かって行く。…とは言

つても、白い壁のみの簡素な廊下では、イマイチ進んでいるかどうか分かりにくい。

「勝負だあゝ」

「うおっ、やるか!？」

真っ先に走り出したディノに負けじと、ユズがスピードをあげてディノの横に並ぶ。

「ってか、導き役の前に行くなって言っただろ!」

「導き役が儀式受けるやつを置いてくたって言ってるでしょ!」

負けず嫌いの両者はギャアギャアとお互いを罵りあいながら爆走する。

「ふふ、楽しそうですね」

極めてマイペースに、二人のあとをアーシェもついてゆく。

…そしてその後ろを…白い影がゆっくりと近付いていた。

淡く螢火のような輝きを抱いて広がる堂内に、軽く単調なリズムが響く。

疾走の爪先に、ようやく地下へと足をのばす階段が見え始めたころには、二人は激しくヒートアップしていた。

罵りあつのをやめ、顔を真っ赤に膨張させて、ひたすら無言でひた走っている。

「…っゴ、ゴール…!!」

「きゃあっ」

ディノが勝鬨をあげる瞬間、ユズが背後で音を立てた。

その音の大きさに、ゴールを忘れて後ろを振りかえると、ユズが

すつころんで毛皮の絨毯のようにのびている。

「ば、バカやろつ、大丈夫か？」

なにかあったら、堂内ではしゃいだ自分の責任だ。

ディノは床におでこからぶつかったユズへと小走りに向かうと、その小さい身を抱きかかえた。

「いい年して転ぶなよ。大丈夫か…ん？」

みるみる内にユズの体が煙に包まれていく。

濃厚な煙がユズを包みこんだと思うと、次の瞬間にはただの木彫の人形に変貌していた。

「まさか！」

「はははははは！！！」

背後からユズの高笑い。を見ると、ユズは階段の入り口で謎のポーズをキメていた。

「しゅりのポーズ、はっはっは！」

「き、汚ねえぞ！身代わりの術なんか使いやがって、ふざけんなっ
！」

「あつ、どっかから負け犬の遠吠えが聞こえるよ」

「チクシヨー！」

ディノは本気で悔しさに身をよじると、床をバシバシたたいた。

「ふはははは！あ、ところで、アーシェが見当たらないんだけど。」

「マジで！？」

確かに、気付くと、前にも後ろにもアーシェはいない。

「何処いったんだ、アイツ。勝負放棄か？」

「ディノが置いてったんじゃない。ってか、風馬の足に聖園育ちの人がついてこれるワケないじゃん。」

「そりゃそーか、じゃん。」

ディノは立ち上がると、トボトボと歩き出した。

「アーシエー、アーシエーい。」

ディノの呼び声が木霊となって響いてゆく。それは道の向こう向こうへと吸い込まれように、ゆっくりと消えていつてしまった。

「なんだよ、聞こえないのか？ 広いったって、俺たち以外にいないのに。」

「だいぶ離れちゃったからね、仕方ないよ。あーあー、ディノが大人気ないから… きゃあっ！」

ユズの調子の良い声色が一転するも、

「また転んだのか？ 氣い付けろよ、ったく。」

ディノは、ユズの声に振り向くことなく、どんどん道を戻ってゆく。

「助けて！ ディノ！」

ディノは悲鳴に近い叫びを、片手を振ってあしらうと、スタスタ進む。

「はいはいはい、後で…」

言葉を言い切る前か後か。

ふいに背後からまがまがしい気が突風のようにディノの背中を押した。

「…！？」

瞬時に体を反転させて壁につける。その横を、なぐように黒い何かがかすった。何かは直ぐに急旋回すると、ディノへとその鼻先をのばす。息を飲み、瞬時に抜刀をし、ディノはそれを弾いた。

刃と刃がぶつかる音と共に、それは壁に突き刺さる。

「…手裏剣？」

「ディノ、あぶないっ！」

ユズの声よりも早く、ディノは体を螺子つて倒す。頭上を再び手裏剣がかかる。

ひれふすように、手裏剣を投げた人物をディノは見上げた。否、それは人ではなかった。

黒い、ただ黒いだけの…何か。

ぐるぐると喉をならし、佇むその姿は、形容するならば黒すぎる暗雲だった。それが雷鳴のように喉笛を転がしているのだ。

生き物かどうかさえ分からない、あやふやな何か。その影からのびる黒く忌々しい触手が、ユズの腹部を包みこみ、空中に抱えていた。まるで、赤子でもあやすように。

「きゃあああ！」

黒は、ユズを抱えたまま、音もたてずに階段へとぬるりと落ちてゆく。

「ユズッ！」

ディノは無我夢中で再び大地を蹴った。

第三十話

ルナファラは、旧王国こと、ドラグノア王国の第二十一代国王を父に、第一王妃を母に、一人娘として産まれた。

国王には三人の妻がいたが、子どもはルナファラただ一人であった。

それ故に、ルナファラは、民に恐れられ、恐怖王とまで呼ばれていた王に、溺愛されて育ったという。

冷たく血の通っていないような政治を行う王さえも、愛を享受ほかに、ルナファラは可愛らしい姫君であった。

愛の恩恵を注がれていたルナファラであったが、彼女は生まれつき不思議な力を持っていた。それは誰もが見たことも聞いたこともない、魔法とも違う力だったという。

どのような力であったか、それは誰も知るよしがなかった。

…王のあまりの愛により、城の深く深くに隠され、愛しく愛しく育てられていたために…。

やがて、旧王国にも滅亡の日がやってくる。獣魔人革命の火が城を焼き付くし、国王一族を飲み込んだのだ。

…そして、ルナファラは…。

転げ落ちるように階段を下りる、が、最後の一段を踏む瞬間、デイノは飛翔を余儀なくされた。

土煙をあげて階段が破壊される。

「つく！」

反転し、壁を蹴り上げて破壊から逃げたディノを、土煙から飛び上がった何かが追いかける。触手、黒い触手だ。

ディノは触手を眼球に確認すると、剣をかまえ、そのまま触手に突きを叩き込んだ。

難なく触手が二つに寸断される。

だが、二分された触手は面積を増やし、再びディノを襲うべくその身を伸ばす。

すれすれでディノは大地に転がるように交わすと、二本の触手はひとつに混ざり、走り出したディノをさらに追う。

「しつこいな、なんだってんだ!!」

剣が効かない。剣技を得意とするディノとは、まさに最悪の相性だ。

以前、剣が効かないアメーバ系の魔物と戦ったことがあったが、その時は魔法使いのサポートがあった。こういった敵には、魔法が最適なのだ。

炎系の魔法で一気に焼き尽くす、風系の魔法で形骸さえ残さず吹き飛ばす、水流系の魔法で流し去る・・・魔法は敵の体全体にダメージを与えることが出来る。

そうすることによって、敵が肉体を保つのを防ぐのだ。

だが、今は魔法使いがいない。

魔法を使えるユズは捕らえられ、アーシエとははぐれてしまったのだから。

かけっこなんかするんじゃないかなと思ったとしても、後悔先に立たず、もうすでに遅い。

「ああくそ、こういう奴はどうすんだっけ?!」

触手から全力で逃げながら、ディノは横目に本体をみやった。本体は悠然と触手を伸ばしている。まるで、ディノを遊ぶかのように「き、気に入くわねえ〜!」

本体は、もうひとつの触手でユズを抱えあげている。

ユズはじたばたと抵抗しているが、触手には通じておらず、人形のようにブラブラするだけだ。

「ああん、もう!こいつう、こいつう・・・っふう!」

触手の締め付ける力が強まったのか、ユズが苦しそうに顔を歪めた。

「ユズ!」

「うあああ!」

ユズの顔が一気に赤く染まる。時間は無い。ディノはしゃにむに本体へと走り出した。

大地を蹴り、剣を掲げ一気に振り下ろす。ぶつん、と鈍い音をたてて触手が切れる。

ディノはユズが床に落下するのを寸前で抱きかかえると、疾駆を再開する、だが。

「と、とれねえ!」

触手がユズに張り付いて取れない。それどころか、ぶよぶよと激しく動いてディノの動きを妨げる。背後には、触手が逃すまいと迫ってきているというのに、走る速度はどんどん下がってゆく。

「ちくしょうっ」

「ディノ、ディノっ」

「な、なんだよ!」

「水様性のアメーバみたいだから、これ、魔法が効くんだよね?!」
「ば、馬鹿やろ、いま魔法を使ってみろ、俺たちまでアブねえだろ
うがっ」

「違っよ、こう使うの!」

ユズが粘液の中で自身の服を必死にまさぐる。その手は、防寒用の魔法陣に触れる。

「火の魔法陣よ、その銀の鎖を打ち破り、縛られた力を解き放て -
- 呪詛解放!!」

黒い防寒具に縫い付けられた銀の糸が、ブチブチと音をたてて切れる。それとともに、炎のような輝きが溢れた。

「あっつ、熱っ」

一気に熱を帯びた触手に、思わずディノは手を離した。ユズが床に投げ出されるとともに、べろりと触手が剥がれ落ちる。

「火遁の術!」

受身をとって床に着地すると、ユズは炎の印である人差し指を一本立てて、唇から炎を巻き起こした。

炎は容赦なく触手を包む。白い湯気と腐った水が蒸発したような匂いが拡散し、充滿する。

煙が拡散し終わると、触手が転がっていた場所には黒い影のようなものだけが床を焦がしているのだけが視覚できた。

ユズの猛攻は止まらない。更に親指を立てて雷の印を作ると、迫りくる触手に向かって雷撃を放つ。

「雷遁の術！壱、貳、参！！」

雷撃が収束し、三つの魔法弾となって触手にぶちあたる。触手は次々と粉みじんにはじけ飛び、四散した。

「ふぁ……。」

「まいったか！」

印は風馬にだけ操れる簡易の魔法陣だ。

簡易の魔法陣だというのに、ユズの術は魔法として立派なものといえる。先ほどの、炎の呪詛を編んだ魔法防寒具の使い方といい、ユズには魔法の才があるようだ。

「俺、おまえを敵に回したくねえな。」

「えへへっ。折角の防寒具おしゃかにしちゃった。」

「まあいいよ、あいつを倒せば体を温まんだろ。」

二人は立ち上がると本体をみやった。先ほど、暗雲の塊のように見えていたソレは、その黒が僅かに薄らいでいる。触手を失ったためであろうか。

「こいつは、いったい何なんだ？俺が試練を受けたときはこんな奴いなかったぞ。」

ディノの記憶にある儀式は、こんな変な化け物は登場しなかった。ただ落下して、ただ歩いて、ただ形を踊って、それだけで終わった。こんなものは、儀式には一片も無い。

「ディノ、こいつ、もしかして亡霊なんじゃない？その、封印されているっていう……。もしかして、なんかよく分かんないけど、封印解けちゃったとか……。」

「まさかお前、あれが魔女ルナファラの亡霊だったか？」

と、二人の会話に反応したのか、化け物が声を出した。

とはいっても、どこが口なのかはまったく分からない、声かどうかもはつきりしないものだったが。眠る年寄りの声帯がぶるぶると小さく震えるような、声。

「・・・ルナ、ふ、る、ルナ、ふア・・・」

暗黒の雲がどんどん薄らいでゆく。

「るな、ルナるうつつ、なるな、ふあら、るな、る・・・」

まるで言葉とともに色彩を失ってゆくように、それはやがて灰色になり、信じられないことに乳白色に染まってゆく。

「ルナファラって単語が気になるのか？」

ディノの呟きを正しいものと暗示するかのように、化け物は『ルナファラ』という言葉をボロボロと吐き出してゆく。まるでそれは、嗚咽しているようにも聞こえた。

「あんだ・・・」

「ディノ、近づいちゃ、」

ディノは制止するユズを無視して、化け物につま先を向ける。そしてゆっくりと、歩を進め始めた。

「あんだ、ルナファラなのか？」

「ルナ、ルナばら、る、ル、るば、ルナ、ルナファラ・・・。」

「魔女、ルナファラの亡霊なのか？」

ディノの声が届いていないのだろうか、そればかりか、ディノが近づいてきていることにさえ反応せず、ただただ化け物は、うめき声をあげながら、その色を変えてゆく。

乳白色、薄い白、そして・・・透明に。

「なっ・・・」

ディノとユズは息を呑み、思わず後ずさった。透明の先にあったのは・・・無数の生首。

大量の大小の生首が、混ざり合い、蠢き、密集している。

みなみなうめき声をあげているが、うめき声は統一していない。それでこそ、老若男女とわず。

表情は苦悶。

全てが苦悶に埋め尽くされている。

そして全員が、打撲の青と擦り傷きり傷の赤に染まり、浅黒く、青白く、汚濁した黄色に変わっている。

そのうめきは部屋を異常な世界へといざなう。

濃厚な苦悩が部屋中に充満する。

まるで世界中の人々のうめき声を閉じ込めてしまったかのように。救済を求める声、痛みにあえぐ声、絶望になげく声、叫び、叫び、叫び。

「う、うあ・・・なに、なんなの、これ・・・あ、頭が痛くなる・・・」

「ユズ・・・!」

あまりの異常音に、ユズが耳を押さえて膝を落とす。ディノはユズに寄り添うと、その耳を抱え込んだ。

うめきは尚も収まらない。まるで地獄を引きづりあげてしまったかのように、阿鼻叫喚が二人にのしかかる。ただの空気の波であるのに、それはあまりに重すぎた。

「く、あ・・・」

耳を押さえても手の甲をすり抜け、脳に激震を与える。

「るな、るナルアな、るなふぁ、ルナフあら・・・、殺ず、死ぬ、」

止まらない。

「しね、死ぬ死ぬ死ぬ死ぬしね死死死死・・・しねしねしね死ぬ・・・!!」

音は収束し、大音響となって周囲を揺らす。

「ルナファラはころ、殺ずうううううううう!!!!!!」

第三十一話

アーシエは、慎重に、だが早めに歩みを進めていた。

ディノたちがムキになって先を急いで走るものだから、すっかり取り残されてしまったアーシエは、自分の靴音をひとり聞いている。なんだか、寂しさがするりと心をさする。

ふと、廊下の末端にもうすぐ着くという頃だろうか、重い振動が体を揺らすのを、アーシエは感じた。どきりとして、更に足を早める。

ようやく、廊下が途切れた。距離も、聖園とさほど変わらない。ということとはやはり、作りはかなり似ていることになる。

アーシエは、そこにあるべき階段へと更に向かう。

「あら…？階段が崩れてしまってる…」

アーシエは、崩れて瓦礫の山になってしまった階段を見下ろした。地下へと続くはずのそれは、数段を残して、レンガの屍になってしまっている。みっちりと隙間無く積もっており、とてもでは無いが、降りることは不可能に思えた。

よく見ると、階段は崩れたばかりのようで、わずかではあるが空気に土煙が混ざっていることが、においなどで分かった。

さきほどの振動は、この階段の崩壊が起こしたものなのだろうか。この先に、ディノたちがいるのだろうか。

「…でも、これでは進めないわ…」

迷いながらも、アーシエは数段しかない階段を降りてみた。瓦礫を丁寧にあずけてみる。

「デイノ！ユズちゃんっ！そちらにいらっしやるんですか！？」

大声を出してみるが、反応は無い。もしかしたら、厚く埋まってしまったのかもしれない。

「どうしようか……」

魔法で破壊しようにも、どれくらいの規模のものを放てばいいのかわ当はつかない。なにより、万が一、この崩壊にデイノたちが巻き込まれており、瓦礫の中に埋まっているとしたら……無闇に魔法を使用することは危険だ。

アーシエは考えを巡らせた。

アーシエの記憶と憶測が確かならば、この階段以外に地下へと向かう道は無い。ここが本当に、竜の城を模した建物ならば、非常時は、隣の棟へと移る橋、いわば空中回廊を使用する。

だが、竜の城とは違い、ここに隣接する棟はない。

しかし、それでは非常時に対応出来ない。万が一、棟の一部が崩れた時は、人が閉じ込められてしまう。ここは深い地下だ。そんなことが起こったあとに、外から掘り進むなんてことをしていたら、閉じ込められた人間は救出時には、酸欠で死んでしまっているだろう。

ここは地下を想定されて作られた棟。ならば設計上、必ず非常時に使用するルートや、空気孔があるはずだ。

「とにかく、他の道を探すしか方法はないですね……」

アーシエは肩を落として呟いた。

その時だ。

アーシエの指先を、電流のようにまがまがしい邪気がひた走った。
「きゃっ……！」

思わず、あとずさる。

「これは…」

びりびりと指がしびれ、全身を寒気が襲う。身体中の毛が逆立ち、皮膚が泡立つようだ。この感覚には、身に覚えがあった。

「…怨霊。」

怨霊とは、肉を持たぬ死霊兵。憎悪や怨恨といった負の感情に縛られ、天に昇る術を失った悲しみの魂魄。生への願望と執着が、生きるものの魂を狂わせ、飲み込む。

アーシエの体に悪寒が走る。かつての記憶がさざなみのように甦る。あの日、遠いあの日、最初に暖かな日々を壊したものは死霊だった。恐怖で指先が震える。

「はっ…」

ずきんという刺すような痛みで、アーシエは我に返った。目をむけると、瓦礫からもうもうと吹き上がる邪気がアーシエの細い足首を締め付けている。

すぐさま杖を取り出し、アーシエは聖なる言葉を放った。

「肉体の保護よ、魂とその緒を深く結び、我を保て…魂の楔！」

邪気に掴まれたくるぶしに聖なる紋章が浮かび上がり、瞬時に邪気を追い払う。邪気は、あらゆる物質の形骸を歪ませて、蛇のようにするりと瓦礫の向こうへと消えてゆく。

「はぁ、はぁ…」

アーシエはゆっくりと呼吸を落ち着かせた。急激にあがった心拍数は、熱で心臓を握りこむ。気を取り直すと、直ぐに言い知れぬ不安がアーシエを襲った。

「デイノ！ユズちゃん！どこに行ったのですか！」

これほどまでに重い邪気にあの二人が襲われたら、ひとたまりもない。十分も経たずに、魂を貪欲な怨霊に食われてしまうだろう。いくら鎮魂の民と呼ばれる風馬一族であろうと、この歪んだ魂に対応できるとは思えない。聖園の指導と加護を受けたアーシエでさえ、

これほどの怨霊を鎮魂する術を持っていない。

そう、この魂はあまりに歪んでいる。濃厚な怨念がいくつも重なり合い、混ざり合い、一般的な怨霊のカテゴリーをはるかに超えている。この魂のひずみを消し去る方法は、一時的に封印をし、長い年月をかけて鎮魂する以外ない。何年も、何十年も、何百年も。気が遠くなるほどの、時間を――。

「まさか…この魂は。」

たったひとり、アーシエは覚えがあつた。

あの人物ならば、これほどの魂を核とするかもしれない、と。

かつてその人物は王家の娘であり、絶対無二の力を持つ魔女であり、革命の中、このアベドルトという地で首を落とされ、肉体を刻まれた。

伝説の悪魔。

「魔女、ルナファラ？」

風が吹いた。アーシエの首筋を、冷たいひとすじの風が吹いた。澄んだ紅茶のような髪が揺れる。

背後に気配がある。

「…だ、れ？」

アーシエは、ゆっくりと振り向いた。

それは白い布地であつた。まっさらに白い布地が、空中に浮かんでいた。さらにさらに、まるでやさしい夜風に踊るカーテンのように揺らぐ。高さはアーシエの胸元ほど。中には人間でも包んでいるのだろうか、奇妙な立体感がある。

アーシエに目視されると、それはゆっくりと動き出した。

布が擦れる音などない、それはすべるように廊下を渡ってゆく。しばらく浮遊すると、廊下に並んだ扉のひとつが無音で口をひらいた。そしてその扉へと、吸い込まれるように向かう。

「ついていけばいいのね？」

アーシエは意を決した。なんの導きかは分からない。もしかした

ら、悪霊たちの罾かもしれない。だが、ここにおいても時間の無駄だ。今はディノとユズの安否を信じて、自ら闇に飛び込まなければ、前に進むことなど出来ない。

アーシェは再び走り出した。

第三十二話

ディノは、湿った暗がりにいる。
とても重い、暗がりだ。

暗黒の重圧は、体の自由を奪っている。眉ひとつ動かせず、だんだん感覚さえもなくなってゆく。

この暗闇の中、どこまでが自分で、どこからが光を失った闇の空間なのか。重力は感覚を侵略し、自分と闇の境をじわじわと消してゆく。

心臓の音だけが聞こえる。どくん、どくんと、温かい血潮を、心室が繊細に押している。

ふと、草の甘美な芳香を感じた。

それはすると鼻腔から入り込み、肺を満たす。体があるのだと気付くが、何故か自分も匂いの一部なのかと思ってしまう。空になつて、空気になつて、どこまでも伸びてゆく。

やがて、芳香の向こうに色彩を感じた。それは黒くかすみがかつていて、うまく眼球には捕らえられないものだった。

さわやかな萌黄色。草原だ。すぐにそこがアベドルト平原だとディノには分かった。高い高い上空から、鷹のように見下ろす、自分を育てた大地。

豊かな平原が続いている。

深い緑は、平原の外を表す。中央に向かうにしたがい、緑は黄色がかったものになってくる。

大地が乾き、人が住むには困難になってくる。選ばれし者しか住めぬ土地だが、なんて美しいのだろうか。

木々は無い。乾燥しているからだ。

川も無い。丁度、山脈の中腹であるからだ。

温暖ではない。吹き荒れる風は厳しく冷たいからだ。ただ、なだらかな平原を、薄い草が覆うように生えている。カラカラの土を僅かにむき出しながら、どこまでも広い。

しばらく浮遊していると、瞳に蟻の行列が映った。いや、この高さだ。蟻の行列のはずがない。ならば、なんだ？

ディノは下降した。少しずつ、定まってゆく視界。落下する心地よさ。だが、穏やかな気持ちは一気に吹き飛ばされた。

蟻の行列ではない、真っ裸の人間だ！

更なる下降。

蟻のような行列をなす人々に、ゆるりと近付く、接近する。

人々の表情まで近付くと、その異常さはより濃く感じられた。ディノはおぞけが走った。

老若男女、皆、裸で泥まみれだった。しかも、泥が汗で剥がれ落ちて、ようやく見える皮膚は、鞭や剣でいたぶられたのだらう、血まみれだ。

汚れきっている。泥と血、そしてムワリとした不潔な体臭が、鼻孔を突いた。

羅列する人々のすぐ側に、鞭を片手に振り回す男たちがいる。隊

列を数人で管理しているのだろうか。

男たちは人々とは対照的に、立派な防護服に身を包んでいる。

見たことのないタイプの服装ではあったが、それが軍服であると、デイノはすぐに分かった。

角張った美しい衣服を着て、鞭や剣を振り回すのは軍人しかいない。

…そして、この隊列は、罪人を軍人が歩かせているという生易しいものではないことも。

街ひとつを襲った敵軍が、人々を捕虜にして歩かせているのだろうか…裸で、裸足で、この過酷すぎる大地を。

だが、そんな面倒で役に立たなさそうなことを、この残虐な軍人たちが行っただろうか。

そもそも、この軍人たちが、強襲や戦争のたぐいを行ってきたようにはとても思えない。

列の中に、幼児を大事そうに抱えながらフラフラと歩く老人がいる。

ひとりの軍人が、その老人を、鞭でピシャリと打った。

老人は、幼児を抱き抱えたまま音もなく倒れると、その枯れ木のような体をピクリとも動かさなくなった――。

…死にやがった…

…死にやがった…

…こんなところで死ぬなんて、ふざけやがって…

瞬間、思念が走るようにディノに伝わった。

ディノは自身の心臓が熱く燃え上がるのを感じた。だが、その熱は一瞬で風化した。

この思念は、軍人のものではない。軍人はなんとも思っていない。

ディノは思念を辿った。老人を傍らに見る幼児に目がいった。異様に冷めた目をした幼児は、老人を見下している。

…私を置いて死にやがって…

そうして、すぐさま幼児は歩きだした。まるで何事もなかったかのように、鞭に打たれまいと、その小さな体を揺らして歩く。

ディノは啞然としていた。

あんな子どもが、人の命をゴミのように、死を当たり前に思うなんて、この隊列はなんなんだ。

いったい、なんなんだ。

隊列から、汚れた肉体の臭いと、あらゆる思念が噴出する。それらは天へと昇れず、大地へとへばりつく

目がくらむ。

そねみだ。

後悔だ。

憎悪だ。

妬みだ。

悲しみだ。

憎悪だ。

…狂いそうだ。

人々の暗雲のような感情が、血と泥で出来た彼等の足跡で、大地を塗る。ナメクジの歩みの後のように、湿って残る。舐めるように進む。

そうしてディノは、ふと気付いた。

ヒュームがない。

エアドラドの民の三割を占める、ディノやアーシェのようなヒュームがない。みな、獣人もしくは魔人だ。そこでようやく、ディノは思い立った。

ディノの思考が記憶と回る。クルクルと、歴史の断片を繰り出す。

「獣魔人は…人として扱われなかった…。」

「そんなもんじゃない。獣以下、石ころ以下だった…。」

誰かに、そう教わった気がする。誰だったろうか。風馬の長老だったか、キリアだったろうか。

そして、アベドルト平原に流れた長い時の中で、確か、こんなことがあった。

風馬の民が、この大地で遊牧と共に鎮魂を行うようになったきっかけである、悲劇。

獣魔人大量虐殺。

遙かの昔、エアドラドは今とは全く違う国質をもっていた。今では旧王国と呼ばれるその時代は、ヒュームを王、そして国民

としており、広大な国家力を保つため、旧王国は古くから獣魔人を奴隷として扱っていたのだ。

約千年前、旧王国最後の王・バルフレアは、国力の低下を大量にいる奴隷たち独特の文化の所為であるとし、無駄な奴隷を排除する「淘汰」を行った。淘汰という言葉はつまり、処刑を意味する。

これは当時、国家よりも資金を持ち始めた商人たちの力を減らすためだったとされる。商人たちの反感を最小に、彼等の財産を奪う。そのためだけに、奴隷たちの命は天秤にかけられた、と。

だが、真実は今では時と言う砂の渦に取り込まれ見ることは不可能だ。なににせよ、奴隷たちの大量処刑は、理不尽で傲慢な理由の下に始まった。

最初は奴隷の中にいた一部の文化人が処刑の対象となったが、日を追うごとに対象は増え、淘汰の主旨も変化していった。最後には、獣魔人であれば処刑の対象であるという、おぞましい形に。

処刑が虐殺へと変わり、政治は更なる恐怖を持って人々を襲った。国中で名ばかりの処刑が行われたが、特に処刑が行われた場所は次の通りだった。

皇都、シオン。

巨大湖、アルタナ。

火竜山脈。

そして…。

ディノは隊列を見つめた。

まさか、これは過去なのだろうか。

大昔、行われた狂気。この行進は死そのもので、向かう先は処刑

台なのだろうか。

意識が朦朧とした。記憶にある、アベドルト平原での虐殺の人数は十万とも二十万とも言われている。何人が死んだ、と歴史で学んだとしても、その命の数が膨大すぎて、残酷だと思えても、心は激しく痛まなかった。

だが、目の前にするこの景色は、まるで現実のようだ。

これは、あの生首たちの記憶なのだろうか。怨念が描く、かつて確かにあったのに、うずもれてしまった時代。

誰も思い起こすことのない情景の中で、彼等は今も苦しんでいる。誰かを呪い、大地にへばりついて死にながら生きる。

自分が描く悲しみの中で殺され、死に続けている。

なんて絶望的な死なのだろうか。

寒気がする。

どうすればいい？

ここから出るにはどうすればいい？

早く出なければ、この闇が深く心に侵食する。憎悪の深淵に落ちて、きつと出られなくなる。

ディノは焦った。心臓が危機をさっして早鐘のように打つ。だが、肉体という感覚がないディノには、なす術が無い。

このまま、引きづられるのだろうか、この世界に。不安が血管を走り、身体中をくらくらめをつむるうにも、それさえも許されず、画面は繊細に流れてゆく。

ふと、隊列の上空にいたディノの体が加速した。

加速度は一気に高まり、隊列はぐんぐんと後ろへとむかう。まるで、川をそって渡る鳥のように、隊列の先頭へと景色はひきよせられてゆく。

どこまでも続いていくかのように感じたその流れが、瞬間、速度をおとした。壁にぶつかってしまったかのように唐突に景色がとまり、デイノは混乱した。

見覚えがある景色だった。

空中に浮かぶデイノの足元に、穴があり、その穴の中に巨大な建物が立ち伸びている。建設されたばかりの白さが眩しかったが、デイノには、それがルナファラ魔霊窟であると、すぐに分かった。

隊列の先頭が穴の中へと、建物を囲む螺旋階段を使い、ゆつくりとおりてゆく。それは一見して、完璧な渦にも、美しく長い蛇にも見えた。

落下は続く。螺旋の中へと下降してゆく。風になった体は、建物を突き抜けていつしか部屋の中にいた。

気付けばデイノは立ち尽くしていた。

何処なのかも分からない、広すぎる部屋だ。部屋は、いくつもの丸太のような支柱に支えられて、天も壁も遠い。光源は床に散らばるように設置されたロウソクのみで、頼りなくともる。

泥のような闇の中、異臭がした…。

先程の、隊列の不潔な体臭だけではない、強烈な嫌悪感が込み上げてくる独特のにおい。デイノは悲しいまでに、そのおいに覚えがあった。

血のおいだ。

錆びた鉄と、腐った肉を合わせたようなツンとくる芳香は、その部屋に充満していた。

やがて、漆黒に濡れた目が、瞳孔を開いて闇に慣れる。わずかな光をとりこんで、闇に隠れる物質を捕える。

心は然程、動かされなかった。人が、当然のように死んでいる。山のように、人が。

乱雑に積み上げられた死体には首はなく、裸のその体は赤黒く染められて、闇との境いさえ失っている。黒と溶けこんで、草木が積み上げられているような気がした。

その姿が意味することを、デイノは感付いていた。この人たちは、『人柱』にされたのだ。

人柱は、能力のある術師や、地位が高い娘をひとり生き埋めにすることで成立するものだ。人柱により、大地の恩恵に対する感謝と畏怖を表現することで、天災からの守護を祈る。

それを、万の人の命とすりかえるなんて。

頭が痛い。

喉が異常に渴いた。

無念が、意識を失わせる。

呆然と、虚無が居座る。

息苦しい。
腹が空いた…。

「どこなのお…」

か細い声がして、ディノは振り返った。
小鳥のさえずりのような、可愛い声。鈴の鳴るような、幼く
愛しい声。ディノの聴き覚えがある声。

…ああ、あの子か。

「ないよお、どこにもないよお…」

部屋の片隅、更なる闇の向こうに、大量の首が山のように積み上
げられている。

ゴミでも投げたように放置されたそれらひとつひとつは、よどん
だ瞳をあけっぴろにしたまま、各方向を見つめていた。瞳孔は見開
き、ピクリとも動かない目は、死の色を横たえて、にぶく光ってい
る。

その首山の裾に、うごめく小さな人影があった。

「ないよ、ないよお…」

人影は小さな手を懸命に動かして、何かを探っているようだ。

ディノはゆっくり近付き、気付いた。

その人影には、首が無かった。丸くて大きな傷跡は、肉が剥き出
しになり、骨は砕かれて、脂肪は黒ずんでいた。

ディノは無感覚と無感情…ただ唯一の感覚…枯渇と空腹感の中、

それを当たり前のように受け入れた。あの子は老人が死んでから、自分の足でここまで歩き、ここで首をおとされたんだ、と。

「ないよう、わたしの首がないよう……」

形見でも無くしてしまったかのような、狂乱を交えた悲しみの声は、個体から木霊するようにも、方々から聞こえるようにも思えた。一步、さらに一步と近付く。

「どこにいったの……わたしのくび……これじゃない……」
一步、一步、

「あたしのくび……これじゃない……これでもないよ……」
……一步。

「あ、みつけたあ……」

次の瞬間、首を失った彼女は、目の前にいた。
幼いその血まみれの両手を、ディノに広げていた。

ディノはどんどん無気力になってゆく体を支えられず、膝をつく。
もう、動けなかった。

その言葉を聞いてはいけないと分かっているのに。

「やっと、やっと見付けた……」

手が、ディノの頬を掴む。

「……やっと見付けた……。」

「……わたしの……く……」

『……——光の矢——!』

光の光線が膨張し、破裂する。

鮮明な輝きが熱く部屋を満たす。

ディノは光を見たかと思うと、跳ね飛ばされたかのように落下し、強かに背中を打ち付けた。

「ディノ！ユズちゃん！」

駆け寄る足音に、ディノは重たい頭をゆっくり持ち上げた。…ディノの視界が、ディノを包む世界が、再び鼓動を始める。

「おせえよ、アーシエ…」

肺にまだなんとも言えぬ奇妙な感覚が残っている。それを吐き出すように咳き込むと、ディノは頭をブルブルと振った。

「嫌な夢みた…」

傍らにユズがいるのを確認すると、命の恩人を見上げた。

「アーシエ、人生最悪の小旅行だったよ…」

「ディノったら…」

アーシエは小さく微笑むと、すぐさま真剣な顔で立ち上がった。

「…魂の楔！」

聖なる紋章の色彩が、アーシエの肉体から放たれ、ディノとユズに降り注ぐ。瞬時に、水に洗い流されるように不快感が消える。

「ん…、あ…アーシエ？」

「大丈夫ですか、ユズちゃん」

朦朧としながらも、ユズが目を開く。

「アーシエ…あの子は？」

「え？ユズちゃん？」

開口一番の声に、アーシエは戸惑った。

「アーシエ、あの子は、どうなったの？」

ユズがすがりつく。だが、

「ユズ、その質問の答えは後からだ！」

ディノが、二人を掴んで一気に駆け出す。途端に、地面がひしゃげた。

《な…ぜ、逃げる…》

地響きのような声。否、怒りの合唱。

《…くびになりましょう…、お前、死ね…死んでください…》

喘えぎがゆっくりと収束する。

《一緒に、なれ、…なろうよ！》

ディノは再び、声の主を見上げた。

無数の首が、黒煙を吐き出しながら、悶絶しながら、泣いている。おとも、おんなも、年寄りも、こどもめ無関係に、腐敗している。千年も前から、ずっと苦しんでいる。

だが、感情を押さえてディノは言った。

「悪いけど、あんたたちの仲間にはなれない。」

突如として、憤慨が嵐のごとく巻きおこった。轟音が、あたりにひしめく。

《…殺す…、殺してやる…！》

祭り太鼓のように、その言葉が弾け、ぶつかりあう。

《…殺す…、殺してやる…！》

《…殺す…、殺してやる…！》

《…殺す…、殺してやる…！》

《…殺す…、殺してやる…！》

「殺すなら、わたくしを殺しなさい。」

静謐。

唐突に、沈黙が飛散した。

「…だ、れ…？」

ユズが呟く。その呟きは、言葉を出したのがアーシェでもディノでもないことを指し示していた。

凜とした、気品ある麗しい声。

「殺すなら、わたくしを殺すのです。彼等は、旅人。彼等は、未来からの旅人。あなた方が呪う相手はわたくし…」

ディノたちは見た。その白は、ゆらりとはためき、風のように揺らいで浮いていた。

肌が白く、頬は桃のような、絵本に出てきそうな少女。

「我が名はルナファラ。」

…あなた方の殺意を、受け入れる者。」

第三十三話

「我が名はルナファラ。あなた方の殺意を受け入れる、同じ時代を生きたもの。第二十一代国王バルフレアを父に、第一王妃パンドラを母にもつ、エアドラドの名を引く最期の女。」

ディノは白い服を纏った少女の言葉に思わず耳を疑った。怨念たちが人柱であるということは、彼らに取り込まれそうになった際に見た闇で知った。

だが、まさか魔女ルナファラが子供たちに聞かせる御伽噺のように、魔霊窟をさまよっているだなんて。

「あなたが、ルナファラだったのですか。」

動揺はまた、アーシェも同じであつた。自分をこの場所へと案内したのは彼女であつたからだ。

ルナファラだと思い込んでいた、この黒い者たちへと。

「導かれしもの、どうか私に力を・・・」

瞬間、ルナファラが消え、頭上に大きな穴があいた。

《おまえがルナファラ・・・貴女様が、殺した・・・》

生首たちが囁く。

《美しい首、気高き首、にくいにくいにくい・・・》

「私はここです。」

ルナファラの澄んだ声が響く。

声はディノたちの頭上、斜め上空にあつた。衣がはためき、それに包まれたルナファラは、ディノたちを真っ直ぐに見詰めていた。

「聖なる力をもつものよ、そしてユズとディノといましたね。どうか私に力を貸してください。どうか、どうか……。」

くず折れた階段を確認すると、ディノは問い掛けた。

「あんたが、アーシエを導いたってか。」

小さな、頷き。

アーシエもまた、それに続いた。

「入り口が崩れ、地下へ行く階段が途切れていました。怨念を感じ、戸惑っていたところに、彼女がいました。彼女の誘いがなければ、わたしは……。」

「じゃあ、ワナだ。」

膝をまだガタガタと震わせながら、ユズが立ち上がる。その表情は疑心と憤懣にみちていた。

「そうやって、わたしたちを混乱させているんだ。あんなことをして、あんな時代をつくって、あんなものを築いて。そんなやつ信じられない。力を貸せ？ 冗談じゃない。そうやって体力を削るつもりなんだろ。アーシエもディノも、だまされちゃだめ。あいつは――
――魔女だ！」

ユズの目が濡れている。冷め切った色で、震えるその理由は、間違はなく怒りと戸惑いからくるものだ。

ルナファラの魂が形成する人間を模した霊体は、その顔を悲しみに歪めた。

「……そうかもしれません。ですが、私は……。」

爆裂音。

音と同時に、ルナファラの体を青白い炎が包む。間一髪のところを回避すると、ルナファラは降り立った。

ルナファラの体は薄く透き通っていた。遠くからみれば、布が浮かんでいるとしか見えないかもしれない。

だが、その布は確かにルナファラの衣服であり、彼女の体を防護している。服だけ、霊体ではないのかもしれない。

降り立つことで、彼女が小柄な少女であるということがよくわかった。

彼女が真にルナファラなのならば、今の彼女の姿は、死の直前のものである。だとすれば、ルナファラは本当に若くして亡くなったのだろっ……いや、鎮魂のための肉体として、殺されたのだろっ。

その可憐な霊体は、怨念たちと堂々と対峙する。

《どうして、死んで下さらないのです？》

《なぜ、殺されないのだ？》

生首たちの目の色が、悲しみの色を湛える。表情が、齒がゆさで皺くちやになる。

《どうして死なないの！ぼくたちを殺したくせに！！》

生首たちの顔が、怒りと悲観にくれる。様様な顔が、バラバラと表情を変える。まるで、負の感情が泡をたてて生まれていくようだ。

《ここは寒い――》

叫び、尽きることはない悪い夢が、

《ここは冷たい——》
現実を汚染してゆく。

《ここは苦しくて堪らない——！！》

生首たちの唇がぶつんと切れ、中から大小、無数の触手が飛ばされる。

ルナファラをそれを翻し避ける。彼女が触手を避けるたびに、床には底のしれない穴があいてゆく。

「だめ！ディノ——！」

ユズの声に、ディノは己の動きを止めた。ディノの右手は、剣の柄を握り締めていた。

「ディノ、あいつは酷いやつなんだ、魔女なんだ！みんなを騙そうとしてるんだ！」

「ユズ、よく考えろ！それなら、あいつはアーシェをここにつれてきたりしない！」

ユズはディノの服にしがみつく。

「ちがうつ、畏なんだ。あいつはみんなを騙して首を落とすんだつ。ディノもみたでしょう？！あの人たちは人間なのに、あの人たちはオモチャじゃないのに——！」

「落ち着くんだ、落ち着くんだ、ユズ！」

「畏なんだ、畏なんだ、畏なんだあああ——！」

「ユズちゃんっ——！」

パシン、と軽い音が響いた。

ユズの頬を、両手で押さえたアーシェが、そこにいた。

「アーシェ、どうして・・・？」

「ユズちゃん、大丈夫。大丈夫だよ、安心して？」

アーシェは、そのまま沈黙するユズの頭を抱きしめた。アーシェの胸元に下りる熱がある。温い涙が、アーシェの衣服に浸透し、拭かれてゆく。

「あなたは、ここで待っていて。」

アーシェはもう一度ユズを力強く抱きしめると、ゆっくり立ち上がった。そして、杖を取り出すと、それを唇に当てる。

「・・・魔の流れよ。その偉大なる抱擁で彼の戦慄を妨げよ。聖なる壁よ、忘却の大地から降り立つ悲しみの夢から、どうか守りたまえ・・・。」

紫と黒の光が大地から噴出し、見る見るうちにユズの周囲に独特の陣を描いてゆく。それが、守護のための魔法陣と聖紋であることは、ユズにはすぐに分かった。

「あ、アーシェ?!」

「この陣から出なければ、大抵の魔力と念力から守られるわ。じっとしてくれるのよ。」

「だめだよ、行かないで！」

離れようとするアーシェを、ユズの小さな手が掴む、懇願する。その時、ユズの視界が僅かの影を持った。見上げると、それはデ

イノだった。

「デイノからも言っで、行っちゃだめだって、お願い！」

「ユズ…」

「お前、ちょっと黙ってる。」

低音。

デイノの重たい言葉が、ユズの体に押し掛かる。

予想もしていなかった兄の反応に、ユズは言葉を失いそうになったが、それでも小さく声をあげた。

「でも、・・・罨かもしれないんだよ。」

「そんな時は、そんな時…」

——ぶっ倒すだけだ！」

第三十四話

ディノは、一気に走り出した。そのまま素早く、ルナファラの後方へと回る。

「おい、どうすればいい？」

「あなたがたは・・・。」

ルナファラが嬉しそうに微笑む。

その横を、禍禍しい触手が弾いた。ディノは後退すると、それを切り裂いた。だが、触手は瞬時に親元へと帰ってしまう。まったく攻撃をうけていない。

アーシエはディノの後方にたつと、光の矢を放った。

だが、敵はひらりとそれをかわす。狙いを定めてからでないと打てないことが悟られたために、的中率はぐんと下がってしまったようだ。

「ディノ、怨霊は体を持ちません。ですから、剣といった刃物や打撃を与える武器は一切効きません。ですが、聖なる力を使えば、なんとか彼らに攻撃を与えることができます。彼らは複数の魂が混ざり合ったものです。聖なる力で魂を浄化していけば、彼らの力は必然的に弱まります。」

「おいおい、俺の出番は無いつてか!？」

頭を抱えるディノに、アーシエが問い掛ける。

「そのような意味ではないです。・・・その剣には、銀が含まれていますか？」

「ああ、純銀製だよ。」

その返答に、アーシエは足をとめた。まじまじと剣を見つめる。アーシエの顔に、仄かに笑みが表れた気がした。

「分かりました。それに聖なる力を注ぎます。」

「なっ、武器に魔法を注ぐなんて、火に油いれるもんだ、破裂するだろうが！」

ディノはアーシエに声をあげた。

物質に魔法を故意に流してはならない——それは常識だ。

物質は独自の魔法の流れを持っている。その流れに沿わないものを流すと、物質は魔法と魔法がぶつかり合い、摩擦し、膨大な熱量を出す。それは武器の粉碎を招くだけでなく、所持している者の危険を意味する。

「俺に死ねっていうのか？」

「大丈夫です。聖なる力は、魔法とは似て非なるもの。魔法とは異なり、全てに和合します。——剣を。」

「・・・分かったよ。だけど、その前に……」

ディノはアーシエの肩を掴んで引っ張った。アーシエの背後を、触手がさつとかすめる。

「力を注ぐ時間とやらをあいづらがくれるかが問題だな。」

ディノが苦虫を噛む表情で呟くと、上空から応答の声があった。

「時間が欲しいですね。」

ディノの前に立っていたルナファラが、大地を蹴り上げ飛翔する。ルナファラを殺そうと、怨念たちはルナファラへと容赦なく触手

をはなつ。

それを、素早い動きで旋回して攻撃をかわしてゆく。

だが、先ほどより若干、動きは鈍く感じられた。

「急いでください。私が対応できなくなるのも、…時間の問題です。」

「

ルナファラの一声で、アーシエは再びディノと向き合った。

阿吽の呼吸で、ディノも剣をかざす。

銀独特の、白っぽい輝き。

ディノの背丈ほどの剣は、剣としては異常に長く、大きいものだ。シンプルなデザインで、大胆に加工されたそれは、ラムシエムでも群を抜く切れ味だ。

「母さんからもらった剣なんだよ。大事にしろって言われてるやつなんだからな、慎重に頼むぞ?」

「分かっています。」

ディノの剣に手を触れると、アーシエはゆつくりと息を吸い込んだ。深く、深く。そして更にゆつくりと、肺から空気を吐き出してゆく。

やがてアーシエの手のひらから、じんわりと光が溢れ出した。そのまま光は、まるで溶けてゆくように剣へとのびると、螺旋を描いて刃に巻きついてゆく。

それを見やると、アーシエは手を下ろし、剣を撫でた。

「これで、怨念を裂くことができます。」

ディノはまじまじと剣を見つめた。

剣の周りを取り囲むように光が瞬いている。剣が発光しているようにも思えて、ディノも触れてみる。だが、熱も何も感じない。

「本当か？」

「ええ。ただし、怨念を裂くたびに浄化のため力は失われていきます。」

「何回も切れば、あいつらは昇天してくれるんだよね？」

「…分かりません。彼らの怨念がどれほどのものなのか、私には検討もつかないのです。」

「じゃ、じゃあ・・・！」

「時間はありません。とにかく、魂の浄化を施します。ディノ、出来る限り時間をかせいでください。」

「——分かった。了解だ！」

ディノは剣を握りなおすと、電光石火の速さで走り出した。空中を逃げ回るルナファラになんとか追いつく。

「そんな大人数でガキ一匹追い回すなんて、おまえら本当に趣味悪いな！」

ディノが強烈な風となって怨念の塊に走り寄る。

そしてそれと同時に剣を横にのばした。寸前のところで無数の首のひとつがディノの動きを目視、怨念は二分、回避。

<邪魔、邪魔をするなあ！！>

急激なターン。怨念が一気にディノへと標準を変える。

「そうこなくっちゃな！」

ディノは怨念たちの突進を垂直に飛んでかわすと、剣を振り下ろした。剣先は、防御の隙間さえ与えず、敵のど真ん中にぶちあたる。

<うつうつ！！>

怨念たちのうめき、悲鳴。

流血のかわりに、黒い霧が噴出する。まるで、古びた物質のように脆い感触。魂だけの存在であるために、するりと刃は通る。そのまま後退。

怨念の反撃。無数の触手がディノへとはじき出される、が、ディノを捕らえることはできない。

「なんだ、こんなものか、千年の呪いなんてものは！」

ディノの追撃。いともたやすく、怨念に命中し、霧が吹き荒れる！戦いの高揚。不確かな敵であったが、攻撃があたるとなっては、さほど恐怖はない。形勢は逆転したようだった。

ディノの更なる攻撃。大地を蹴り上げ、接近。剣を強く握り締め――！

「気を抜いてはいけない！」

ルナファラの叫び。それと、ほぼ同時であった。

瞬間、ディノの動きが停止した。

いや、停止したのではない。動けないのだ。

ディノが振り下ろした剣は、確かに怨念を真正面に打ち据えている。剣は半分まで深く突き刺さり、あたりには黒がぶちまけられていた、だが。

「なっ……！」

ディノは息をのんだ。

剣を抜くことができない。刃をすすめることさえ、かなわない。

力を込めても、それは同じだった。まるで、岩にでも突き刺してしまったかのようだ。剣は、びくともしない。

次第に大きくなる焦り。その焦りと共に肥大化する、黒煙の向この殺意。殺意は、一気に膨張した。

ディノは即座に剣から手を離れた。だが、敵の動きが速すぎた。ディノの腹部に走る激痛。見ると、自身の剣柄が貫いている。次の瞬間、ディノは弾き飛ばされるように壁に背中を打ち付けた。膝から、落下。

「ディノー!!」

アーシエはディノへと走り寄ると、その肩を抱いた。ディノは荒く咳き込むと、

「一体、なにが起こった?」

黒煙の向こうから、怖気たつような声が聞こえる。無数の、殺意の声。無闇に命を奪われ、永遠のような時を悪夢と共に過ごした魂たちの声。

その声が、ゆっくりと収束してゆく。糸が編みこまれ、縄になってゆくように。そうして現れた声は、若々しい男のものであった。

「ルナファラ……」

男の、つぶやき。晴れてゆく黒い霧の中から、やがてひとつの生首が見えた。否、それは生首では無かった。それは、首も体も正常にある、ひとりの男だった。

「ルナファラ……」

男は、黒い服で首までを包んでいた。

そのために、まるで生首が浮かんでいるように見えたのだろう。
手足まで、漆黒の衣装。

黒ではないものといったら、短く切られた白髪と、やけに眩い金色の瞳、腰や太ももに下げられたクナイの銀色のみ。

肌の色は極端に白い。衣服の上でも分かる筋肉の隆起、だが、締めまりよく無駄が無い。一目で、戦闘を糧に生きていたろうことが分かる。そして、彼は。

「ヒューム？」

一人のヒュームの唐突な登場に、ユズは思わず立ち上がった。真正銘のヒュームだ。

何故。他の生首はどうなったのか。

それだけではない。もうひとつの衝撃が、ユズを、そしてルナフアラ以外の二人を襲っていた。彼が纏う服、それは。

「十六夜。」

ルナフアラが冷静な表情で、彼の名を呼んだ。

…風馬一族を作り出した、ひとりの男の名を。

第三十五話

「いざ、よいー？」

ユズは思わず呟いた。まったく想像していなかった人物が突然あらわれたための驚きが、彼女の顔を疑問に歪めている。それは、他のものも同様だった。

ただひとりを除いて。

「十六夜、ようやく出会えましたね。」

ルナファラが、青年へと、十六夜へと足を進める。

「…頭が霞む、体が邪気そのものになってしまったようだ。」

青年は顔をあげた。その唇は笑みを象っていた。だというのに、瞳の色は黄色く淀んでいて、死人を髣髴させる。違う、本当に死人なのだ。彼が十六夜ならば、千年の時を肉体が耐えられるわけ無い。寿命というものは、とうに途切れているはずだ。

彼は、亡霊なのだ。

「ええ、あなたは邪気。邪悪に捻じ曲がった人間の心。」

ルナファラは真剣そのものの顔をしているが、声は高揚しているように思える。十六夜とは、親しい人物なのか。

「…かつて、風馬は隠密業をしていた。国王の下で、様々な隠密業を。…主に、暗殺を。」

ユズの誰に言うでもない、自分への呟き。

「ルナファラと、十六夜はおんなじ時代に生きてた。ふたりは、知り合いだったの？」

「あなたがたには、伝えるべきでしょう。」

ルナファラが振り返る。

「もう、千年も前のこと。人種間の・・・ヒュームと他種族の関係が嵐の後の川のように結合し、穏やかな流れへと変化した今なら言えること。」

少女の容貌、細く儚い霊体、今にも消え入りそうな存在。だが、その姿は、鷹揚として三人を見つめていた。

「歴史には、あつてはならないことがあつた……。」

「獣魔人への、残虐な行為のことか？」

デイノの問いかけに、ルナファラはゆっくりとかぶりを振る。

「そうではない、そうではないのです。国王の、獣魔人への行いは、過去の歴史が手繰りだした必然だった。家畜として獣魔人を扱ってきた人間の愚かな行為、そして家畜としての運命を受動的に受け入れてきた獣魔人の非力と悲しみが生み出した、歴史の流れの、あれは頂きだった。」

「頂き？」

「彼が、ヒルド現れたのは、歴史の必然でした。革命という火種は既に出来ていた。何百年もの獣魔人の憤りは、ヒルドを生み出し、ヒルドは火の粉として燃え上がる必要があつたのです。」

ルナファラが目を閉じる。その瞼には千年の時間が流れているのだろうか。

「ヒルドは、突然あらわれたヒューム。自らを竜の血飲み子と語り、東の地からやってきました。人間は神ではない、竜こそが神なのだと言い、人々を諭しながら…やがて、多数の、獣魔人の人々を従えて。ですが、彼の反乱の火は簡単に崩されたのです。」

アーシェが唇を押さえた。

「そんなことは、伝承にはありません。」

「ええ、そうでしょう。彼は歴史において、失敗をしておりません。何故なら、彼の失敗を知る者は、全員殺されたのだから。」

ルナファラは、たんたんと続ける。

「国王の城の前で、ヒルドが連れた人々は全員殺されました。堀へと…当時、湖を作ろうと城の周りを奴隷達が開拓していました。その奈落のような深い堀へと、突き落とされたのです。…だが、偶然にもヒルドは生き残りました。ヒルドだけが。」

「…どうして、ヒルドだけが生き残ったんだ？」

「簡単なことです。」

ルナファラが、ディノをじつと見つめる。彼女の視線は、ディノの深紅の瞳に注がれていた。ヒルドと同じ、竜の乳飲み子の瞳に。彼女はディノが竜の乳飲み子だとは知らないはずだ、なのに、その表情は懐かしい人にあうようなものに、どこか似ている。

「私が、ヒルドを生かしたのです。十六夜に命じて。」

三人は息を飲み込んだ。

信じられなかった。どうして、王国を滅ぼそうとやってきた男を、

王国の實の王女が生かそうというのか。

「どうして、どうしてそんなことを…？」

アーシェのか細い問いかけ、返答は至極あっさりしたものだった。

「私は…私を殺そうと思いました。私は、死にたかったのですよ。」

それは、衝撃だった。思わずディノは声を張り上げた。

「アンタ、自分が…自殺したかったから、革命を起こしたっていうのか…！」

ルナファラはその時、初めて微笑んだ。可憐な、純真無垢な微笑だった。

「王国の血は、近親結婚が多かった。このことにより、呪われた残酷な血は濃厚だったのかもしれないね。王国の一番の呪いは、私のような女が生まれたことでしょう。私は死にたかった。この、高貴と呼ばれながらも、最も狂った血を破壊したかった…。」

ルナファラの瞳は冷静だ。

「力が、ありました。私には、不思議な力があつた。傷を癒す力で。…けれど、私は誰も救えはしない。この呪怨に塗れた肉体は、誰も救えはしない。そればかりか、私の周囲では血と涙がとめどなく流れました。暴力、虐殺、…妊婦が生きながら腹を裂かれて胎児を見せられる…そんな父上の“お戯れ”も何度も見ました。…傷を癒す力を持ちながら、誰の傷も癒せない。」

深い、深い憤りと悲しみ。――だが、彼女は陶醉しているようにも見えた。

「私は、なんの為に、この世に遣わされたのか。私は、なんの為に生きているのか。」

歴史の隠された事実は、三人を無言の人形に変えていた。何かを問おうとしても、何も言えなかった。口から出ようとすると、どうして、何故、それらの疑問が、彼女の前で意味をなさないことを三人は無意識に感じ取っていたのだろう。

「…最初にお話したように、革命の火種は既に出来上がっていたのです。ヒルドという炎を生かすだけ、後はそれだけだったのです。死ぬ準備は、とうに出来ていたのです。」

「じゃあ、アルタナ湖が出来たとき、…堀に水が流されて、何万人の人が溺れ死んだとき、洪水からヒルドが偶然いきのこったのも、あなたがやったことなのですか？」

「ええ、そうです。聖なる女性。正確には、十六夜が術を使いヒルドを生かしたのです。そして、十六夜は嘘をヒルドに伝えました。」

「――王国を怨んでいる。人が殺されるのはもう耐えられない。革命の手伝いをしてやる。――」

それは。

それは、ルナファラの気持ちだ。

十六夜は下僕として、ルナファラの気持ちを伝えたのか。

「ヒルドの革命は成功しました。十六夜の助言を聞き、西の盗賊“金の獅子”を剣に、南の魔性“サーカス”を杖に、北のイリバスト城砦を占領し、北の軍師“木馬”を救出することで、革命の火は国中に飛び火しました。城は崩れ、父上と母上、そして血族の多くが処刑されました。…私は、十六夜の提案により、アベドルト平原の

魂を鎮める生贄として処刑されることになりました。」

ルナファラの十六夜を使った“自殺する”計画は、こうして成功したのだ。

すべてはルナファラの計算の通り、彼女は死に、王国は崩壊し、新しい姿へと蘇った。残虐で不平等で理不尽な国家から、理性的で平等で平和な国家へと。

そしてその、ルナファラの理想は、千年もの間も続いている。小さな内乱もいくつかあったが、それは世界的にみて稀なほど“豊かで幸福な”国の姿であろう。

「どうして、生贄になったの。」

ユズが疑問の声をあげた。全ての常識を覆されて、彼女は打ち震えていた。今にも涙を流してくず折れてしまいそうな彼女に、ルナファラが言う。

「わたしは、償いをしたかったのです。そして、」

――人を、救いたかった――

なんて清らかで、なんて醜い欲望だろう。

慈悲の心を持ち、癒しの存在となるために、彼女は欲望を肥大化させ、見事に永遠に等しい形へと成したのだ。だが、それは。

『・・・助けて。』

ディノは、再び十六夜を見つめた。

十六夜の蒼白の唇が、小さく動いている。ぼそぼそと、うめき声

にも似た声が、雫のように滴る。

だが、それは十六夜の「青年の」声ではなかった。幼い、本当に幼い、性別さえ分からぬほどの声。

『・・・たす、苦しい苦しい・・・いたいよう、いたいーいたいー・・・』

「どうして、」

「どうして、俺達を呼んだ。どうして、封印が崩壊してる？」

十六夜が頭を押さえ込む。ディノはそれでも、続けた。

「どうして、風馬の初代の長がここにいる？」

十六夜が頭を抑えながら蹲る。苦痛が、彼を襲っているようだ。

「彼は柱です。私が怨念を寄せる贅で、彼は怨念をひとつに纏めるための柱なのです。そして、封印がなんらかの原因で弱まり、柱はバランスを崩しました。邪念に、取り込まれてしまった。だが、私はバランスが壊れ、無闇に膨張しはじめた怨念を浄化する力がないのです。」

しばしの沈黙。

あの猪突猛進なディノでさえ、なにか考え込んでいる。

「...そうか...分かった！」

沈黙を切り裂くように、ディノは考え込んでいた表情を取り払った。

「それで、俺達を呼んだってわけだな？　ってか、なんだかハズレくじでも引いたみたいない感じだけど。」

ディノは適当に伸びをすると、剣を再び握り締めた。

「協力、してやるよ。」

「ディノ！？」

ユズが声をあげた。ディノはユズの方を向かずに、背中だけで答える。

「風馬の成人の儀式は、封印を整えるもの。だけど、封印が壊れるんじゃ、成人の儀式は出来ないだろ。…可愛い妹のためだ、協力してやるーじゃん！」

「ディノ・・・。」

ユズは、ディノの言葉に思わず赤面した。なんだか、気恥ずかしかった。

久しぶりに帰ってきた放蕩兄貴がこんなことを言うとは、想像していなかったのだ。恥ずかしい、そして何より嬉しかった。

確かに、このままでは風馬の顔に泥が塗られるだけでなく、周囲に怨念が撒き散らされる恐れがある。だから、協力する以外に道はない。それにしても、やはりというか・・・ユズを見捨てない情の深さに少し胸が熱くなる。

里では喧嘩ばかりだった。知能の低い喧嘩ばかりしていた。でも、それでも、兄弟という絆は深いものだったのだ。

まだ、ルナファラに不信感を持っていたユズであったが、それでも気持ちは爽やかなものへと変化していた。

が。

しかし。

「ちょっとまって。」

突然、疑うような表情になる、ユズ。

「なんだよ、ユズ。」

「あんさあ、わたしの前に成人の儀式をしたやつって、ディノだけだよな？」

「……………」

笑顔で停止するディノ。

「ディノ、もしかして羽化の踊り…間違えまくったんじゃない？」
「……………」

「だから、封印が、」

「だああああー！！！！」

ディノは、ユズの詰問を遮るように突然さげんだ。

「やる気出てきた！やる気出てきた！俺なにすればいいの！？」
「は、話をこまかすなあゝゝゝ！」

「ええと、」

見かねたルナファラは、ひとつ咳払いをすると、三人を見渡した。

「聖なる女性に力を与えられましたよね？」

「ああ、このことだろ？」

ディノは、仄かに輝く大剣を掲げあげた。銀色の鋭い輝きに添うように、聖なる光の瞬きがある。強い力を感じた。

「それで、」

「十六夜を食い止めてください。」

「へ？」

ディノのすつとんきような声とほぼ同時だった。

十六夜が突然、顔をあげたかと思うと、ディノへ接近。怖気はしる殺意を感じて、ディノは剣を振り下ろした。

ガキイインー！

剣と剣がぶつかり合う音。十六夜の腕には、細身の刀が握り締められていた。

目に、覇気が無い。だというのに、殺意だけ皮膚から、髪の毛から、溢れてくる。大勢の人間に囲まれて、処刑を待つ人間とは、こんな気持ちなのだろうか。無数の視線を感じる。これは間違いなく、怨念たちのもの。

ディノはいったん、間合いを取るべく後ろへと飛んだ。十六夜も同じく。等しい間合いが生まれる。

「あんたの中に、いったい何人の人間がいるんだろうな・・・」

十六夜が、無表情でディノを見つめている。さきほど垣間見えた彼の心は、怨念たちに奪われてしまったのだろうか。

殺意だけが、部屋を満たす。

「まあいい、かかってこいよー！！」

ディノは、十六夜めがけて走り出した。

第三十六話

デイノと十六夜の攻防。

一気に十六夜に近付き、まず第一手として垂直に剣を振る。刃はいとも簡単に弾かれ、デイノは即座に後退した。鼻の先を銀の光がかすめる。

二本の細身の剣。

刀と呼ばれる、クナイと同じく風馬一族独特の刃だ。遠く西の地から伝わる、よく風を斬り、軽いが丈夫な剣である。

スタンダードな形のものだが、邪気のためがまがましく感じた。

「イヤミだな」

太古から怨念をせずませてきた風馬の剣を、怨念に操られた風馬を作った男がふるう。

「こてんぱんにしたろーじゃんつ。」

十六夜の追撃。

それをデイノはかわし、剣を横になく。

十六夜、回避。二本の刀を交えて剣をとめ、反射のように刃を返す。デイノ、跳んでかわす。

両者一步もひかず、戦いは尚すすむ。

はぜる刀と刀の音を背にして、ルナファラはアーシェにとつた。
「聖なる女、あなたは私に協力してくれるだろうか。このような、私欲にまみれた私に。」

「わたしは…」

アーシェは一息おいて、

「わたしは私欲とも偽善だとも思いません。あなたが人を救いたいという気持は、徳を渴望したものかもしれませんが、あなたは自分を犠牲にしている。」

その答えに、ルナファラは頭をふった。それは否定とも、拒絶とも捕えられた。

「あなたはそう思うのか」

「ええ、にくまれ続けることは悲しいことです。それでも尚、背負う。現に多くの魂が救われている。救われていないのは、あなただけ。自分の責任だと、自分さえも呪うのは、偽善だと私は思いません。」

ルナファラは、思ってもみなかったアーシェの発言に、目を伏せた。長い睫に隠れた瞳は、幼い子どもものものだ。

「利害は一致しています。ディノは契約のため、ユズちゃんは儀式のため、そして私は旅を続けるために。」

アーシェは腰を下ろしてルナファラを見つめた。

「頑張りましょう。」

「ええ。」

儀式の前夜で見た舞と音楽は、聖園の鎮魂術と同じものであった。その意味は、きっと。

「ルナファラ、あなたのかわりに。」

アーシェは目を閉じた。

魔法気流が喉をならしてアーシェの世界を包みこむ。

魔法は、巨大な蛇のように床だけではなく壁も天井もなめらかに這っている。

それらに、五感と、そして第六感が次第に委ねられてゆく。意識が、ゆっくり溶けこむ。肉体の感覚が失われてゆく。記憶だけのいきものになる。

なんという激しい魔法の乱気流。

アーシェは自分の意識が紙くずとなつて闇の中でもてあそばれるのを感じた。

まるで頭をかきまぜられているみたいだ。びりびりと、意識を引き裂かれる。

アーシェは必死に自身を想像し、或いは思いだし続けた。

毛の色、肌の色、瞳の色、血の色。

自分を保つために、摩擦される自分をたぐりよせる。分裂する自分を掻き集める。

様々な記憶の嵐だ。

ありとあらゆる歴史、何千何百という人生が肉体を失つてもなお喚き、抵抗している。

雷雨のような怒り、にくしみ。残酷な最期がそえぎとなつて瀑布となる。無数の悲しみがアーシェの記憶となつて体を強かに叩き続ける。

アーシェは感情の深淵へと落ちてゆく。アーシェのものではない

人生が、記憶が、アーシェのものとして次々と想起される。

あの日、アーシェは、年老いた母をくちべらしとして山に捨てた。

次の日、親友を裏切り兵士に密告し、銀貨をもらった。

昨日は、地主の畑から野菜を盗んだために、病気の子を馬に牽かれた。

そして、手を縄で繋がれ鞭でたたかれながら、草原を歩いた。真つ青な蒼い空は昼間は燃えるように暑く、闇は悪魔のように冷たくさめた。

あの日、あの時、その日、その時、それまで、それから…。

違う。

それは私の記憶ではない。

私は、私のなまえは…

「アーシェ」

振り替えると、

そこには、母がいた。

母は、優しい姿をしていた。

鱗と長い爪を光らせ、腹部に触れると温かい。私は抱きついて母の肌に頬をつけた。

「アーシェ」

母は、産まれたばかりの鳥の柔らかさを持つ翼で、私を抱き締めると、歌を歌う。母の歌を聞くと、誰もが悲しみから救われる気がする。

「アーシエ、」

おやすみなさい、

おねむりなさい、と。

「生きることは死ぬことと似ている」

「どんな英雄もつちくれとなり、空しさはふと顔を出すでしょう。

なぜ生きるのか、なぜ死ぬのか、それさえも生き物たちは分からないでしょう」

「ですがそれでも、生き物たちは生き続けようとします。魂だけとなって、それでも生き物は繋ごうとするのです。死に続けても、生き続ける。生きること、全てがあるからです。」

おやすみなさい、

おねむりなさい。

「生きなさい、全てをみるために。」

「生きなさい、全てを感じるために。」

たとえ、世界が

悲しみばかりにみえても。

少しずつ、視界が白く染まってゆくのをアーシェは感じた。ミルクのように甘い眠りが、アーシェをゆっくりと包んでゆくのだ。アーシェは繭のように、丸まる。丸くなり、丸くなり、指を失った。

次は足を失い、やがてアーシェは腕をうしなった。

なんという、優しい落下だろう。

落ちてゆく、落ちてゆく、落ちて…

「スピカ」

アーシェは、糸がはりつめてしまったかのように止まった。

「スピカ…」

アーシェは気付いてゆく。この白い世界は、眠りの世界ではないことに。

アーシェはだんだんと気付いていった。

自分が、光のなかにいることに。

目を開くと、アーシェは朝のこもれ日のなかにいた。

見渡すと、懐かしい感覚が胸をくすぐった。自分がいる場所に、アーシェは覚えがあった。

空中庭園。

聖園の最上階にある、無数の花がゆれる園だ。円を描くように育てられた極彩色からは、心休まる麗しい芳香が揺れている。

アーシェは花の香りを吸おうと、無心の中で体を前に傾けた。

瞬間、グラリ、と体が大きく倒れそうになり、のけぞった。

なんとか、安定する。

なにごとかと自分をよく見ると、まだ繭のまま手足がない自分がいた。

そうだ、私には手足がないのだった。

「スピカ、」

自身の名前を呼ばれて、反射的に目の前にたたずむ人物の名を呼んだ。

「ルナファラ。」

ルナファラは、小さなその手で黄色い花をつまむと、花びんをぶつと千切って私の頭の上に置いた。

「あなたの綺麗な水色の髪には、色鮮やかな花がとても似合うわね。この庭はこれからあなたのものよ。良い庭師を雇って、けしてからしてはいけないのよ。きっと花の香りに誘われて、素敵な男性たちにモテモテよ。」

ルナファラが私の髪をなでる。私には、それがとてもこちよかつた。

「この庭はあなたのものよ。それに、手足のない醜い怪物に寄り添う男性なんかないわよ。」

「スピカ、あなたは自分を知らないだけよ。あなたほど美しくて可愛い女性是世界中を探したってどこにもいないのよ。それにもう、あなたたちが怪物と呼ばれる時代も終るのだから。」

「私はずっとルナファラの側にいるよ?」

私は、まっすぐにルナファラを見つめた。ルナファラは、私をずっとみている。穏やかな瞳で。

「同じ力をもったあなたは、私の最高の友達よ。だけれど、新しい時代に、私は必要がないのよ。ヒュームの王の血は、必要がないものなのよ。ヒルドが王になるとき、私が生きていては彼は王にならないのよ。」

私に優しく言ってもだめなのよ。私は必死に、ルナファラに訴えた。

「そんなことないわ、きつと兄さん達がなんとかしてくれるつ。右の兄さんも、左の兄さんも愉快的兄さんなのよ。なにより、賢いの。きつとヒルドにだって、」

「ヒルドは私を許さないわ」

私は、涙がこみあげるのを感じた。

「あなたは頑固で我儘だわ」

「そう、あなたとそっくりね」

ルナファラは私をぎゅつと抱き締めた。

たぶん、抱き締められるのはこれが最後だ。私に抱き返す腕があればいいのにと悔しくなるのも、きつと、本当に、最期だ。

「聖園の物語を覚えている?」

「ええ、覚えてるわ。」

「悪い魔女が死んで、生き物たちは歓喜の声をあげ、竜が空を飛ぶの。そのとき、乙女は聖なる世界の管理人になるのよ。」

ルナファラが、約束、と呟く。私は懇願した。最初で最期の奴隷からのお願いだった。

「歌って、ルナファラ。あの歌を歌って。ルナファラが作った、世界が微笑む歌を歌って。」

ルナファラは私から手を話すと、立ち上がって歩き出した。歌を、謡ながら。

新しい時代の、母の歌を。

第三十七話

「これ……」

ユズはその音楽を耳にして、目を見開いた。

耳に覚えがあった。幼い日から、産まれる前から何度も何度も聞いていたあの歌。

驚いて見渡すと、歌っているのはアーシェだと分かった。黙祷でもしているかのように暗くうつ向いて、だが軽やかに歌を歌っている。正確にいうと、それは歌ではなく、不思議な音律の流れ。人から人へと伝わるには困難なおと。

間違いではないかと思い、耳をすました。だが、間違いではない。風馬ではないものが、あの歌を歌っている。

「羽化の儀式の曲だよ、アーシェ。」

ユズの胸元に、熱い鼓動が宿っていく。頭より体が、体よりも魂がその音を知っていた。聖なる力が魔法を媒体としてゆっくり大地を流転するのが、心臓で理解できる。

「ルナファラは、私は……」

ユズは考えあぐねていた。迷って迷って決めかねる答えを、大人たちは守るべき者を背に簡単にきめてしまう。

それは正しいの？間違いなの？それとも、正しいも間違いも当てはまらない何かがあるの？

アーシェの歌声を源に、魔法陣に光がとり始めた。蛍のような光は、規則もなく炎のように力をだす。その光に、誘われるようにぞわぞわと動くモノがあった。

怨念だ。

怨念が壁や魔法陣から、生えてきていた。それらはまるでいもむしのようにうねり、部屋の表面を舐めるように這う。

なんということだ。魔霊窟全体、そして草原の彼方から誘われた怨念が、この部屋に終結している。彼等はもちろん、アーシェを endpoint としていた。

彼等が来るのを予測していたのだろう、ルナファラが再び飛ぶ。体を大の字に伸ばし、髪の先にまで念を送る。

『怨念たちよ、私はここだ』

怨念たちはルナファラの存在に気付き波打つと、ひとつの意思を束を形作る。ルナファラは、自らを餌としたのだ。

束は巨大な蛇となってルナファラに襲いかかる。その光景は、荒れ狂う海を必死で逃げる小舟に似ていた。今にも、吞まれてしまいそう。

意を決して、ユズは結界を飛び出した。

パリパリと結界が破れてユズに絡み付く、それを手で払いながらルナファラへと疾駆する。

「かとの術っ」

ユズは指先で簡易な魔法陣の印を組んで空中へと向けた。途端に、印の中から拳ほどの火の玉が生まれ、大蛇へと飛込んでゆく。

ぼんっ、と大蛇の一部が小さく爆発し、散る。だが、大蛇を目の

前にして、ユズの幼い術はさほど効かない。

「怨念つて、本当に厄介！」

ユズは二本のこぶりな刀を取り出すと、構えた。

「危ない、逃げるのですつ。あなたには倒せません！」

「いやだ！」

気持ちちが駆け出し、もう止まらない。なにが正しい、なにが間違いだと考えるよりも、自分の体と気持ちの方が、もう強かった。

「逃げないよつ、来い！」

大蛇が、とぐろを巻いてルナファラからユズへと方向を転換、飛ぶ。

ユズは息を整えると、その時を待った。大蛇の動きと、あの曲だけに集中して。

「いいい…きつつ…！」

猛烈な風の摩擦音。

耳を引き裂くような音のなか、ユズは目をひらいて己のやいばを見た。

やいばが、怨念を確かに捕えている。思ったとおり――。

「忒ー！」

ユズは剣を斜め上になぎく。怨念の鼻先を、ユズの刀が確実にそぎ落とす。デイノの剣とまったく同じ効力をもって、ユズの剣が踊り上がる！

ユズは、剣舞いをしていた。

その舞いは、風馬に、そして聖園に、音楽と共に引き継がれた古い舞。

「あれは、羽化の舞…、そうか。羽化の舞をもって、部屋に散らばる聖紋の力を呼び寄せたのですか。」

ルナファラは息を飲んだ。

羽化の舞で封印をしていたことを知り、逆に羽化の舞で聖なる力を引き出せると推測して、大蛇を誘ったユズの賢さと度胸に、ルナファラは驚いた。

だが、舞という制限された動きの中で戦うのには無理がある。その内、制限された動きに敵も気付くだろう。あくまで、時間かせぎだ。

「うあつ！」

ディノの声。

ディノの剣が、十六夜の刀に弾かれた。

隙をねらって、十六夜の突きが繰り出される。ディノは体をのけぞり二対の突きをなんとかかわすが、脇腹を浅く切られる。

後退。

遠くまで飛ばされた剣をとりに行きたいが、それを十六夜が許さない。

ディノは十六夜の刀を体だけでかわしてゆく。二本の流れは素早く、かわすと次々に皮膚を切られた。

血がにじみ、瞳に入る。

「ちっ、」

息が次第にあがってゆく。剣がないことで一気に増大した運動量

が、容赦なく体力を削ぎおとしてゆくのがディノには分かった。せめて、剣をとれば――。

その時、ディノは転がった剣に近付く人影を目にした。

ルナファラだ。

ルナファラは、剣を手にとると、ディノへとすぐさま向かう。

「来るなっ！」

気付くと、ルナファラの目の前に十六夜がいた。十六夜のなんの感情もみられなかった瞳が、ルナファラを目の前にしてその色を変える。

「し、ネ……」

十六夜の刀が、大きく掲げられ、そしてルナファラの頭へと一気に落下する。

ルナファラは、目を閉じた。死を、そして全ての破壊が瞼に映った。

…だが、ルナファラの予測と違い、最期の時は訪れなかった。

かわりに、光が。
光が訪れていた。

「古の浄化、刹那は積雪となって石と還る。血脈は踊り出て蜂起する、誘う争いを」

「尊父と母堂は血を混ぜて我等をつくりて轍をなすだろう」

アーシェが、歌っている。

「呪いは呪いのまま、十六の夜に掲げよう。朔の年がまた始まる」

「空を欲するなら、さあここにおいて」

あの、歌を。

アーシェはそれまで閉じていた瞳を、かっと見開いた。

「天・逝・儀・廻…！！」

白。

そして全ての色。

アーシェの歌が発動した瞬間、極彩色が周囲からほとばしった。聖なる力と魔法が大気となり颶風となって、生き物のように魔法陣を駆ける。湧き水のように光が伝い、溢れる。疾風は雪崩のように部屋を飲み込んでゆく…！

「わっ！」

巨大な流れはあっという間にユズ、ルナファラ、ディノ、そして怨念たちを抱擁する。身構える隙さえあたえず、全てが白と変わる。

…全てが。

やがて、人々の歡喜が聞こえた。

肉体に植え付けられた苦痛により魂に生まれた歪みをほぐされた人の喜びの聲が。

記憶と哀れみの浄化による解放はしここの喜びを与えて、彼等を安らぎへと誘う。

忘却の旅路へと。

…痛くない、

…苦しくない…

千年もの長きをかぜられた重圧が、砂のように崩れてゆく。
今まさに、怨念もまた、光に変わる…。

そこには、静謐があつた。

第三十八話

体と世界の境界線を失った、穏やかな静けさに抱かれているのを、感じた。

まるで海におちてゆくようだった。

息苦しさのない、大海。

…。

誰かが、自分の名を呼んでいる。

…い…。

顔をあげて見ると、水面とも雲海とも見える光の戯れがある。とはいっても、それが上なのか下なのか、真実は定かではなかったが。

芯から暖まれる熱が、頬を撫でる。

…い、ぞ…

光は、誰でもない、自分の名前を叫んでいる。名を呼ぶ声の主は姿なくともすぐ分かる。

—ルナファラ。

俺は、自分の名前を呼ぶ、あの人に答える。

ああ、あなたは微笑んでいるのか？

…十六夜…
いざよひ

ようやく、姿が見えようとしていた。乳白色の霞のなか、ゆっくりと近付いてくるあなたを感じた。

俺はずっと、狂っていたような気がする。あなたとの誓いを、忘れてしまっていたような、あなたを悲しませていたような、そんな気が。

—ルナフアラ—

あなたを抱き締めるために、もう一度この腕をひろげよう。
もう一度あなたに出会おう。

もう一度。

—もう、大丈夫だよ—

「…くあ、」

どれほど、光のなかで呆然と立ち尽くしていたのだろうか。ディノはまばたきをして、ゆっくりと光の荒波で奪われた景色を取り戻していった。そうしてようやく、自分がどこに立っていたのかに気付くと、ディノの意識が鮮明となり、なにが起こったのかを理解する。

周囲から、邪悪な念が跡形なく取り払われていた。

「アーシエ、ユズ！」

ディノは、寄り添うように倒れているアーシエとユズに近寄ると、その体を揺さぶった。

「ん…」

刺激で、アーシエとユズが覚醒する。すぐさまアーシエは上体を起こすと、陣は、と呟いた。

「成功したみてーだ。」

ディノの歯を出した笑みを見ると、アーシエは力を失って再び横になる。

「大丈夫？」

ユズがアーシエの体をさすると、

「ええ、それより…」

アーシエは、そのかそけき人を見やった。二人も俯う。

視線の先には、あの二人が寄り添うように佇んでいた。

「ありがとう、聖なる女性…いいえ、アーシエ。そしてユズ、ディノ。」

ルナファラが真摯さの光る瞳で穏やかに見つめ返す。その細い肩に、十六夜の手があつた。

十六夜が口をひらく。先ほどの声とはちがう、少しかすれた男性の、ひとつだけの声をもって。

「少年、怪我はないか？」

「ないよ。死ぬかと思ったけどな。」

ディノがおチャラけて両手をあげると、十六夜が小さく噴き出した。

「君は愉快的男だな。そうか、それなら良かった。…君は、強いな。」

「あんたもな！」

ディノの心には、大きな満足感があつた。強い者と……しかも本来なら剣をあわせることなど不可能な存在と剣を交えられた喜びが、彼の中で大きく弾けていた。

それは十六夜も同じことだろうか？何故なら、二人とも同じような表情をしている。遊びに疲れて倒れこんだ子供のような表情だ。

「……いつか君は私を超えるだろう。そして風馬の務めを越えて、君の力は世界に必要となる。」

「褒めすぎだぜ……」

「そのうち、分かる。」

「……どういう、こと？」

十六夜の言葉に、ユズが問いかける。十六夜はその問いに答えず、かわりにルナファラを見やった。促されるように、ルナファラが頷く。

「世界の魔法気流に異変が生じています。平原の封印を壊すほどの強い異変が。」

ルナファラの言葉は、予想外のものだった。

「なんだ、俺のせいじゃなかったのかあ。」

ホッとするディノに向けられるユズの冷たい目。それをごまかすように、ディノは瞬時に真剣な顔を繕った。

「なんでだ？」

「理由はわかりません。ですが、封印にこれほどの影響を与える魔法気流の変化は、長い人の世において一度もありません。今は枯れ果てた大地となった隣国バーミアでの魔法戦を彷彿させる乱気流です。」

隣国、バーミア王国。

貿易により栄え、広大な国土と強大な力を持って世界に名を轟かせていた国である。あの長いゼルダ街道の製作も、バーミアの力によるものだ。ドラグノアはバーミアと共に栄えたと言っても過言ではない。

だが、遠い日に起こった激しい内乱において、かの国は草木の生えぬ灰色の大地と化した。すべては、莫大な国財を魔法につぎ込んだためであった。魔法の激しい気流の乱れに、大地が崩壊したのだ。内乱は大地の崩壊と共にその炎を弱め、万を超す難民を生み、国を巻き込んで消滅した。

かつて栄華を極めたバーミアの王国は、いまは熱砂の吹き荒れる遺灰の大地だ。

「世界は、やはり灰の大地のようになるのでしょうか。」

アーシェが暗い表情で呟く。

ディノは戸惑った。

やはり、とは、どういうことなのか。アーシェはまだなにかを隠しているのか？

「分かりません。それを知るために、あなたは月へと赴くのでしょうか？」

どうしてそれを、というアーシェの言葉を、ルナファラは腕で遮って

「あなたが教えてくれたのですよ。強い決意が、私には聞こえます。」

ルナファラは深く礼をした。

「同じ力を持ち、スピカとイエズガルドの教えを受け継ぐひと、私はあなたの旅の行く末を聖なる園と共に見届けましょう。」

アーシエもまた、同じように礼を返す。…失われた記憶の世界で
かいま見た、ルナファラの生き方に敬意を表して。

と。

突然、十六夜が腕をかざして思わぬことを口にした。

「…では、踊ってくれないか。」 かざす彼の片手は、ユズに向か
っている。

「へ?!」

ユズは驚いて飛び上がった。

「こらこら、成人の儀がまだ終わっていないだろう?」

「『あ』」

ユズ、ディノ、アーシエの三人がまったく同時に声をあげる。三
人とも、すっかり忘れていたのだ…。

「封印はもう大丈夫。千年の時の緩みも強く結ばれた。心行くまで、
踊りなさい。」

「…はい!」

ユズは十六夜の言葉に強く答えると、剣をかざした。

その瞳に、もう迷いはない。前夜祭、星の流れる空の下で抱いた
不安も焦燥もそこには塵ひとつなかった。

大人ではない、女性でもない。それらを超越した、高みがあった。

……人間に、成る……

成人となったユズの舞が始まる。

凜と張りのある声が、まんをじして封印の上で弾けとぶ。

「……壱!!」

第三十九話

草原は哭く。

緑と土の屑の間をぬぐい、時が流砂のように流れる。時と時は時よりその頬を抱き、その肩を噛み砕き、舐め、せつなげに哭く。

栄光と秩序、汚穢と悲壮の上に構築される新たな歴史を思つて、ただひたすらに哭く。

昨日、今日、まだ見ぬ明日へと。

ビュー、ビュー…。

それは生ける者への、逝ける者への、饑のようだ。

ビュー、ビュー…。

草原は、哭く。

侵食をもつて優しく大地を弔い、雨嵐をもつて優しく大地を産み落とす世界の中心に。

まだ見ぬ明日は極東からやってくる。まだ見ぬ明日は極西からやってくる。ひそめあい、ざわめきあい、人の世を跳躍する。

山よ、谷よ、海よと。

ビュー、ビュー…。

人はそれを、風と呼んだ。

「十六夜は、ルナファラのことが、好きだったのかな？」

獣の背に乗って、風の民が呟く。

「さあな、しらねえよ……」

誰かがそれに答えるも、声を風がまきとって、天へ天へと昇らせる。天にはもう、濃紺がそのマントを広げ始めていた。

何もかもを見知った時間たちは、何もかもを語らずに天空の藍に溶けこんでゆく。

そしてやがて、全てが黒をおびた。時は結合し、その身を明日に委ねてゆく。ふつつつと、静かに明日が構築される。

――私はあなたを殺し続ける――

――私はあなたを愛し続ける――

ルナファラ享年12歳。

草原だけが哭き、歴史だけ横たわっている。

風馬の里。

明るい食卓の光の下で、キリアが大声を張り上げた。

「なんだって！？そんなことがあったのかいつ。」

キリアはユズの話に驚いて、スープを溢した。スープがみんなの顔にかかる。

「おや、ごめんよ。それにしてもびっくりだ。あの場所にそんな秘密があつたとはね。」

「初耳……」

キリアの寡黙な夫、キリコがボソリと呟く。

「そんな中で式を無事にやりおえるなんて、さっすがユズだ。素晴らしい！」

「えへへ」

口の中にスープを入れながらユズは満円の笑みを浮かべた。

「まあ、話は所々秘密にしないといけないね。魔法気流の変化があるつてのは巧くみんなに伝えなきゃいけないとは思うけれど」

「なんでだ？」

「デイノ、よく考えな。ルナファラの封印は怨念のためのものだ。そのルナファラが聖なる力をもっていて、自ら人柱になったなんて伝承が伝わったら、今までルナファラや十六夜の願いが水の泡になっちゃうんだよ。」

水の、泡。

怨念はルナファラを恨み、そのお陰で怨念はそれほど人に影響を与えない。だが、ルナファラがひとたび聖人として扱われたら、怨念たちは散々になる。

「ディノって馬鹿なんだー」

「うっせ、ユズのくせに」

「あーら、落ち着きのない大人だわー、本当のことといっただけなのに」

ユズの方が言葉では一枚上である。

「でも、成人の儀式が無事に終って良かった」

アーシェの言うとおりだった。あのような状況で大した怪我もなくすんだことは、奇跡に近い。なんせ千年の時をおいても尚、力を示す印と念を相手にしたのだから。

「なあ、アーシェ」

「はい」

「月に、本当に行くんだよね？」 ディノの唐突な問掛けに、アーシェはしばし沈黙してから深くうなづいた。

「はい」

「そっか…」

ディノの頭の中には、あの言葉が何度も巡っていた。

「世界はやはり、灰の大地のようになるのですか」

「分かりません。それを知るためにあなたは月に赴くのでしょうか」

最初、アーシェと出会った時は、ただの家出少女だと思った。無謀なことを言い、現実と夢を混同した愚者だと思った。

「まあ、頑張ればいいさ。あんたが死のうが行きようが、俺には関係ないからな。」

そう、ディノは吐き捨てた。

「……だけど今は、ただの夢追い人には思えない。彼女の中にある誓いと決意、そしてそれをたぎらせる大きな勇氣に触れたからだ。」

「月に行けば、すべてが分かるのか？」

「ええ、伝承によるとそういわれています。月には、全ての歴史、全人類の記憶があると。」

エターナルレコード、と、キリアが呟いた。

「聞いたことがあるよ。ルナファラによると、ただの話ではないよ。うだね。」

再びアーシエは頭を傾ける。

「月に、行く……」

あ、あの感覚だ。そう、ディノは思った。

武者震いだ。

武者震い。

ディノの中で、マグマのように熱い血が流れ、心臓でドクドクと
うなっている。

剣と剣を交えるときに感じる緊張感に似た感覚が電気のようにピ
リピリと声をあげている。

信じがたい感覚を、ディノは全否定した。愚かなんだ、それは馬
鹿げてるんだ、と。

それほどに、強者が簡単に死んでゆく世界を見てきた。憧れてい
たラムシエムの傭兵や戦士たちが、つぎ会ったときは屍であったり、
片足を失ってただのゴロツキになりはてしまった現実を。

だけでもう、馬鹿気てると言えなかった。

そして心臓は、激しく高鳴っていた。

ディノはもう、気付いている。この感覚の正体を。

…退屈な日々嫌気がさして、里を出たあの朝に抱いていた感覚。
無我夢中で未来へ駆け出した、あの感覚。

目覚めろよ、と

自分が叫んでいる。

第四十話

風がひた走っている。

炎の竜が住まうという高い山脈から真つ直ぐに吹き降ろす疾風は、茂みを小さく引きちぎり香りを巻き上げて大地を駆ける。軽やかなそれは、幼い子どものようにでも、気高い青年のようにでもある。赤子の皮膚のように穏やかに繋がりにゆく世界を、冷たい手で触れる母のようでもある。

風はやがて草原を抜け、川を横切った。人の住処の近い僅かに汚れた大河を渡ると、疾風は強風へと姿を変えていた。そして力強さを得た風は、水田の上空を飛び、大きな畠を越えて、人の街に滑り込む。

ビュウ！

風が勢いよく窓を叩いた。

木杵が軋んで、泥棒でも訪問してきたような音を立てる。その音に、小首を掲げて反応する男がいた。

「風が、強いな……」

18、19の若々しい青年だった。青年は書斎らしき部屋にて卓上に広げられた地図を折ると、窓の外を再び見やった。

彼の黒髪が隙間風に揺れ、長い髪から瞳が覗く。深淵を思わせる深いブルーの瞳。

その瞳の色のためだろうか？外見から判断できる年齢には相応しない独特の空気を、青年は所有していた。

五十を……いや、百を越した者のような落ち着きが彼にはあった。まるで、『竜』のような……。

「ルキさまあゝ！」

一人の騎士が青年の部屋に飛び込んできた。

「どうした？」

飛び込んできた騎士は激しく息をしながら、青年・ルキ・に敬礼をした。青年より一回り年上のようなのだが、その姿勢には青年に対する敬意が溢れている。

「は！せ、聖なる祈り子アーシェ様の情報が入りました。予想通りです！」

「どの予想だ？」

「あ、はい、アルベルト平原ルートです！シンガに乗っている模様。引き続き鳥人族部隊が追跡。昼にはこちらを通ると思われます。」

「そうか。では、聖園に連絡を。配置はAで頼む。すぐに用意を。」

ルキはテキパキと騎士に指示を出すと、壁掛けにかけていた黒いマントを羽織った。

「ルキ様は？」

「私は……。」

ルキは、卓上を見下ろした。地図のほかに、紙切れが一枚ある。その紙切れには、ある人物が魔法転写により明確に映っていた。

「……ディノ、か。運命とはかのように数奇なものか。」

青年は紙切れを摘むと、扉を勢いよく開けた。

第四十一話

草原。

風馬の里からはだいぶ離れた位置に、1頭の駆けるシンガがいた。

「だあかあら、なんだってそんなところに寄らなきゃあ行けないんだよ！三日も予定より遅れてるんだぞ！？」

ディノはシンガを猛スピードで走らせながら、背中を必死に掴むアーシエに悪態をついた。

「でも、ルナファラ魔霊窟での封印に加えて、旅に必ず役立つものが手に入ったのですから、無駄な三日ではなかったでしょう？」

そういつて、アーシエは腰に下げた短剣を見下ろした。

清純な銀色の輝き。キリアがアーシエのためにとダークベアの爪で作ってくれた極上の剣である。

風馬の刻印が刻んであり、聖なる力をより帯びやすくなっている。風馬は基本的以外の者のためには剣を作らない。それは炎の魔法を使った独特の技術を外に漏らさないためだ。この剣は風馬に許された証でもあるのだ。

必ず無事に旅を終えるんだよ、とキリアに剣を握らされたとき、その思いに答えようと剣に誓った。その熱い気持ちで、剣を見るたびにこみ上げてくる。

「まったく、折角のダークベアの爪がお袋の味に早変わりってか、もつたいねーもつたいねー。」
「ディノ！」

「おこんなよ、そんなこと言うと寄りませんわよオネーサマ。」

ディノの返答に、アーシエの顔がパツと明るくなる。

「寄ってくれるのですか？」

「心優しいディノちゃんは子守の才能に満ち溢れていたのであった。」

ひょうきんというより馬鹿にしているのが丸分かりのディノの態度に全く動じず、そればかりかアーシエは、突然ディノに抱きついた。

「ディノ、感謝します！」

「わ、わああつ、あぶ、あぶねええ！！！」

アーシエの激突にちかい抱擁にバランスを崩して落っこちそうになりながらも、一行は進む。

行く先はハシェイブ！…ではなく。

かつてアーシエとディノが住んでいた思い出の土地、ならず者の街『エドガー』へと。

エドガーはアドベルト平原の西に位置する。方角的には火竜山脈に最も遠い。

様々な人種が共存するドラグノアにある意味ふさわしい、身分も職種も何も関係がない、金と知識と力だけがものをいう町だ。

乱雑で、粗野で、だが賢しい。そんな人々が住んでいる。

だがそれも、昔のことだった。

「昔とは全っ然違っぜ、アーシェ」

ディノは人混みをかき分けながら言った。ディノの言葉に、困惑に顔を染めたアーシェが傾く。

街は、姿を変えていた。

布と岩に木を組み合わせただけの汚い下級社会の町並みは、煉瓦の美しさが輝く上等なものに。

石があべこべに並べられただけだった道路は、しっかりと整備整頓され、馬車が悠々と走れるほどに平に、広くなっている。

そしてなによりの変化は、歩く人々の服装だった。

人々は昔、必死に働いて流した汗により薄茶に染まった服をきていたのに、今は小綺麗な身なりで、過去の生活は跡形もなく消し去られているようだった。

「話には聞いてましたが、本当だったのですね」

アーシェは美しい町並みに喪失感を覚えた。

どこもかしこも芸術的な建物、そしてそれらに挟まるように息をするひと、ひと、人ばかり。

かつて歩き、かつて走った、小さい子どもには世界のすべてだった思い出の場所は、何処にもない。あるのは、記憶にはない、整えられた見知らぬ土地だ。

「騎士の駐屯地ってのは、こんなものだよ」

そう、ならず者がかつて集ったこの場所は、アーシェたちが去ってから半年後、その乱れを国に危険視され、人民保護の名の下に騎士団が置かれるようになった。

違法な店は摘発され、荒くれ者は捕まり、不衛生な建物は撤去された。鎮圧され、洗浄されて、街と人々は姿を変えなければならなくなつたのだ。

街の全てのスタイルが、根本から変えられてしまった。

以前のように、賭博に負けて昼から酒にあけくれる男たちが倒れていることはなく、娼婦たちが堂々と路地で体をくねらせることはなく、商人や農民が路上でモノを羅列させて売ることもない。

それは風俗の死、歴史の死。

結果は、流麗とした都市、人。

けれど。

「すこし、寂しいですね」

まるで心にぽっかりと穴が空いてしまったよう、アーシエは呟いた。

「これでは、ディノもこの街のことを思い出せませんね」

なんだ、俺に過去を思い出してほしくて此処に寄つたのかよ。

アーシエの言葉に、ディノは思った。

迷惑な話だ。幼少の頃の思い出を想起させてなんになるのだろう。俺に郷愁に浸ってほしいのかよ。

「なあ、街は変わつちまつたんだ。あんたの頭のなかにある街は、もうどこにもないんだよ。」

アーシエがだんまりと頭をさげる。言わずとも。彼女にはシヨックだつたのに違いない。

もしかしたら、話に聞いていた街の姿を、信じたくなかつたのかもしれない。自分の基盤を失うようで、怖かつたのかもしれない。

遊牧民出のディノでも、その気持は多少なりとも分かる。

…少し、いじめすぎたか。

「なあ、アー…」

「そここのあんたたち！」

突然、ディノは立ち止まった。肩を捕まれたのだ。

見ると、覚えのない年老いた顔。赤に白の刺繍が入った綺麗な服を着た老婦人だった。

彼女はひどく驚いた、だが嬉しそうな表情で、
「もしかして、…ちゃんと…シェち…じゃな…かい？」

人の波が激しい。

場所を変えようと老婦人に促されて、ディノたちは道の横にそれた。そして道の脇の、ある店に入る。

パン屋だった。

思わずよだれが出てしまいそうな色に焼けたパンの、こつばしい匂いが鼻に入る。

そのまま奥の部屋へと通される。どうやら、客間らしい。

「ちよいお待ちよ」

そう言つて老婦人は部屋を出る。ディノはすぐさま、アーシェに耳打ちをした。

「あのばあさん、一体なんなんだ？」

アーシェはディノの言葉にクツク、と笑うと

「今に分かりますよ」
と返した。

どういうことだろう。気さくさからか、ばあさんにホイホイついてきてしまったけれど、なんだか怪しい。

ディノがもんもんと猜疑心を高めていると、食欲をそそる芳香を籠に詰め込んで、老婦人が部屋に入ってきた。

籠の中には、きらきらと輝いたパン。すべて貨物種族ヒルポプスの形をしている。この形はイコール、中に甘い餡が詰まっていることを表す。

「うつまそう…！」

思わずディノは感嘆の声をあげた。

「ディノちゃんは昔から変わらんね」

その言葉に、ディノはクエスチョンマークを頭に浮かべた。なぜ、このばあさんは俺の好物をしっているのだろう。

「パン屋のおば様、お久しぶりです」

—どうやら、知り合いらしい—

アーシェが会釈をすると、感極まったように老婦人は両手を頬にあてた。

そして、

「ああ、ほんとう久しぶりだねえ！

アーシェちゃんとっても美人になって、

本当おどろいちゃったよ！

すごい美人さんが歩いてるからすぐ気が付いたよ。

アーシェちゃんはエドガーで一番可愛かったものねえ！

ディノちゃんは男前になって、ばあは本当に嬉しくて、ああもう、昔はこんなに小さかったのに！

すごく小さくてもう、

野犬に食われそうになるわ、

狂った売女に拐われそうになるわ、

その度に包丁もって追い掛けたもんだよ！

オルセさんが泣いてよく止めたもんだ、懐かしいね、

今度は包丁もって追い掛ける方かい？

たくましくなったもんだ！」

老婦人は唾を吐きながら、きちんとした身なりなのに語るにつれて言葉遣いがどんどん汚くなりながら、早口で巻くしたてると、荒い呼吸で椅子に座った。

「ガサツでごめんね、まあ、あたしみたいな古い人間はさ、メツキみたいなもんだからさ。」

けらけらと笑うと、ゼーハーと呼吸をする。やはり肺に空気が足りなかったようだ。

「…懐かしいねえ…」

老婦人はうつとりと呟くと、今度は静かに、たんと語り始めた。

老婦人は、エドガーで昔からパン屋を営んでいた。

そしてそのパンは、アーシェの育ての親…ガアプ、オルセ、キルアが作ったオリザ（穀物）を使って作っていた。ガアプたちは少な

いものの、良いオリザを作っては、色々なところで売って生計をたてていたのだ。

老婦人とガアプたちは仲がよく、子どもがいない老婦人にとっては、アーシェたちは本当の子どものように可愛かった。

それは街のひとたちにとっても同じで、子どもが少なく、世を捨て家族を捨てた孤独者の多いこの街では、アーシェたちは宝物と同じだった。

パン屋は、汚くて貧しいかったけれど、幸せだった。

だけどある日、死霊が街を襲った。その事件から騎士たちや聖なる者たちが増え、街は少しずつ、けれど劇的に変わった。

生活がよくなった。けれど何故だか寂しかった。

それは多分、あの荒れた街が大好きだったから。あの退んだ人々が大好きだったから。

乱暴で、惨めな街だったけど、誰もを受け入れる暖かさがあったのだと、老婦人は語った。

「ふふふ、最近じゃあ、昔の楽しかった日々ばかり思い出すんだよ。」

そう言われても、ディノにはピンとこない。

横に座るアーシェは老婦人の言葉に耳を傾け、しきりにうなづいている。二人についていけなくて、仕方なくヒルポスパンを黙って頼張る。

自分は知らないのに、他人は自分のことを知っているというのは、なんだか奇妙な感覚だ。しかも覚えのない幼年期で、ことのほか奇

妙に思う。

「覚えて、ねーなあ」

ぽつんと呟いたディノに、

「あんたはよく、アーシエちゃんとルキちゃんについていったんだよ。おぼつかない足でね、泣き喚きながら追い掛けてったんだよ。あーちゃ、るきちゃ、って呼んでね」

手を広げ、バタバタさせる。顔はいかにも泣いています、といった顔。

老婦人の適切であろう描写に、ディノは不機嫌になった。

――覚えてないっつーの！

「しっかし驚いたもんだね、アーシエちゃん、その格好……」

老婦人はじろりとアーシエを見ると、

「聖なる者かい。やつぱりただ者じゃないと思ってたよ、おしとやかだし、気品があつたしね。さっすが、我れ等がゴミ溜めの姫様だね……おっと！」

口を押さえこんだ。

ゴミ溜めの姫様……街の人間にこう呼ばれていたのか。なんていうネーミングセンスだ。

「くはは、ゴミ溜めかよ！」

「ディノちゃんはゴミ溜めの怪獣だよ」

思わず、閉口。

「でも今じゃ、ゴミ溜めの、なんて言えないね。聖なる園のお姫様、そしてゴミ溜めの騎士様は、金の獅子……」

「ルキを、知っているんですか？」

「あつたりまえさね。ルキちゃんの出た騎士大会を見たけどね、す

「ごいもんだったよ。ドーン、バーンツ、女たちがキャアアア〜ってね」

老婦人は両手を振ると、再びうつとりとした表情に収まった。その目元には、涙。

「みんな、立派になって…。これで、亡くなったガアプさんたちも安心だねえ。」

…え？

「二人で、お墓を拝みに来たんだろ、きっと喜ぶよ」

…どういう、ことだ。

ディノはアーシエに視線を合わせた。

ガアプって人は、旅に出たんじゃないのか。
たちって、どういうことだよ。

けれど疑問の答えは得られない。目を、そらされた。

アーシエはディノの視線から逃げるように後頭部を見せると、そのまま黙ってうつ向いてしまった。

第四十二話

アーシエはディノの視線から逃げるように後頭部を見せると、そのまま黙ってうつ向いてしまった。

アーシエは、沈黙したまま歩き続ける。

「どこ、いくんだよ……」

ディノの質問にも答えず、たんと進む。いつの間にか街から街外れの山へと、その足は向かっていた。

「墓に、いくのか？」

道の左右に、人の背丈ほどの白い竜の像がならべられている。この像の意味くらい、ディノは分かっていた。

これは、死者の道。

共同墓地へと続く道だ。

共同墓地はとても広く、大きかった。
中央に佇む竜の像を見上げると、真つ青な空の背景だけが横たわっている。

太陽に照らされ、きらきらと光っているが、苔むし、輝が入っていることからかなり古いものだろう。

墓地とあの街の規模にしては小さいといえる像。きっと、街が変化するずっと以前からあり、あの街に流れる時を見下ろしてたにちがいない。

アーシエは、下を見ながら歩き出した。

名前を探しているのだ。共同墓地のある一点には、埋葬された死者の名が刻まれている。

ガープ

オルセ

キリア

「キリア！？なんで母さんの名前がここにあるんだ…！」
ディノは驚嘆した。

キリアは生きている。風馬の里で、今も生きていると言うのに、なぜ名前が掘られているのか。

「ここであの日、三人は死霊に殺されたことになっているんです。」
「なんでっ、なんでなんだ！」

「…竜の血飲み子の存在を知ってしまったから、…神竜の死を知って、しまったから。」

…竜。

話には聞いていたが、冗談のような気がしていた。信じてはいなかった。それよりも。

「神、竜…」

呟いて、自分がより混乱するのを感じた。ディノはそう、他人事のように感じていたから。

おとぎ話だ、妄想だ。

ちがうのか？

人の死を偽造するなんて、ふつうのことではない。ふつうの人間には出来ない。

まさか、国が？

なんのため？

…嘘、だろう？

アーシェが再び歩き出した。ディノはフラフラとした足で、その後についてゆく。

街を下りて、横断する。アーシェは、まるで住みなれた街のように歩く。道の流れは昔と一緒なのだろう。その足取りに迷いはない。人混みを抜けて、再び山を登り始める。

長時間の歩みなのに、不思議と汗が流れない。頭が真つ白だからだろうか。歩みもなんだか空気をかいているように感じた。いまいち感覚の掴めない歩行だったが、どうやら目的地につけたらしい。

そこは、民家だった。

石がくちて、所々くずれている。

作った者が専門の知識を何ひとつもたず建てたのだろうか、それとも雨嵐が激しく打ち付けたのだろうか。

はたまた、近代的なデザインではあるが実は何百年も前にたてられたものなのだろうか。

…まるで、魔物にでも襲われたように荒れている。

「ここに私たち、住んでたのですよ、ディノ。」

漸く開かれたアーシェの唇。

「家？ここが？随分とボロボロなんだな」

外にいるのに、居間の全容が分かるのは、大きくそげおちた壁のためであつた。

壁と共に崩れたのか玄関が見当たらない。ディノは遠慮がちに穴から家の中へと足を踏み入れる。

生い茂る草に食われた家具が、この家に人が住んでいたことを肯定する。床がギシギシと腐った音をたて、カビの臭いがディノの鼻孔にふわりと入り込む。

「ここに、住んでた？」

家の中を歩く。傾いた壁、屋根に開いた穴から落ちる光、乱雑に

詰まれたガラクタ。

そのひとつを、ディノは手にした。苔の生えた木彫りの熊。

「ここに…」

ディノ、と呼び止められ振り替えると、そこにはアーシエの柔らかな瞳があつた。

アーシエ、俺やつぱ覚えてない…そう、言おうとした時だった。

ふと、不思議な感覚が、心臓を押した。

なんとも言えない奇妙な感覚が心臓から肺へとわたり、身体中の血管をめぐる。冷たさと温かさを混ぜあわせた、まるで春のような心地よさがディノの皮膚をなでさすった。

それが既視感だと知るのに、時間はかからなかった。

「あの日、俺は部屋からでた」

「ディノ？」

「だって、二人はずっと窓の外をみてて、俺、」
だから、

「廊下を、かあさんに抱かれながら移動した」

心配そうに見守るアーシエを無視して、ディノは歩いた。

「居間で、酒飲んでた」

居間には、ボロボロにくちた椅子と机、そして埃のかぶった酒瓶が転がり落ちていた。

それに目を落しながら

「酒くさいから、俺は母さんの方が好きだった。母さんは酒が飲めないひとだった、だから、」

あの日も顔をそむけて、

「ディノ」

「それが最後なんてしらなかった、わかんねーよ、だって酒くさくつて、いつもどーりで、あの頃は誰かが急にいなくなるなんて分かんなかった」

「思いだしたの？」

「友達に、会いにいくんだって、母さんは言っただ。だからみんなすぐに来ると思ったのに、だれも来なかった、さびしくて泣いても、誰もこなかった」

「デイノ？思い出したのね？」

「しらなかったんだ！」

デイノの一喝に、アーシエは体をびくりとさせた。かまわず、デイノはアーシエの肩を掴んだ。

「あの人たち、どうなった？」

「え？」

「父さんと、じいちゃんはどうなったんだって言ってんだよ！！」

硬直。

予想に反した反応だったのか、アーシエはそのまま、困ったように顔を螺子曲げた。

「なんなんだよ、あの墓。アーシエ、アンタは何を内緒にしてるんだよ、一体なにをしたいんだよ！」

デイノの罵倒に、アーシエは思わず視線を落とす。

…怒り狂うデイノに萎縮しているのではない、彼女があることを言うのに戸惑っていることは、歴然だった。

アーシエは何故か、震えている…。

「アー、」

突然なアーシエの異変に、ディノが彼女の名をよぼうとしたときだった。

「父さんは」

アーシエの声が、ディノを遮る。

「父さんが旅に出たのは、本当なの。」

かすれがかった、耳をそばだてないと聞こえない、そんな声。

ディノは黙って彼女の言葉を待つ。ゆっくりと、だが確実に、アーシエは続けた。

「父さんは、私たちの秘密を守るために、都から姿を消したの。それは聖王と父さんの決断で、知ったのも父さんがいなくなっただけだったの。私たちは、ただの身よりのない子どもとして、聖園に受け入れられた。」

「じゃあ、あの墓は偽物なんだな？二人は、生きてるんだな？」

ディノの質問に、アーシエは首を振った。…左右に。

「違うの、それは違うの」

「なにが？」

アーシエは涙を目に浮かべ、そのまま手で顔をおおった。

そして、

「おじ、おじいちゃんは、わた、わたしたちを…」

…かばって、死んだの。

どういう、ことだよ。

「母さんに、嘘をついたのか？」

アーシエは黙っている。

「なんで嘘なんかついたんだよ。」

アーシエは尚も黙っている。ついにディノは声を荒げた。

「なんでそんなつまんねー嘘なんかつくんだよ！」

「だって…！」

アーシエの顔が、ディノの眼前にある。

アーシエは、泣いていた。

目に涙をためて、でも必死にこらえて、だけれど涙は流れて流れて。

「そんな悲しいこと、言えるわけじゃない…！」

…ああ。

その時、ディノはようやく思い出した。

—そうだ、この人は—

馬鹿みたいに優しくて、
馬鹿みたいに強がつて、
馬鹿みたいに他人を思い遣って、

…—こういう、人だった。

懐かしい感覚が、ディノの頬を熱くさせる。目に、喉に、耳の下に、不思議な痺れが走る。

ディノはようやく、思い出した。

「ごめん、アーシェ」

俺は成長していない。

あの頃のように、この人を簡単に困らせる、迷惑かけて、怒らせ、泣かせて。

変なやつらに飴でつられて、

肉食マギフロッグの池に自ら飛込んで、

トイレに連れて行ってせがんで、

その背中に馬鹿みたいについてって、

そのくせ、世界は自分が主体だったんだ。怪獣の、まんま…。

「ごめん、アーシェ」

アーシェが首を左右に振る。

「いえ、いかなかった私が悪いのです。言葉にすることに恐怖した、私が。」

違う。

母さんはあの時アーシェの嘘に気付いていたはずだ。だから何も言わず、抱き締めたんだ。

ディノは…自分の愚かさに立ち尽くした。俺は、馬鹿だ。

「アーシェ。」

ディノに呼ばれて、アーシェは顔をあげた。おかしなことに、アーシェの顔は困惑色に染まっていた。

「え？」

それは、ディノも同じだった。

沈黙の中、声を出したのはディノ。

だが、ディノの呼び掛けと全く同時に、違う声が響いたのだ。

アーシェの名を知り、親しく呼ぶもう一人の人間の声が。

「久しぶりだな。」

騎士。

一人の若い騎士が、いつの間にか部屋に佇んでいた。

深い青の制服に、黒っぽい紅のマントを着込み、胸に公章が輝く。宝石と金であしらわれたその公章は、獅子を象っている。

肌が白く、整ったその顔には、服と同じように青い瞳。黒髪の間でその瞳は、冷めた眼光を放っている。

アーシェには、それが何者なのか一瞬で分かった。都で一年共に過ごしたのち、離れてしまった兄弟。もう何年も会っていない、容姿もすっかり大人びた、…だが変わらない雰囲気、面影。

「ルキ。」

アーシェは彼の名を呼んだ。

第四十三話

「背が伸びたな……」

「当たり前じゃない。何年ぶりかしら？」

「随分だ。」

本当に久しぶりなのだろう、二人の会話はどこかぎこちなく感じた。

だが、すぐにそのぎこちなさは消えた。分からない空気感と、昔の懐かしい面影が循環し、二人を和ませる。

「ディノ、だね」

予想だになかった人物の登場で悲しみも自責も吹っ飛び、ただただポケーっと口を開けていたディノに向けられた声。ディノは思わず、はい？、と聞き返した。

「相変わらず、人の話を聞いていないな」

呆れる様な、小馬鹿にする様な表情。

そうだ、こいつは。

「……ルキは意地が悪い。」

「驚いたな、俺を覚えているのか。」

「意地が悪かったってことは覚えてるぜ。」

「良い記憶力だ。」

ルキは笑うと、ディノの頭をぐしゃぐしゃと回した。

「何すんだよ！」

「俺は意地が悪いんだろう？」

そう言って静かにルキは笑った。笑うというか、ニヤリと口を曲げた。

——やっぱり意地が悪い！

「本題に入ろうか」

ルキはそう言うと、突然アーシェに礼をした。騎士独特の、伸びた背筋を腰から曲げる礼。

「ルキ？」

戸惑う、アーシェ。かまわず、ルキは続ける。儀礼的な態度で。

「聖なる祈り子、アーシェ・ジジ。私は王属専属騎士団金獅子団員、国家騎士第七隊隊長ルキ・ノエル。」

「あなたを連れ戻しに来ました。」

「え？」

ルキは礼から体勢を戻す。そして困惑しきったアーシェとディノを交互に見やると、

「久方ぶりだが、時間は無い。準備をしてくれないか」

「どうして？私は祈りのために旅をして……」

「祈りは、誰でも出来る」

アーシェの言葉を遮るようにつむぐ。有無を言わせぬ、冷淡な瞳。アーシェは突然の出来事に戸惑いながらも、毅然とした態度でかえす。

「聖園からの許しは下っています。これは私の試練です。ルキには、関係ありません。」

「家族を、危険な旅に出したくはないんだ。俺も、聖園からの許可はとっている。」

ルキの背に騎士が控えているのが見えた。しらずしらずの内に、

彼の隊の騎士たちに家を囲まれているようだ。

ルキは、本気だ。

「ちょっと待てよ、俺の仕事はアーシエをハシェイブに連れていくことなんだぞ？」

ルキの突然な行動に、ディノが体を乗り出す。

「ディノ、君の契約はここで終了しよう。」

「なんだって？」

「契約を破棄した代償は俺が払う」

ルキは腰から下げていた革袋をディノに握らせた。

ずしりとした感触に、それが大量の金貨であることはすぐに分かった。キャンセル料としては、あまりに破格であるということも。

「礼を言う。今まで、ありがとう。」

事務的な、言葉。

こんな契約破棄の仕方は初めてだった。

ディノはただただ啞然として、ルキを見上げる。ルキはディノとは視線をあわせず、再びアーシエに見直った。

「さあ、帰ろう」

伸ばされた手。

アーシエは後じさる。

「聖園も、聖王も君をとめたいと思っているんだ。君の選んだ試練は、今だかつて誰も乗り越えた者はいない。君の選択は、若気の至り。」

「そんなこと、ないわ」

「君は殺されにいくようなものだ。旅はもう十分だろう？さあ、帰るんだ。」

追うルキの手。

アーシエは後じさるのをやめると、前進した。

「私は、帰りません。」

「死ぬかもしれないんだぞ」

「結構です」

強い意思を抱いた瞳が、ルキに真っ直ぐ注がれる。

「私は、この旅を続けます。ここまで来る途中、様々なことがありました。私は、この旅の意味をより深く心に刻みました。戻りません、私は進む。」

鉄のように硬く、鋼のように鋭い誓いは、都からの旅を越えて、より強固なものへと変わっていた。

アーシエの意思は、もう誰にもとめられないのだ。

共に旅をして、ディノはアーシエの気持がどんどん強くなっている様子を、見てきた。その姿勢が、安易な考えから産まれてきたものではないと、ディノは分かっている。

「アーシエに何を言っても、無駄だぞ」

「その…ようだな」

ルキは小さく呟くと、こうべを垂れた。

止めることが出来ずショックだろう、そう思いよく見ると、…ルキの口許は緩んでいた。

予想外の微笑。その原因は、すぐに判明した。

「思ったとおり、アーシエは相変わらず頑固者だな。まったく、残

念だ…。」

ルキは最初から分かっていたのだ。アーシエが自分を拒むということ。自分を拒み、旅を続けると断言することを。

「ルキ、ごめんなさい…」

「いや…良いんだ、アーシエらしいよ。だから、俺が来たんだ」

ルキは笑って、アーシエの肩を叩いた。真意の分からない言動に、えっ、とアーシエは首をかしげる。

「俺も、行くよ」

アーシエは、ルキの言葉に目を丸くさせる。

「どういうこと、ですか？」

「そのままの意味だ。君が試練に出ると聖王に聞いた時、君の護衛を申し出たんだ。だから、許しをもらったと、言っただろう。」

許可とは、そういうことだったのか。心強い兄弟の申し出に震えるように眩く。

「ルキ、それは本当？」

「なんだ帰りたいのか？」

アーシエは喜びに真っ赤にさせた顔を左右に振った。

「ありがとう…」

ディノは頬を紅潮させるアーシエをじっと見つめた。

ルキがどれ程の実力を持つかは分からないが、かたい絆をもつ者が側にいて共に歩んでくれるということは、アーシエにとって有難く、なによりも嬉しい支えとなるに違いない。ディノにとってもそれは、喜ばしいことだった。

けれど。

嬉しさと同時に、ディノにはなんとも言えない冷めた感情が生まれ始めていた。真つ白な布に落ちゆく滴が染みをつくるように、ゆつくりと広がる重たい感情。

空虚だ。

何故か、空虚だった。

面倒な旅も終って、大金だって手に入れた。キャンセルされたとは言え、比較的大きな仕事を遂げたのだから、ランクだってあげてもらえるかもしれない。

なのに。

どうしてだか分からない。今までにない感覚だった。体にぽっかりと大きな穴でも空いてしまったんだろうか…。

ディノ、と呼ばれ顔をあげると、アーシェが心配そうに顔をのぞいている。

「…なんだよ、見んな…」

なぜだかアーシェと瞳をあわせることが憚られ、思わず顔をそらす。

「ディノ…」

「よかったな、騎士と同行してもらえて、」

「ねえ、ディノ、聞いて」

アーシェの両手で、顔を真正面に動かされる。バチツと、目が合ってしまう。もう動かせなかった。

「…ディノと都会えて、母さんが元氣って分かって、いろんな人に会えて、ユズちゃんっていう、可愛い妹がいるって知って、」

「ルナファラさんのことや…十六夜さんのこと、辛いこともあったけど、」

「楽しかった」

アーシェの言葉がゆっくりと耳に入るのが分かるのに、頭や気持はぐちゃぐちゃで、ひどく遠くから聞こえる。

もう旅はおしまいと、言われてるのは分かる。

「おじいちゃんのこととか、内緒にしてごめんね。そのくせ連れ回して、ごめん。…ありがとう」

言葉が雪のように積もって、どんどん体が冷えてゆく。思考がだんだん白を帯びてゆく。

声がひたすらに遠い…。

けれど。

その言葉だけ、はつきりと聞こえた。

「ディノも来ませんか？」

無音の世界に、ひとつの音がポロンと弾けたようだった。

ディノはハッと我に帰り、聞きなおす。

「なに？」

「契約を延長する形で…来てくれませんか？三人がここで会えたことが私には、なんだか必然だったような気がするんです。おかしいことを言ったって、ディノは思つかもしれないけれど。」

「一緒に、旅をしませんか」

第四十四話

ディノは驚いて声をあげることが出来なかった。アーシエの提案に驚いたのではなく、自分の感情に驚いたのだ。

嬉しさという、意外な感情に。

繰り返されるありきたりな日々から逃れるように里という暖かい籠から出て、だけど彼に与えられたのは刺激的な生活ではなく、冷淡で残忍な現実だった。

夢を見れば盲ろくし、自信をもって飛び出せば屍になる、世界の現実だった。

勝手に死ねばいい。

月に行くという無謀な考えを信じるアーシエに、最初そう思った馬鹿だと心でさげすんだ。

なのにどうして、喜んでいるのだろう。ドキドキと鼓動を高め、頬は紅潮し、唇は気を抜けばゆるんでしまいそうだ。それだけじゃない。

むしろ自分は、この言葉を待っていたような気がした。ずっとずっと、アーシエの言葉を待っていたような気がした。

エドガーに着く前から、里に着く前から、街道を渡る前から…違う、そんなものではない。

…もう、何年も前から。

「あ、アーシエ、俺…」

掌が汗ばむ、体が硬直する。酷く頭が白く、世界でひとりにでもなってしまったように自分の体しか感じられない。ただ目の前に決

断だけがあつて、それが自分を見下ろしている。

デイノは大きく息を吸う。呼吸の間、まるで仕方ないと誤魔化すように軽く決断へと踏み出すにはどうしたらいい、なんていうつまらない体裁が頭に浮かんだ。息をとめた。

そして、デイノは、ゆっくりと口を開く。

「駄目だ」

ズキン、とデイノの全身を冷たい刃が走る。突然、凍てつく海に投げ出された感覚。

中身の無い人形となつて、デイノはソイツを見上げた。

「駄目だ、彼は連れていけない」

デイノの返答をさえぎるように声を出したのはルキだった。ルキは平然とデイノを見下ろす。青い瞳は氷のようにぞつとするイメージをもつて、デイノの前をさえぎる。

「どうして、どうしてそんなことをいうの、ルキ？」

アーシェが問いつめるようにルキの肩に手を置く。ルキは動じず、更に冷たく重い言葉を吐いた。

「足手まといだ」

はつきりとルキは言い放った。きつぱりとした明瞭な断言の声は、三人だけでなく、周囲を囲むルキの配下たちにも聞こえたに違いない。

失礼極まりないルキの態度に、アーシェが顔を高潮させてルキに向かう。

「デイノは足手まといにはなりません。ここに来るまでに、何度も私を助けてくれました。私はデイノがいなければ・・・」

「本当にそうか？」

ルキがアーシェに問いかける。

「聖園で優秀だった、魔法力にも長ける君が助けられた？本当に？」

問い詰めるルキから逃げるように視線を下に流す。

「ええ……。助けられました」

嘘だ。ゼルダ街道でも、里でも、最後に助けられたのは。

（俺のほうだ、アーシエ……）

ディノは身震いした。

ルキがアーシエをじっと見据える。数秒見た後、ルキは小さく冷笑を浮かべた。

「相変わらず嘘が苦手なようだな。俺と話すときは目を見ることだ」
通用しない。アーシエは目を赤くさせて更に俯いた。その様子に悪びれることなく、ルキはため息をひとつつく。そしてアーシエの手をとると、外へ出るよう促した。ディノに背中を見せて。

「まったく、最低ランクの傭兵もどきに命を救われたなど、聖園の名折れだ」

ディノは一瞬、耳を疑った。それはアーシエも同じことだったようだ。

もう数年も会ってはいないとはいえ、ディノは兄弟だ。ルキの言葉は、あまりにもディノの気持ちを無視し、辱めている。

「ルキ！」

アーシエがルキを叱責しようとしたときだった。

「ふざけんな！」

ディノが猛然とルキに掴み掛かった。

だが瞬時にルキの身体が後退し、ディノはそのまま勢いよく床にぶつかる。

辺りにかび臭い粉塵が巻き起こり、周囲が茶色に染まる。だが、荒々しい剣幕のディノはすぐに立ち上がると、床を蹴り上げた。

「やめて！」

アーシェの悲鳴のような声。声はすぐに巻き上がった塵で遮られた。次の瞬間、定かではない視界の中、どすんと重たい音が響いた。ゆっくりと塵が風に流される。静けさと共に状況が理解を伴って朽ちた部屋を見下ろす。

先ほどの音を立てたのはディノであった。そして、ルキの配下の者達だった。白い鎧で身を包んだ騎士たちが、青ざめた表情でディノの身体を床に押さえ込んでいる。騎士たちの手には剣があり、その刃先はディノの急所をいつでも突き刺せるように向けられていた。「ディノを離して！」

アーシェの訴えを無視し、刃は更にディノへと近づく。ルキの命令ひとつでディノは血まみれの死体と変わるのは必死だろう。

それでもディノはルキを睨み付けた。拘束された自身の身体を怒りでぶるぶると震わせて。

・・・血のように赤いディノの瞳は興奮でめらめらと燃えて光る。それとは正反対に、ルキの表情は平静そのものだ。だが、二人が獣のように牙を向け合っていることは誰にも分かった。空気はふとした瞬間に爆発してしまいそうなくらいに緊張している。

「俺は、足手まといなんかじゃない・・・」

ぎらぎらと殺意を放つ深紅の虹彩。しつとりと濡れるそれは、抱かれる感情に反して宝石のように美しい。

「お前に何が分かる・・・」

声色にさえ憎悪が渦巻く。赤く染まった幼い頬を一滴が伝う。それが床に小さな染みを作るのを見届けてから、赤い獣を平然と見下ろしていた青い獣は踵を返した。

「ならば、証明してみせろ」

背中が、離してやれ、と呟く。騎士たちはディノに警戒しながらも、従順にその刃の楔を離していく。

刃の全てが鞘に収められたのを確認すると、ディノは身体をあげた。アーシエは見計らって膝をつく、ディノについた埃を払う。だが、その手はすぐにとめられた。ディノが手首を掴んだのだ。

立ちあがる、ディノ。

これから始まることを予感して、アーシエはディノを見つめたまま首を左右に振った。それが見えていないかのように、ディノはおぼつかない足で歩き出す。

「せつかく出会えたのに、喧嘩しないで！」

庭へと歩き出したディノの背中にアーシエが叫ぶ。アーシエの必死の制止だ。ディノは立ち止まり、だがこう返した。

「これは喧嘩じゃない…決闘だ！」

ディノは走り出す。

すぐにルキの背中に追いつくと、右肩からのびる柄をにぎり、剣を振り上げた。

ディノの背と殆ど等しい剣が太陽の輝きを反射する。そして刃はルキの首筋めがけて振り下ろされた。

第四十五話

ガキイイイン！

鋼と鋼が互いの喉に噛み付く音。

横なぎに放たれるルキの剣は細い光を発してディノの身体へとのはされる。間一髪を飛翔してかわす。ディノはルキの頭上を高く跳び越すと、手入れが忘れ去られた庭に着地する。

「手を出すな！」

ディノの剣戟に驚いて飛び出した騎士たちにルキが言い放つ。

「お前達、見ておけ！これが戦いというものだ！」

ルキは騎士の証である細身の剣を握りこむとディノの喉下めがけて撓らせる。ディノは首をそらすと、それをかわした。

更なる剣の追隨。ディノは戦士の勘で後退する。瞬間、ディノがいた場所に生えていた雑草が姿を消した。

千切れた草が舞う。どこか懐かしい芳香が二人の間を駆け抜ける。

ルキの乱れ突き。細身で軽い剣を生かしたその突きに、ディノはひたすら後退を迫られる。

エリート中のエリート、最年少の金の獅子、その肩書きは嘘ではないのだと、ディノは痛感した。隙が全くない。それどころか、力の格差がうすうす分かる。まるで糸くり人形にでもなってしまったようだ。

こんなやつは初めてだ、とディノは戦慄を覚えた。ディノは今まで様々な者と剣を交えてきた。獣だけではなく、人間、そして亡霊までも。

だが、こんな風に操られていることを感じさせる敵はいなかった。デイノはまさに死神に囲まれ、踊らされているのだ。死はすぐ横にあり、デイノの心臓をぐりぐりと握り締めている。

「どうした？威勢が良いのは口だけか！」

容赦なく放たれる雷撃のような剣先。デイノは弾く事も出来ずに間合いを離す。詰められては離し、詰められてはまた離す。

「ゆくぞ！」

その一言にぞつとして、デイノは大きく大地を蹴った。

瞬間、どすんと背中を打ち付ける。予想外の衝撃に、デイノはハッとした。この家を囲むように植えられた木のひとつに背中を打ったのである。

気づかないうちに、ここまで追い詰められていたとは。なんてことはない、ルキはデイノの動きだけではなく感情をも手の内にしていたのである。

「どうやら、決着はついたようだな、足手まとい」

侮蔑の言葉とは違い、ルキの表情は真剣そのものだ。この男は言葉と武器と共に使っているが、感情においては平常そのものなのである。デイノは奥歯を噛んで俯いた。

「金を握って都へ帰るがいい。雇われ戦士などやめて、畑でも耕すんだな」

ルキの毒に、デイノはまったく反応しない。戦意を喪失したのだろう。緊張を軽く緩ませて、ルキはデイノに向けた剣を下ろそうと……した。

「バカいうんじゃないよ」

デイノがようやく、顔をあげる。その瞳に、炎は燃えたままだった。

「俺みたいなのピチピチな十四歳はな、戦士でもやってねーと退屈で……死んじゃうんだよッ！」

ディノの大剣がルキの下顎を割るために振り上げられる。なんなくルキはそれをかわした。勢いづいた刃は止まらない。ディノは頭上で刃の円を描いた。

「どこを狙っている？俺はここだ」

「う・る・せ・え」

ディノは次の瞬間、驚いたことに前ではなく後ろに動いた。当たり前のように、背中を樹皮で強く打ち付ける。ディノの奇怪な行動に眉間に皺を寄せるルキ。だが、行動の答えはすぐに判明した。

ディノが伐ったのであろう。大木が無数の葉とともにルキめがけて落ちてきた。

「くう！」

想定範囲になかった攻撃に視界を妨げられ、ルキは横に逃げる。

大木の下敷きになるのをまぬがれたものの、強くしなった枝に肩を打ちつける。利き腕に響く激痛。思わず細めた瞳に、休ませることなくディノの姿が映る。

「うおお！」

ルキの額めがけて振り下ろされる剣。だが、これもルキは剣で流した。枝に逃れられないと瞬時に判断し、いつの間にか剣を持ち替えていたのだ。剣と剣がすれ違う。ディノは右へ、ルキは左へ。獣達は大きく間をとりあう。

はぁはぁ、と熱い息が肺に押し上げられて激しく吐き出される。ようやく取れた間を確認したと同時に、どっと体から汗が噴出したのが分かる。ディノはただらと流れる汗をふき取ることもせず、じっとルキを見据えた。・・・ルキは、殆ど汗をかいていなかった。あの、「言葉」が響く。

―アシデマトイ―

泣いてしまいたかった。心底おそろしかった。

ディノはこれまで、生と死が激しくぶつかり合う戦いを幾度も経験してきた。幼い頃はキリアにみっちり剣技を叩き込まれた。雇われるようになってからは大人たち相手に異種格闘をしてきた。だから僅かに自信があったのだ。いくら四歳の差があるとはいえ、もう何十年と戦争をしていない国に使えるお坊ちゃま騎士に負けるはずがないと思っていた。

それがなんだ。この力の差は。

いつたいなんだ。俺は。

俺は・・・。

「もう遊びはお終いだ」

ルキが急に構えを変えた。利き手だけで剣を握り相手へと向ける、伝統的な騎士の構えではない。両手で剣を握り、斜めに構えるという、見たことのない構えだ。そして何故か、ルキは黙祷するように深く瞼を閉じた。

馬鹿にしているのか？急所がから空きだ。

ルキの奇妙な構えに、だがディノは動くことができなかった。この男が、わざわざやられるようなことをするはずがない。

不思議なことに、周囲にいる騎士たちが後退している。その顔に浮かんでいるのは怯えだった。

ディノは考え、防御を選んだ。

「良い心がけだ…」

そう、ルキが呟いた。と同時に、剣が鈍く輝きだす。色は夕日のような赤。いや、炎。

どこか、見覚えのある光景だ。そう思ったとき、ディノに浮かんだのはふざけた考えだった。

嘘だろう？それは不可能だ。

・・・それは、多くの者が挑戦し、だが実現せずに爆死してきた

こと。鋼の流れに逆らわない聖なる力ならまだしも、その力が剣に宿るわけがない。

魔法を剣に宿らせるなんて

「あああつ」

ディノは自分の考えを否定するように走り出した。無表情に徹していたルキが、僅かに眉をよせる。

「バカ野郎・・・！」

瞬間、ルキの周りから光が四散し、ディノの身体が、いや周囲が真っ赤に染まった。

火達磨になったのだと、すぐに理解するが、なす術がない。炎は大きな舌となり、ディノの身体を蝕み、食らう。炎がぶくぶくと膨張し、火柱を形成する。

そして今度は恐ろしい速さで収束すると、ディノとルキの間で小さなひとつの点となり、再び轟音を響かせて爆裂した。

身体を動かすことができない。全身は熱さも痛みも超えて感覚がない。息すら、できない。瞬きさえもできない――。

ディノは、すべてが真っ白になった中、自分が倒れたことを意識の奥底で感じた。誰かの声が遠くからしたが、誰のものなのか予想がつかなかった。どんどん遠ざかる意識。どんどん失われる感覚。

ディノは、意識を失った。

第四十六話

霧雨が朝とともに髪の毛を撫でていた。朝もやに囲まれていて、視界がひどく悪かった。

ディノはひとり、展望台の上に、いた。

ここがどこなのか、ディノは勿論わかっていて。里の入り口にある、監視用の展望台だ。頭上では襲撃用の鐘がぶら下がっていて、もう何十年も鳴らしたことがないのだ。

今日がいつたい何日なのか、今日なにがあるのかも、ディノは知っている。今日はみんながいなくなった日だ。

展望台の格子の間から見下ろす景色には、人はひとりも映らない。そればかりか、影さえもない。静寂が厳かに寝息をたてるばかりだ。ディノは不思議と寂しさを感じていなかった。なぜなら、自分がこうなることを知っていたからだ。もうずっと前から知っている。ディノはいつも置いてけぼりをくらうのだ。

ディノは沈黙の中、胸に抱きしめていた木彫りの熊を撫でた。紅葉の手が少しざらついた樹の肌をなめる。無感情でなでさすっていると、ちくんと痛みが走った。みると、棘が刺さっている。しばらくそれを見つめてから、ディノは展望台から降りることにした。

展望台の脇にある縄に繋がられたザルにゆっくりと入る。すると、ザルは地面から大きな石を持ち上げる代わりに、ゆっくりとディノの身体を大地へと下ろしていった。

地面に降下してから、ディノはザルから降りる。ザルは今度はものすごい速さで持ち上げられ、かわりに石が落ちてきた。石は大体あかんぼうくらいの大きさをしている。幼いディノより、ちよつと軽いくらいだ。

幼い？あれ？

そう思い、手のひらを見つめる。なんて小さい手だろう。歩き出すと、足元がふらつく。頭が重いのだ。

そうだ、僕はこんなに小さい。

自分の幼さに驚きながら、デイノは歩いた。誰もいない里の間を、とぼとぼとひたすら進む。本当に生きるものはデイノしかない。

おぼつかない足取りで、向かう先は勿論、家だ。この間ひっこした、新しい家。

そういえば家に来る前、キリアはこういつていた。「新しいお友達に会いに行くんだよ」

だけど、その言葉は間違いだった。デイノはわくわくして里に着いたが、デイノと友達になってくれるものなど誰一人いなかった。そればかりか、同年代のこどもさえいないのだ。

友達はいない。そして今は、キリアもいない。

デイノの周りには、誰一人、いない。

デイノは立ち止まった。そして周囲を見渡した。

テントのような変な建物で作られた閑散とした里は、死んだように息をひそめる。

「誰も、いないの?」

か細い声が静けさを押しやる。

「僕はここにいるよ、本当にだれもいないの?」

今度は叫ぶように周囲に呼びかけた。それでも返ってくる声はない。デイノを、ただ沈黙だけが見つめている。

「どうして、」

デイノがぐしゃりと顔をまげる。喉の奥が痺れるように熱くなつて、うまく呼吸ができない。

「どうして、」

吐き出す息はひどく熱っぽい。指先は寒くないのにぶるぶる震えている。

「どうして、」

首の後ろが、ひどく痛む。
たまらない。

「さびしいわけがないじゃないか！」

ディノは嵐のように絶叫した。だが木霊するのは自分の声だけ。叫んでも返るのは自分だけ。

ついにディノは疲れきって、大地に膝をついた。まだ柔らかな肉にはガサガサに乾いた大地は優しくはないが、かまわずディノは横たわった。もう、なにかもがどうでもよく感じられた。叫んでも叫んでも、ディノは置いていかれる。待ってと懇願しても、連れてってと駄々をこねても、おいてかれる。

ひとりならば、死んでいることと同じじゃないか。

ディノは目を瞑った。とめどめなく涙が溢れてきた。悲しみなのか、怒りなのか分からない。

眠ってしまいたい。なかったように眠って、忘れてしまいたい。生きている、ことを・・・。

「おい、何してんだよ」

突然の声。目を開いて、ディノは飛び上がった。

「いつまでも寝てんじゃねーよ」

声の主。それはルキだった。四歳歳の違う自分の兄。ルキは呆れたような顔でディノを見下ろしている。同じ子供なのに、ルキは変に迫力がある。ディノは思わず、へたりこみそうになった。

「大丈夫？泣いてるの？」

ルキと打って変わって迫力のマイナス点な声。アーシェだ。ルキ

の背に隠れるようにして、少し背の高いアーシェが微笑んでいる。

「泣き虫は駄目よ、あんまり泣いていると病気になってしまっただから」

そう言うと、アーシェはディノに手をのばした。意味が分からず頭を傾けると、アーシェがのばした手でディノの手を握り締めた。

「一緒に、いこう？」

意外な言葉に驚いて、アーシェを見上げる。

「置いていくんじゃないの？」

「なんだ、置いてって欲しいのか」

ディノの質問に、ルキが笑って言う。ディノはぶんぶんと勢いよく頭を左右に振った。あっそ、と言ってルキは歩き出した。アーシェもそれについて行く。勿論、ディノも続いた。二人にくらべ、なんて拙い足取りだろう。ふらふらになりながら、それでもディノは必死に続く。どこまでも、どこまでも。

いつの間にか霧雨はやんで、朝もやの向こうに青空が見えていた。

ディノはゆっくりと目を開けた。頭が少し重たく、喉が渴いている。どうやら、眠って夢を見ていたらしい。どのような夢だったかはもう忘れていたが。

身体を僅かに動かすと、きしんだ音が身体を包む布団の向こうから聞こえた。どうやら、木のベットに横になっているようだ。身体は頭と違って不思議と軽やかだった。顔を少しそらすと、窓が目に入った。ガラスの向こうに映る景色は、エドガーとも違う見知らぬ土地だった。エドガーに比べて建物が低く古く、田舎町であることは予測できる。

「起きたか」

ディノの目覚めに気づいて声をかけたのは、ルキだった。いつもどおりの無表情だ。だがどこか、その感情の見えない顔に親しみを覚えた。怒りも憎しみも、不思議と消えている。

「ここは、どこだ？」

「ハシエイブだ」

「ハシエイブ？なんで？アーシエは？」

質問攻めに面倒そうな顔を見ると、ルキはディノのすぐ横を指し示した。促されるように見やると、アーシエがベットの脇に上体をあずけるようにして眠っている。すやすやと眠り、ときおり微妙に笑みを浮かべる。なんだか気持ちの悪い寝顔だ。

「さっさと準備をしろ、それが起きたら出発だ」

「へ？」

ルキの言葉の意図が分からず、ディノは凝視を返した。ルキはディノとアーシエを交互に何度も見てからため息をつくと、

「足手まといじゃないんだろう？」

とだけ呟き、きびすを返した。

寝室を出て行くルキの背中を目だけで追ってから、扉が閉まるのを確認し、ディノは再び横になった。呆然としながら、ルキとの会話を思い出す。

ハシエイブ・・・アーシエが起きたら・・・出発・・・マジかよ？

こみ上げる嬉しさ。まるで湧き水のように体中を満たしてゆく。我慢できなくなって、ディノは街中に聞こえるような大きな大声とともにガッツポーズをした

「おっしやああ~~~~!!」

アーシエが、小さく痙攣した。

第四十七話

ディノの勢いにアーシェはびくんと起きると、目をパチクリ瞬いた。

「……おはよう、ディノ」

ほんわりと微笑む笑顔は、とても喜びに溢れたものだ。決闘により意識を失っていた間、彼女はずっと心配していたのだろう。

アーシェは水を、と呟くと、床に置いてあった水瓶からコップに水を掬いとり、ディノに手渡した。

眠りすぎた手が、軋みながらもディノの口に水を運ぶ。

ディノは水を一口含んで、ようやく喉が渴いていることに気付いた。コップの水を飲み干すと、今度は水瓶を持ち、それを豪快に喉に流し込む。

口から溢れた水で毛布をびしゃびしゃにした頃、ようやく喉の乾きは収まった。

ディノの様子に笑みをこぼしながら、アーシェが問掛ける。

「痛いところはありますか」

「ん、ヘーキ。飲みすぎで苦しいくれえだな」

ディノはたぶたぶとうねる腹を叩いて明るい声を返した。声の反面、感情はほの暗いものだった。それは、落とされた視線が標している。

濡れた水瓶の底に映る己の顔。幾度も目にした、変わらぬ眉ね、瞳、頬、唇。都を旅だった頃と何一つ変わりはない。

けれど、

「アーシェ」

「なんですか？」

「俺も、行きたい」

ディノの唐突な言葉に、アーシェは目を丸くさせた。驚きに象られた網膜には、対照的に、ディノの飄飄とした表情が転写される。

待ち望んでいた言葉だったのでアーシェはすぐに答えた。

「ディノ、勿論ですよ、三人で旅を」

「違うんだ」

弾くような言葉。意外な返しに、アーシェは真意が分からず眉間に皺をよせる。

「ディノ？」

「そういうことじゃ、ないんだ」

呟き、顔をあげるディノ。その表情は緊張が抜けただけで、屈いたものではなかった。

燃える双鉾は静かに燈を光らせる。どこか苦悩しているようにも思える。

ディノの目は懇願を呈していた。そう、彼はすがっていた。

「アーシェ、俺はさ、」

吐き捨てるような口火。だが、口調は穏やかに。

「なんだかよく分からないんだよな、いつも」

「え？」

「俺は、月に行くっていうアーシェの目標を、馬鹿馬鹿しいと思ってたんだ。叶うはず無い、死んでしまうのがオチだって。アーシェにもそんなこと言ったよな。」

「けど、それはさげずんでたわけじゃないんだ。たぶん、そうだな、……アーシェのことが羨ましかったんだ」

口にして、頷く。

「うん、羨ましかった。俺は何かに、無謀なことなのに、挑戦するっていう気持ちをもてるアーシェが羨ましかったんだ」

だって俺は、と呟いて、ディノは黙り込んだ。
だが、意を決したように。

「ここではない何処かに行くんだって気持ちで里を出たんだ。なんか、なんだろう……里は俺の本当の居場所じゃない気がした。どこか足りないような、自分の力を出しきれない、そんな気がした。だから、やるんだってはりきって、出たんだ」

なのに、

「やりたいことをやるんだ、楽しいことをしてやるんだって、そう思って出てきたのに。なのに俺は結局、おんなじだった。里と同じ。安全な場所において安全な仕事を選んで愚痴ばかりを溢して、だから当たり前、足りなくて」

だから、

「バカにしてたんだ。夢を語って夢に向かうやつらを、バカにして、自分の気持ちを押し潰してた。それで、死んだら安心するんだ、俺は正しいって、俺は間違っていないだって。……俺は心の底ですつと、アーシェの旅が失敗することを望んでたんだ」

核心。

熱意に感化されながらも、その熱に飛込むことが出来ず、そればかりか醜い嫉妬を抱え、それを隠すようになりその善意で塗りたくった心。歪みきってしまった、羨望。

自分を否定するのが恐ろしくて塞いでいた本心が、堰をきり溢れる。罪悪感を伴って、それはディノの首を僅かに絞める。

ふと、ディノの耳元に、鈴のようなアーシェの呼び声が鳴った。声に促されるようにディノは続ける。

「それだけじゃない。俺は、ルキが言ったとおり、足手まといなんだ。ここに来るまで、何度もアーシェに助けられた。もし、一緒に旅へ出たら、きっと迷惑がかかる」

震える声。気を緩めたら、涙が流れてしまいそうだ。

「俺は、足手まといなんだ」

暗い心の奥底から、冷たい視線がディノを見つめている。その主を、ディノはしっている。

過去の自分。先ほどまで自分だと思っていた、殻。寂しい音をたてながら、じっと見据える。戻ってこいと、脅えている。

ディノはその殻を一蹴するように、強く言い放った。

「だけど俺、行きたいんだ」

強く、強く。

「もう自分に、嘘は吐きたくないんだ。俺は弱いけど、俺は卑怯だけど、行きたいんだ」

ディノはアーシェに体を向けると、そのまま頭を下げた。布団に

頭がつくほど、深く下げた。

そして、震える声色で、懇願した。

「俺をどうか、連れてって下さい」

薄い涙と熱い喉でかすれた、ディノの訴えを、アーシエは無言のまま見つめる。

暫くの沈黙。酷く静かな、部屋の空気。

アーシエはひたすら沈黙を続けている。言葉でも失ってしまったかのように。仕方ない、見損なったと思われるでも仕方ないほどに、酷いことを言ってしまったのだから。

絶望が、侮蔑するかのようにこみあげる。

「お願いだ……」

今にも消え入りそうな声色。ディノは祈るようにきつく目を閉じている。この願いを、掴むために痛みを伴うほどに願う。

そんなディノの肩に、ふいに温もりが染み込んだ。ディノは、恐る恐る顔をあげた。

アーシエが、微笑んでいる。

「ねえ、ディノ。私も、同じなの」

「え？」

呟きに似たアーシエの言葉に、ディノは驚いて問掛けた。同じとは、どういうことか。

アーシエは言葉を探しながら、ゆっくりとディノの手を握り締める。

「私も弱い、私も、すごく怖い、本当は、ずっと……」

逃げて、しまいたかった。

その言葉に、デイノは酷く困惑しながらアーシェを見つめた。鋼のような決意を持つアーシェの、意外な感情。

いいや、確かにそこにはあった。光をたたえて揺れる瞳の奥底に。今まさに、ようやく、デイノは少しの脅えを感じとっていた。

「だけど、デイノに会って、頑張らなきゃいけないと思ったの。仕事でも、私のために色々なことを教えてくれて、剣を振ってくれた。だから不安でも、怖くても、前に進もうと思った。引きかえしじゃないかと思えた」

いつから、すくみあがっていたのだろう。どうして、気付かなかったのだろう。

「私は、デイノがいたから、旅を続けることができた。そしてこれから、本当の意味で旅が始まる。けれど、私は止まらない。だけど、やっぱり怖いんだ」

アーシェの決意は、けして強いものではない。けして、己だけの感情から生まれるものではなかったのだ。

「アーシェ……」

二人は、傷付きやすい、痛いほどの思いを互いに抱き、ずっと隠していた。同じ、という言葉は、あまりにも正しい。一人は諦めで、一人は決意で、熱を隠していたにすぎなかったのだ。

「私は、自分の弱さを受けとめるために、そして旅を続けるために、
デイノと一緒にいきたいの」

最初から二人は、互いに反応しあい、変化していた。
出会ったときから二人は、共に道を歩んでいたのだ。
そう、ずっと。

「一緒に、旅をしませんか？」

ハシエイブの最西に、失われた国境はある。“失われた”と添えられた理由は、そこが既に国境の意味を無くした場所であることをさす。

東を見ると、竜を神と崇める国エアドラド。西を見ると、草ひとつない不毛な砂漠、灰の大地。

かつて大きな国があった西の大地に、生きる人はいない。世界に穴を空けたようにばかりと、人が分布していない場所。

灰の大地より西に行けば、人はいらるだろう。東に行けば、人はいらるだろう。南に行けば、人はいらるだろう。そして北には海がある。灰の大地に、人はいない。

それ故に、ハシエイブのこの場所は失われた国境と呼ばれていた。そして今、デイノたちは失われた国境に立っていた。

「ルキ様、気を付けて下さいね。くれぐれ無理は、なさらないように。我々はルキ様の帰りをずっと待ち続けますから」

ルキの部下のひとりが、感極まってルキの手を握り締める。苦笑するルキ。

とは言っても、気持ちが高揚するのはルキだけだ。ルキを囲む騎士達はみな、目に涙を浮かべている。

彼等はよほど、ルキの指導力に惚れているのだろう。あるいは信賴し、尊敬しているのだろう。

それが自身にはもったいないように思え、ルキは照れるように答えた。

「ああ、また共に剣を振ろう」

熱く握手を交すと、ルキの手はほどかれた。ゆっくりと踵を返し、味わうように一步を踏みしめる。後ろ髪をひかれるように、ゆっくりと。

——ルキが次を守るべき者達のところへと。

「女々しい部下がいると大変だなあ」

デイノは、待ちすぎて固くなった筋肉を伸ばすように立ち上がると、溜め息をついた。その動作に、ルキはニヤリと口を歪める。

「お前も、似たようなものだろう」

「はあ!？」

「決闘は、駄目ですよ」

すかさず、二人の間に飛込むアーシエ。焦りの中、不安そうに止めるアーシエに、ルキは微笑みながらかえした。

「決闘ではなくて、躰だ」

「はあ!？」

「駄目ですってば!」

オドオドとするアーシエ、早くも闘志を燃やすデイノを交互にみると、ルキは面白そうに目を笑わせた。

「冗談だ。早く進まなければ、砂漠の真ん中で枯れることになるぞ」
器用に話を折られたデイノは「はい、はい」と適当に答えて、砂

漠へと足を進める。

「ふふ、頑張りましょう！」

三人は深く深く、前方に広がる世界を見据えた。

上空には青い空が丸く浮かび、風化し割れた大地には砂が舞っている。境がぼやけ、空と池が霧のように溶けこむ。照り付ける日差しは、痛いくらい強い。

ディノは背伸びをしながら、その情景の遥か向こうを仰ぐ。世界にぶつかるとように、全身を伸ばしながら呟く。

「そんじゃ、」

足を前へと、背後にある光に押し出されるように、前へと。

願いを託されているのも自分で、背中を押されているのも自分だ。優しい暗闇から目覚めて、自分が自分の前をゆく。足を進める。今、ただ、ひたすらに。

「……行こう！」

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6985n/>

DRAGNOAH

2010年10月9日16時37分発行